広島女学院中学高等学校 スーパーグローバルハイスクール（SGH）

研究報告書　第５年次（平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月）

目次

1 事業の実施期間 2
2 指定校名 2
3 研究開発名 2
4 研究開発概要 2
5 管理機関の取組・支援実績 3
（１） 実施日程 3
（２） 実績の説明 3
6 研究開発の実績 8
（１） 実施日程 8
（２） 実績の説明 8
7 目標の進捗状況，成果，評価 44
（１） 生徒の変容 ― グローバルリーダーとしての力がどれくらい身についたのか 45
（２） 実績の分析・成果・評価 53
（３） 学校の変化 72
8 ＳＧＨ指定明け以降の課題及び改善点 75
（１） 今年度の活動から 75
（２） 生徒や学校体制の変化 84

添付資料：

① 平成 30 年度 教育課程表

② 平成 30 年度 広島女学院中学高等学校 SGH 研究発表会（第 1 回・第 2 回）

③ 広島女学院３ポリシー・キーコンピテンシー

④ 広島女学院キーコンピテンシー　ルーブリック

平成 31 年 3 月 29 日

研究開発 実施報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　広島市中区上幟町 11－32
管理機関名　学校法人　広島女学院
代表者名　　理事長　中川 日出男　　㊞

平成 30 年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成 30 年 4 月 1 日 ～ 平成 31 年 3 月 29 日

2 指定校名

学校名　　広島女学院中学高等学校
学校長名　渡辺　信一

3 研究開発名

「成長目標の共有を通じた生徒・教員協働による高大連携型グローバル人材育成」

4 研究開発概要

研究開発の目的は，本校がめざすグローバルリーダー，「核の惨禍のない世界を創り出す，しなやかな女性」を育成することである。そのためには，中高の教員集団，生徒，連携先の大学がこの目標を共有することを通じて，価値観の違う他者と出会い，確かな「平和観」「対話力」「リーダーシップ」を培うことが重要である。

教員組織として，従来の部署を統合した「グローバル教育推進部」を立ち上げ，同部を中心に**課題研究の具体案**を作成し，教育の方法を**学校全体で共有**しながら，**成果を定期的に報告**し，課題を随時検討していく。

ヒロシマの理解と発信を基盤におきつつも，**グローバル規模での社会課題を探求**し，**当事者と対話を通じて平和を共創していく課題研究**は，先にあげた「平和観」「対話力」「リーダーシップ」の養成を意識したプログラムとなっている。

昨年度に続いて本年度も，新たな海外・校内の研修プログラムを立ち上げるとともに，高 1～3 の学年で“Global Issues（GI） Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ”を開講し，**より高い意識をもったグローバルリーダーの育成**を目指している。さらに海外の中高生を本校に招き，平和構築に向けて討議する“Peace Forum”を実施し，これまでの学びを具体的な実践につなげることができるよう，工夫を凝らしている。

実施にあたっては，広島市立大学・広島平和研究所，東京大学(首都大学東京)，広島女学院大学といった高等教育機関や学生などと密接に連携すると共に，新たな連携先を開拓しさらなる生徒の成長を促す。

5 管理機関の取組・支援実績

（1） 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(a)経理事務の管理	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
(a)事務職員の雇用	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
(b)運営指導会議			→			→			→	→	→	
(b)グローバル教育アドバイザーの雇用	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
(c)成果普及			→	→		→		→	→	→	→	
(d)英語外国人講師の雇用	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
(d)TOEFL 講座講師の雇用	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
(e)広島女学院大学との連携				→		→			→	→	→	

（2） 実績の説明

（a） 経理事務の管理・事務職員の増員

昨年に引き続き，SGH 事務業務を担当する事務職員を雇用し，**SGH 活動のためのリサーチ，SGH の実践ブログの英訳，研究会開催に向けての事務的作業，経費の処理，**その他，SGH 活動のための多方面の業務を担当し，本校の SGH 事業をフォローしている。また，管理機関として本校のグローバル教育を充実させるため，グローバル教育アドバイザーの雇用に加え，**外国人講師や TOEFL iBT 対策講座の講師を招聘**し，より充実した教育実践になるよう予算を計上し，執行した。

（b） 運営指導会議・グローバル教育アドバイザーの雇用

本年度は，年 2 回実施した研究発表会（6/15・2/23）に加え，3 月 14 日，3 月 16 日に，運営指導会議を行った。

本校の教育目標（アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー）の策定，ルーブリック評価構築については，校内で作成したものを関西国際大学学長の濱名篤氏と検討し，助言をいただいた。また，水王舎 代表取締役社長の出口汪氏からは**生徒発表の論理的思考力育成**と授業実践方法について，**英語 4 技能教育の実践**については日本英語検定協会の佐伯一行氏にアドバイスをいただいた。広島市立大学・広島平和研究所教授の水本和実氏からは，**課題研究の具体的内容について多数のご助言**をいただき，SGH 指定明けに向けた課題の修正について討議した。

またグローバル教育アドバイザーとして，一橋大学大学院および慶應義塾大学特任教授で Institution for Global Society 株式会社代表取締役の福原正大氏に，これまでの 4 年間と同様定期的に来校いただき，生徒対象の授業及び教員対象の研修会を開催し，教育全般について助言をいただいた。

今年度は，SGH 指定明けに向けて具体的なヒアリングを行ったが，その中で見えてきた課題については，**８ 次年度以降の課題及び改善点** で言及する。

（ｃ） 成果普及

研究開発成果発表と普及に関する取り組みとして，**年 2 回研究発表会**を実施するとともに，地域の研究会に積極的に参加し，本校の取り組みについて発表した。

【第 1 回 SGH 研究発表会】

開催日時：2018 年 6 月 15 日（土）11：00～16：00
会場：広島女学院中学高等学校
テーマ：SGH 校連携による課題研究の深化
スケジュール：添付プログラム参照
参加者：14 名（SGH 校・SGH アソシエイト校教員，県内外の高校教員，大学院生 他）
概要：ピースボート共同代表・核廃絶国際キャンペーン（ICAN）国際運営委員　川崎哲氏による講演「核廃絶に向けて動き出す世界」
SGH 指定校の渋谷教育学園渋谷高校，長崎県立長崎東高等学校および本校生徒によるプレゼンテーション，パネルディスカッション
本校の SGH プログラムに関する情報交換会を行った。
評価・反省：
基調講演では，川崎氏の高校・大学時代の経験と現在の仕事とのつながり，市民が世界の課題を解決していけるという示唆をいただいた。SGH3 校のプレゼンテーション・パネルディスカッションでは，それぞれの視点からみた平和構築・核軍縮のアプローチの違いが理解を深めさせた。本校はもちろん他校の教員にとっても ，課題研究の成果について発信し普及させすることができた。

【第 2 回 SGH 研究発表会】

開催日時：2019 年 2 月 23 日（土）13：30～17：00
会場：広島女学院中学高等学校
テーマ：SGH 5 年間の評価と，次年度以降の取り組みについて
スケジュール：添付プログラム参照
参加者：30 名（SGH 校・SGH アソシエイト校教員，県内外の高校教員，大学院生 他）
概要：Institution for Global Society 株式会社代表取締役・一橋大学院特任教授・慶應義塾大学特任教授　福原正大氏による講演「グローバル化と AI が進展した 2040 年の社会で幸せな人生を歩むために」
本校の SGH 5 年間の総括を報告するとともに，次年度以降の新たな取り組みについて説明した。その後，運営指導委員の出口汪氏，福原正大氏，渋谷教育学園渋谷高等学校副校長の高際伊都子氏，本校卒業生の今村るな氏，および本校校長の渡辺信一の 5 名によるパネルディスカッションを実施した。
評価・反省：

本校の SGH 指定 5 年間の成果と課題について総括し，指定明けの教育構想について説明した。パネルディスカッションでは，登壇者より本校の強みと改善すべき点について指摘していただき，参加者からは新しい教育活動のヒントを得られたと高い評価をいただいた。

【SGH 全国フォーラム　主催：文部科学省　筑波大学】
開催日時：2018 年 12 月 15 日（土）10：00～17：00
会場：東京国際フォーラム
東京都千代田区丸の内三丁目 5-1
参加者：全国の SGH 指定校教員・関係者他
概要：SGH 指定校の取り組みに関するポスターセッションなどを行った。

【広島県高等学校教育研究・実践合同発表会】
開催日時：2019 年 1 月 25 日（水）
会場：広島県立大学 サテライトキャンパスひろしま
テーマ：スーパーグローバルハイスクールにおける教育実践報告
概要：本校が開発しているグローバル人材育成教育の概要を説明し，その成果と進捗状況についてプレゼンテーションを行った。

【SGH 等 8 校合同 カンボジア研修 研究会&成果発表会】
開催日時：2019 年 1 月 5 日（土）～6 日（日）
会場：奈良ユースホステル
テーマ：スーパーグローバルハイスクールにおける海外研修の実践報告
概要：カンボジア研修を実施している **SGH 校およびアソシエイト校の 8 校が集まり，各学校の研修成果を発表**した。また，カンボジアについてより深く知るために，講師を招き，講演会も行った。
参加校：奈良県 西大和学園高等学校・三重県 四日市高等学校
岡山県 岡山学芸館高等学校・東京都 昭和女子大学附属昭和高等学校
兵庫県 関西学院高等部・東京都 啓明学園高等学校
広島県 広島女学院高等学校
和歌山県・和歌山信愛高等学校（アソシエイト）

【本校文化祭における成果報告】
開催日時：2018 年 11 月 3 日（土）
会場：広島女学院中学高等学校
テーマ：国内外の研修，各学年の PS，その他の取組のポスター掲示
参加者：約 400 名（ポスター掲示会場の入場者数）
概要：会場に入場した生徒や保護者，外部の方に本校の取り組みを紹介した。

【本校オープンスクールにおける成果発表】
開催日時：2018 年 7 月 16 日（月）
会場：広島女学院中学高等学校
テーマ：国内外の研修について

参加者：約 450 名（参加した生徒数）

概要：参加した生徒や保護者，塾関係者等に本校の取り組みを紹介した。

【教育講演会】

〈北岡美佐子さん教育講演会〉

開催日時：2018 年 11 月 9 日（金），10 日（土）

会場：広島女学院中学高等学校

テーマ：国際社会における女性キャリアの可能性

参加者：92 名

内容：卒業生でニュージーランド大使館に勤務する北岡氏からは，「国際社会における女性キャリアの可能性」と題して講演していただいた。本校の卒業生でもある北岡氏から，本校での学び，とりわけ平和研究を通してスタンフォード大学に進学し国内外でキャリアを積み重ねた経験についてお話しいただいた。課題研究を中心に自己推薦書を書き海外進学を勝ち取るという内容は，本校はもちろん他校の教員にも有益な情報となった。地元公立校の教員で担任しているクラスに海外進学を希望する生徒がいるという方には，講演後個別に相談に応じた。他校の保護者からも問い合わせがあり，今後も海外進学について情報を発信してほしいという要請を受けた。

〈松本茂先生教育講演会〉

開催日時：2019 年 1 月 18 日（金）

会場：広島女学院中学高等学校

テーマ：これからの英語力とグローバルマインド

参加者：8 名

内容：海外に行かずとも日本国内がグローバル化していく中で，多様な背景を持つ人々とどうコミュニケーションをとっていくか，示唆に富む内容であった。座談会では本　校の英語教育について報告しながら，参加者と松本氏の質疑応答の時間をもった。本校の生徒ともに，本校の保護者・近隣の教員も参加しており，英語教育の刷新について広めることができた。

〈高原孝生先生教育講演会〉

開催日時：2019 年 3 月 16 日（土）

会場：広島女学院中学高等学校

テーマ：平和学からみた核軍縮

参加者：14 名

内容：高原孝生氏からは，「平和学からみた核軍縮」と題して，核兵器廃絶署名活動を共に行う近隣の高校生と講演を聞いた。高原氏は本校の平和構築研究の意義を改めて説明していただき，高く評価していただいたうえで，高校での課題研究を大学での学びにつなげる視点を提示された。

【その他】

日時	研 究 会 名	
6/13	塾対象説明会	主催：広島女学院中学校
9/29 10/13	保護者対象入試説明会における成果発表	主催：広島女学院中学校

2/9	本校オープンスクールにおける成果発表	主催：広島女学院中学校
2/23	岡山学芸館高校 SGH 研究発表会	主催：岡山学芸館高等学校

（d） 英語教育の刷新（5 年目）

コミュニケーションツールとしての英語力を磨いていくことがグローバルリーダーとしての必要条件であるため，今年度も，**英語検定準 2 級以上の取得者に対して入学試験において優遇措置**をとり，**中学校全学年で英語選抜クラス**を設置して，英語のスキルアップを入学時から計画的に進めてきた。

昨年同様に**グローバルリーダー育成プログラムと同時並行で TOEFL iBT・英検対策講座**を開設し，高い英語能力を備えた中 3～高 3 まで生徒 48 名を選抜し，英語 4 技能に磨きをかけてきた。今年度の取り組みは以下の通りである。

学年： 中 1～中 3 **対象人数**： 20 **名**

課題研究に関する活動・取り組み

刷新内容： 英語選抜クラスの開講

実施日（月）	**実 施 の 概 要**
通年	対象：入学時に英語検定準 2 級以上取得しているもの 目的：4 技能にわたる英語力の飛躍的な向上 内容：「英語で英語を学ぶ」をコンセプトにハイレベルの英語授業実施 1 年間を通して，週 6 時間の授業うち 3 時間は日本人講師がオールイングリッシュで担当し，長文や映像を題材にディスカッションを中心に授業を行った。残りの 3 時間はネイティブ教師が担当し，会話やプレゼン，文法などを学ぶ授業を展開した。 備考：自主学習用教材 e-learning については各自で取り組むこととする

学年： 中高全体 **対象人数**： 48 **名**

課題研究に関する活動・取り組み

刷新内容： TOEFL iBT・英検対策講座の開講

実施日（月）	**実 施 の 概 要**
通年	対象：中学生希望者，高 1～高 2 GI 参加生徒，その他高校生希望者 日程：2018 年 4 月～2019 年 3 月（ただし長期休暇中を除く） 目的：TOEFLiBT 受験に向けた英語 4 技能の育成 内容：英語 4 技能に関して週 1 回（各回 100 分）年間 25 回実施。 年度当初に 4 技能の力を測定し，レベル別に 4 クラスを編成。 TOEFL では技能統合型の Speaking や Writing も課されるため，IT 教室にて，Listening→Reading→Writing という流れで，情報を整理して Writing（タイプ）する課題にも取り組んだ。 TOEFL の実践問題集を用い，4 技能を総合的に向上させる授業を行った。スピーキングに特化し，可能なかぎり長い時間，できるだけ多くのトピックについて話すことができるよう心がけ指導した。また，ただ話すだけでなく，思考内容を正し伝えることや，なぜそう考えるのかについての根拠や具体例または体験談を交えて相手に伝える努力をするよう意識させた。

形態：基本的にペアないしはグループ単位で活動し，協働学習を促した。文章については予習を前提とし，読んだ内容を授業で共有し，議論が進むよう工夫した。
備考：自主学習用教材 e-learning については各自で取り組むこととする

これら一連の英語教育に関する取り組みの成果については，後に詳述する。

一昨年度から中学生と高校生が同じクラスで取り組む形態をとっているが，高い英語力を持った中学生（英語選抜クラス生徒）が高校生にもいい影響を与え，活気のある授業が展開された。一方，PS の課題研究について高校生が中学生にアドバイスをする場面も見られ，相乗効果が得られている。海外生活体験を経ていない生徒のスコアは伸び悩んでいる部分もあるが，**早い段階から英語能力を向上させようとする生徒のモチベーションを高めていく**環境であるといえる。

（ｅ） 広島女学院大学との連携

広島女学院大学の湊晶子院長に，自身の経験を踏まえ，グローバル社会で女性が生き抜くために何が必要かをテーマに講演をしていただいた。その他，高校生を対象として広島女学院大学の教員による授業を定期的に実施し，**高大連携事業を推進**してきた。

６ 研究開発の実績

（１） 実施日程

業務項目	実施日程 （平成 30 年 4 月 1 日 ～ 平成 31 年 3 月 29 日）											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
グローバル規模で成果を挙げた生徒	→	→		→	→	→	→	→	→			
グローバルリーダー育成プログラムの強化	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
中１課題研究			→	→	→	→	→	→	→	→	→	
中２課題研究		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
中３課題研究				→	→	→	→	→	→	→	→	→
高１課題研究			→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
高２課題研究	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
高３課題研究	→	→	→	→	→	→	→	→	→			
大学との連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
他校との連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

（２） 実績の説明

本校における課題研究は，引き続き“Peace Studies”として 6 カ年の総合的な学習の時間（1 単位）において実施した。

SGH 校指定にともない，本校の校務分掌を統廃合して立ち上げた「**グローバル教育推進部**」を中心に，「平和観」「対話力」「リーダーシップ」という本校がグローバルリーダー

に必要な 3 つの力を培うことができるよう，各学年の実態に合わせて**課題研究教材を練り直し新しい学習指導要領を見据えた教育実践**した。こうした作業を通じて，本校の掲げる教育目標を生徒・教職員が共有し，課題研究プログラムを展開することができた。

新しい学習指導要領を見据えた教育実践を目標に掲げ，**「主体的・対話的で深い学び」**につながる授業展開を心がけてきた。教員アンケートでも**ほぼ全教員がアクティブラーニング型の授業**を行っており，授業方法に対する研究意欲も高まっている。

その他，大学の教員や研究室，大学院生と共同で課題研究を行う機会を積極的に設け，学術的成果につながるよう努めている。

（ａ） グローバル規模で成果を挙げた生徒

最終年度となる今年度も多くの生徒がグローバル規模で活躍し，成果を挙げることができた。特に全世界の中高生が総合的な教養を競う World Scholar's Cup においては，GI を受講している生徒が国内予選を勝ち抜き，バルセロナで行われた世界大会を経て，イェール大学で行われた決勝大会に進出するという快挙を達成した。加えて，核廃絶署名活動に取り組んできた本校生徒が，AI によるモノクロ写真の自動カラー化技術を用いて作成した映像作品が，国際平和映像祭で学生部門賞を獲得するなど，優れた成果を挙げることができた。これらは SGH 指定にともない実施してきた「Peace Studies」における課題研究プログラムと国内・海外研修とが有機的に結びつき，これに英語力を高めるための様々な積極的な取り組みが生徒の成長を促した成果である。

その他にも主なものとしては，以下のものが挙げられる。なお Critical Issues Forum については，昨年度の報告書提出時点に出発していなかったため，今年度の報告書にて説明する。

日 時	摘　要
3/30-3/31	Critical Issues Forum (CIF) in Monterey, CA USA
4/23-4/28	NPT 再検討会議第二回準備委員会（ジュネーブ）
7/22-7/27	World Scholar's Cup 世界大会進出（バルセロナ）
11/16-11/21	World Scholar's Cup 決勝大会進出（イェール大学）
9/22	国際平和映像祭　学生部門賞受賞 その後, 10 月には国連本部や国連国際学校でワークショップを実施した他， 12 月にはパリのユネスコ本部で講演をするなどグローバル規模で活躍

〈Critical Issues Forum (CIF) in Montrey, CA USA〉

学年：　高１・２　**対象人数：**　２　名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先：　Critical Issues Forum (CIF) in Monterey, CA USA

実施日（月）	研　修　の　概　要
2017 12 月	Recruitment and Selection Students were assigned to give presentations in English about the current state of nuclear weapons in the world today. There were 10 students who students applied but only two were accepted. These students showed the

most potential to understand the complex material.

2018 Study for Conference

1 月-3 月 The theme of this year's conference was "The Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons (the Ban Treaty) and its Role for a World without Nuclear Weapons." The students were required to hand in two projects, the first project required students to research the current state of nuclear weapons in the world today. In order to complete this project students studied about nuclear weapons from various perspectives. Dr. Robert Jacobs from Hiroshima City University talked about the nuclear risks human beings are facing now. The students had lectures from various experts in the field of nuclear weapons including; Akiko Muramoto, from the Ministry of Foreign Affairs, Disarmament Division and Drs. Hirofumi Tosaka, Senior Research Fellow at the Institute of International Affairs, and Professor Wakana Mukai from Asia University. Students also studied with teachers at this school about various topics related to the abolition of nuclear weapons.

The second project required the students to design their own original plan for how nuclear disarmament could be achieved. With the knowledge they acquired from lectures and study, they produced their final project, "A Circle of Sympathy leading to a Nuclear Free World."

2018 Conference

3 月 The conference was held in Monterey, California USA. 17 schools from

30 日 31 日 America, Russia and Japan participated. The James Martin Center for Nonproliferation Studies (CNS) at the Middlebury Institute of International Studies at Monterey (MIIS) sponsored the conference as part of the CIF program. The guest speaker this year was Jon Wolfsthal, Director of the Nuclear Crisis Group at Global Zero. His powerful call for all to work for disarmament motivated the students and teachers in attendance.

The Jogakuin students presented their presentation on the first day of the conference. The presentation described the necessary steps to abolish nuclear weapons focusing on the Ban Treaty. All the students did their best.

その他

〈NPT 再検討会議 第二回準備委員会〉

学年： 高 2・高 3　　**対象人数：** 2 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： NPT 再検討会議第二回準備委員会
平和首長会議主催ユースフォーラム（スイス，ジュネーブ）

実施日(月)	研 修 の 概 要
2018	参加生徒 2 名を選抜
1 月～3 月	NPT に関する事前学習，ユースフォーラムでのプレゼン資料作成
4 月 23 日	NPT 再検討会議第 2 回準備委員会（初日）を傍聴 国連欧州本部ガイドツアー参加 ホワイト在ジュネーブ国際機関コスタリカ政府代表部大使（元核兵器禁止条約交渉会議議長）への署名目録の手交行事参加 ICRC（赤十字国際委員会）職員との面談 国連赤十字・赤新月博物館視察
4 月 25 日	NPT 再検討会議第 2 回準備委員会 NGO セッションを傍聴 CTBTO とパグウォッシュ会議主催のサイドイベント（Bridging the Gap）へのオブザーバー参加
4 月 26 日	平和首長会議主催ユースフォーラムで広島女学院の取り組みなどについてプレゼンを実施 高見澤軍縮会議日本政府代表部特命全権大使との意見交換会
4 月 27 日	ジュネーブインターナショナルスクール国連キャンパス生徒との意見交換会 ナガサキ・ユース代表団主催のサイドイベント（We are “HERE”）へのオブザーバー参加，ジュネーブ市内フィールドワーク

（b） グローバルリーダー育成プログラム

今年度も中学校段階でリーダーとしての意欲が高まった生徒を選抜し，英語による平和学・各軍縮の探求を行うクラス“Global Issues Ⅰ～Ⅲ”を毎週火曜日の 6～7 時間目に，主に日本語で世界各国の平和をめぐる問題を探究する“Global IssuesⅢ”を毎週火曜日の 7 時間目に設定した。加えて，グローバルリーダーとして不可欠な英語力を身につけるために，英語の 4 技能を総合的に高い水準に上げる特別授業についても引き続き実施し，TOEFL iBT のスコア UP を目指した。

<Global Issues Ⅰ（高 1 選抜授業）>

学年： 高 1　　**対象人数：** 20 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： Global Issues Class with Dr. Robert Jacobs of Hiroshima City University

実施日（月）	課 題 研 究 の 概 要
4 月	This class was designed for students to learn about the history of nuclear weapons in English. The class is 100% in English taught by an American professor from Hiroshima City University. The class meets once a week. **Class 1:** Introduction to the class and explanation of what the situation is with nuclear weapons in the world right now. **Class 2:** How the first nuclear bomb was created and how the Manhattan Project became a reality.
5 月	**Class 3**: This class introduced the science behind a nuclear weapon. Of course this was very challenging for the students. **Class 4:** How and why Hiroshima was chosen as the first city to be attacked by a nuclear weapon.
6 月	**Class 5:** There are many different viewpoints of what happened on August 6, 1945. This class focused on the Japanese or Hiroshima view of what happened on that day. **Class 6:** Nuclear weapons effects in Hiroshima. The students studied about what happens when a nuclear weapon explodes. Heat and blast destroyed the buildings and started fires in the radius of the ground zero.
7 月	**Class 7:** This class continued to explore what happens when an atom bomb is used on a city. The effects of prompt and residual (fallout) radiation. How Hiroshima dealt with this problem. **Class 8:** In class test. Dr. Jacobs returned the tests and gave comments to the students regarding their evaluations.
9 月	**Class 9:** Nuclear testing effects, students learned many facts, such as: 2,000 tests since 1945, testing tied to colonialism and millions of people exposed to radiation as a result of all these tests.
10 月	**Class 10:** Continued research into testing effects. **Class 11:** Testing effects on the Marshall Islands. Students learned how tests on the Bikini Islands destroyed traditional land and homes forever.
11 月	**Class 12**: More about testing throughout the world, focusing on places such as Australia and Kazakhstan. The lasting legacy of these actions continues to the present day. **Class 13**: Nuclear Culture in America: in 1949 the USSR gets the bomb and

America's dominance in the world is questioned by its own people. People start to question the government and their safety in the nuclear age.

12 月

Class 14: Hydrogen Bombs and the Bravo Test: students learned of the largest test ever on March 1, 1954. The fallout from this test was incredible

Class 15: In Class Test: this term the students answered four essay questions in class.

1 月

Class 16: Introducing the nuclear fuel cycle and how uranium is mined, enriched, and processed after becoming spent nuclear fuel. Examining the role of the fuel cycle in the making of nuclear weapons.

Class 17: Discussion of nuclear fuel storage, its challenges, failures, and questions for the future.

Class 18: INF Treaty failure and what it means for the world.

Class 19: Introduction to the Fukushima nuclear disaster (March 11, 2011). Focusing on the causes of the disaster. Continuing discussion of Fukushima focusing on aftermath of the disaster, comparison with Chernobyl and continuing risks and dangers.

Class 20: Further discussion of the long-term problems in Fukushima, with an examination of the types of radiation, their effects and dangers, and how people are living with contamination.

Class 21: In Class Test: this term the students answered four essay questions in class.

Class 22: Test Return

その他

GI Class with Professor Jacobs

〈Global Issues Ⅱ（高 2 選抜授業）〉

学年： 高 2 **対象人数：** 19 +1 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： Global Issues Class with Dr. Robert Jacobs of Hiroshima City University

実施日（月）

課 題 研 究 の 概 要

This class was designed for students to continue learning about nuclear weapons in English. It is a continuation of last year's class for 10th grade students. The class was taught 100% in English by a non-Japanese professor from Hiroshima City University. The class meets once a week.

4 月

Class 1: Introduction to the class. Nuclear weapon treaties and an overview of their history from the first nuclear weapon treaty to the most recent.

Class 2: North Korean nuclear testing, radiation detection, underground testing, and motivations for testing.

Class 3: History of the Chernobyl disaster (April 26, 1986) and its aftermath. Comparisons with the Fukushima disaster and other nuclear disasters.

5 月

Class 4: The nuclear attacks on Hiroshima and Nagasaki as seen locally. Examining key perspectives and their differences by location.

Class 5: American co-opting of Hiroshima's nuclear narrative. Learning how Americans learned about the bombings and how they saw themselves as potential victims.

6 月

Class 6: The modern humanitarian response to the failure of treaties to abolish nuclear weapons. Discussion of alternatives to the NPT.

Class 7: Introducing nuclear culture as experienced in America, from the atomic bombing of Hiroshima and Nagasaki through the Cold War, and domestic nuclear testing. Revealing the power of youth culture.

7 月

Class 8: Introduction and explanation of the Nuclear Weapon Ban Treaty of 2017. Discussion of the treaty's strategies and criticisms.

Class 9: Term 1 Test administered in class.

Class 10: Term 1 Test Returned along with teacher comments. Summary of Term 1 lectures.

9 月

Class 11: Discussion of recent tensions with North Korea, a history of conflict, and the timeline of North Korean nuclear development.

Class 12: The impact of space programs on humanity's perspective on Earth and how we began to see Earth as whole, as one world.

10 月

Class 13: Introducing the nuclear fuel cycle and how uranium is mined, enriched, and processed after becoming spent nuclear fuel. Examining the role of the fuel cycle in the making of nuclear weapons.

Class 14: Discussion of nuclear fuel storage, its challenges, failures, and questions for the future.

11 月

Class 15: Building context and adding depth to the students' understanding of global perspectives on Japanese history, special guest lecturer Dr. Hitoshi Nagai from Hiroshima City University, addressed Japan's role in the Philippines.

Class 16: Examining shifting strategies for nuclear abolition. Moving from frustration with the NPT to the Humanitarian Initiative, to the NWBT, to the work of ICAN.

12 月

Class 17: Term 2 Test administered in class.

1 月

Class 18: Term 2 Test returned to students.

Class 19: Discussion of the definition of peace as the absence of war or presence of societal positives, international organizations as tools of peace, and peacebuilding.

Class 20: Introduction to the Fukushima nuclear disaster (March 11, 2011). Focusing on the causes of the disaster. Continuing discussion of Fukushima focusing on aftermath of the disaster, comparison with Chernobyl and continuing risks and dangers.

2 月

Class 21: Further discussion of the long-term problems in Fukushima, with an examination of the types of radiation, their effects and dangers, and how people are living with contamination.

Class 22: Introduction to the idea of the Nuclear Umbrella, the reasoning behind relying on this idea, and the consequences of accepting protection.

3 月　**Class 23:** Discussion of strategies for and challenges associated with passing on the stories of Hiroshima and Nagasaki in the near and far future.
Class 24: Final Essays Returned Dr. Jacobs gave constructive feedback on the students' strengths and weaknesses in writing their first independently researched academic essay.

その他

Global Issues Class with Professor Jacobs

〈Global Issues Ⅲ（高 3 選抜授業）〉

高 3 選抜授業
学年： GI(Global Issues)　**対象人数：** 24 名
選択生徒

課題研究に関する活動・取り組み

課題研究テーマ： 国内外の社会課題を主体的に分析するとともに，それに必要な教養を身につける

実施日（月）	課　題　研　究　の　概　要
1 学期	一年間のビジョン策定 これまでの二年間の GI での学びを振り返るとともに，この一年間でどのような力を身につけたいか，そのためにどのような活動がしたいかを各生徒に発表させ，カリキュラムを共同で作成した。 社会問題学習 統計資料の見方や情報の真偽を判定する方法，論理的に概数を捉えるフェルミ推定などを取り上げ，社会問題を分析する際に必要なスキルを習得するとともに，社会少子高齢化，貧困問題，食料自給，国際化の進展といったトピックを取り上げ，問題の原因や背景，解決策について考察した。
2 学期	国家予算編成アクティビティ 模擬国家予算編成を通じて，日本国内の社会課題に理解を深めて解決策を創り出すアクティビティを実施した。各生徒に大臣のロールプレイをさせ，それぞれが管轄する分野の社会問題解決のために予算を取り合うかたちをとった。出来上がった予算をふまえ，各自が思い描く望ましい社会のあり方をレポートとしてまとめさせた。
3 学期	一般教養先取り講座 大学での学びをより深いものにするために，様々な学問分野の名著・古典を読解した。

課題研究以外の活動・取り組み

取組研究テーマ： 特になし

〈ディベートフォーラム GROW〉

学年： 高 2 選 抜 授 業 (Global Issues)選択 生徒 **対象人数：** 20 名

課題研究に関する活動・取り組み

ディベートフォーラム GROW

実施日（月）	課 題 研 究 の 概 要
通年	ネット上のプラットフォームを通じて，国内外の大学生・大学教授と議論する
1 学期	国内外の社会問題についてディベート 死刑制度の是非について討論し，大学生(卒業生)から助言を得た。
夏休み	核軍縮課題研究
2 学期	平和を祈る週・Peace Forum・SGH 校渋谷教育学園渋谷高校との交流会での学びをもとに「核軍縮は可能か」について議論した。
3 学期	ハワイ研修事前学習 研修の事前学習のために実施したリサーチの途中経過をアップし，生徒間の課題研究を共有した。

課題研究以外の活動・取り組み

取組研究テーマ： 特になし

〈山梨学院大学 iCLA リベラルアーツキャンプ〉

学年： Global Issues 高 1　　**対象人数：** 19 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： 山梨学院大学国際リベラルアーツ学部（iCLA）

実施日（月）	研修の概要
3 月 18 日	14：00～14：30 Registration & Check in
	14：30～15：00 Opening Ceremony(by Prof. Kouji HARAGUCHI)
	15：00～15：45 Introduction of iCLA & Campus Tour
	15：45～16：45 Introduction to Political Simulation
	17：00～18：00 Lesson1　T Chiba's treatment of War in 'Ashita no Joe'
	19：00～ prep for simulation and lectures
3 月 19 日	9：00～10：00 Lesson 2: Physics on nuclear weapons
	10：15～11：15 Lesson 3: North Korean Nuclear Crisis
	11：30～12：00 Simulation (Conference Meeting I)
	13：00～14：30 Simulation (National Meetings and International Negotiations I)
	14：45～15：45 Yoga in English　(by Prof. Bethany ALLING)
	16：00～16：30 Simulation (Conference Meeting II)
	16：30～18：00 Simulation (National Meetings and International Negotiations II)
	20：00～21：00 Dinner and Game Night with iCLA students
3 月 20 日	9：15～10：15 Simulation (National Meetings and International Negotiations III)
	10：15～10：45 Simulation (Conference Meeting III)
	11：00～11：30 Presentation of Group and Individual Strategies & Conclusion

その他

事前学習　講義やシミュレーションゲームには英文の予習課題が出され，熟読した上で研修に参加した。Simulation では，世界の核情勢を踏まえた交渉ゲームを行った。担当国としてのスピーチやポジション・ペーパー（Position Paper），決議案（Draft Resolution）などを英語で作成した。

〈Grobal Leadership Program in Hawaii〉

このプログラムは年度をまたいで実施しているため，昨年度からの取り組みと，今年度の取り組みをまとめて報告する。

学年： 高 2（2017 年度） **対象人数：** 23 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： アメリカ・ハワイ州

実施日（月）	研 修 の 概 要
2018 年 1 月	・保護者・生徒対象説明会実施
1 月～3 月	・事前学習会：計 6 回実施。 戦艦アリゾナ，戦艦ミズーリ，日系人部隊 442 連隊，日系人強制収容所，日系移民の歴史についての事前学習を行った。 また，本校卒業生でハリス教会の牧師をされていた三宅展子先生をお迎えしての交流会や，佐々木禎子さんのお兄様である佐々木雅弘さんをお迎えしての講演会を実施した。
3 月～4 月	・現地研修：６日間 第 1 日目　本校同窓会ハワイ支部の皆様と交流会を行い，戦後間もないころの本校の様子など，貴重な話を伺うことが出来た。 第 2 日目　本校創立者である砂本貞吉先生が牧師をされていたハリス教会での礼拝に参加，全員で讃美歌を披露した。パールハーバーを訪問し，戦艦ミズーリを見学した。 第 3 日目　パールハーバーを訪問し，アリゾナ記念館の見学と，来場者と共に平和メッセージを込めた折り鶴を折る『サダコ・プロジェクト』を行った。また，プランテーションビレッジを訪問し，日系移民の歴史を学んだ。 第 4 日目　プナホウスクールを訪問。平和都市ヒロシマ，広島女学院についてのプレゼンテーションを行ったり，授業に参加をした。午後はハワイ日本文化センターを訪問し，日系移民の歴史や生活についてさらに学びを深めた。

その他

学年： 高 2（2018 年度） **対象人数：** 17 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： アメリカ・ハワイ州

実施日（月）	研 修 の 概 要
2 月	・保護者・生徒対象説明会実施
1 月～3 月	・事前学習会：計 6 回実施。 戦艦アリゾナ，戦艦ミズーリ，日系人部隊 442 連隊，日系人強制収容所，日系移民の歴史についての事前学習を行った。 また，本校卒業生でハリス教会の牧師をされていた三宅展子先生をお迎えしての交流会や，佐々木禎子さんのお兄様である佐々木雅弘さんをお迎えしての講演会を実施した。
3 月 ～4 月	・現地研修：６日間 現在研修中。 第 1 日目　ハリス教会での礼拝 第 2 日目　パールハーバー訪問。アリゾナ記念館，戦艦ミズーリ，サダコ・プロジェクト 第 3 日目　プナホウスクール，日本文化センター訪問 第 4 日目　ハワイ大学訪問，各自のプロジェクトのための自主研修

その他

（ｃ） 各学年の総合的な学習の時間

学年： 中１　　**対象人数：** 205　　名

課題研究に関する活動・取り組み

課題研究テーマ： 平和構築領域：ヒロシマ，広島女学院の被爆

実施日（月）	課題研究の概要
6 月	・他兵器と異なる原爆の三つの特徴（熱線・放射線・爆風）と，急性障害・後障害，犠牲者数など，基本的な地識を獲得する。 原爆の威力および被害状況の概要を学んだ。また，本校生徒・教職員の被爆の状況を，地図や統計資料を用いながら学んだ。 ・被爆した卒業生の手記「夏雲」を読み，被爆者の心情に寄り添う 被爆者やその家族は何を体験し，何を感じたかを，本校卒業生の被爆体験記を読み，学んだ。自分とほぼ変わらない女子学生たちの体験記を読むことにより，被爆者と自分を重ねて原爆について考えた。 ・本校敷地内でのフィールドワーク 体験記に書かれていた場所や学校近隣の被爆絵碑を訪れ，過去と現在の様相の変化を確認し，今自分がいるところが被爆の歴史を持っていることを実感した。 ・平和記念公園内の碑の調査
7 月 8 月	夏休みに平和記念公園を訪れて，公園内の碑を１つ調べた。公園内に多くの碑が存在し，そのそれぞれに建てられた理由やその背景があることを学んだ。
9 月	・夏休みに調べた碑の案内の練習 夏休みに個人で作成したレポートの内容をもとに，同じ碑を調べた生徒同士で知識を共有した。そして，それぞれが碑巡り案内の原稿をつくり，
10 月	その碑を調べていない生徒に対して，発表を行った。発表の練習は各自で行い，発表のノウハウを学んだ。練習の中で，高校生の碑巡りの様子を映像で見て，目標となる発表の例を知った。
11 月	・文化祭で碑巡り案内 希望者を募り，2 学期に練習した碑巡り案内の発表を行った。
2 月	・高校生による碑めぐり・ヒロシマ・アーカイブについての授業 これまでの平和構築領域についての学習を深めるため，また本校で長年行われている平和活動を中学生に継承し，高校生のリーダーシップを育成するため，高校の GI 受講生が「碑めぐり」について，「ヒロシマ・アーカイブ」について署名実行委員会所属生徒が，中１生徒に紹介した。

教科との関わり 聖書

・本校の歴史を学ぶ中で，被爆当時の状況について学んだ。

課題研究以外の活動・取り組み

取組研究テーマ： 多文化共生・人権領域：自身の平和（自己肯定感を高め，他者を尊重する）

・自己肯定感を高める

自分がどのような人間であるか，自分自身，家族，友人など，それぞれの捉え方を通して，自分の知らなかった一面を発見させた。また，自分自身が尊重される存在であることを通して，同様に級友達も個々に尊重される存在であるとの認識を深めた。

・他者との関係づくり

生徒がクラスで自己開示し，円滑なコミュニケーションができるようになるため，様々なケーススタディーを通して，人間関係のトラブルに会った

ときに，どう対応していけばいいかを主体的に考える活動を行った。
「そのコミュニケーション，おたがい happy？」では，相手に嫌なことをされたときに自身の対処法について，再検討した。「告げ口」では，告げ口によりトラブルが起こる原因を考えた。「見直そう！友達との距離感」および「周りの人ができること」では，いじめの構造を学び，嫌なことをする側・される側・見ている側のそれぞれの立場から，自分の不断のコミュニケーションについて見直し，他者への思いやり，集団の中での自己の責任，よりよい声掛けの方法について学んだ。

学年： 中２ **対象人数：** 204 名

課題研究に関する活動・取り組み

課題研究テーマ： 平和構築領域「世界の多様な原爆観」

実施日（月）	課題研究の概要
５月	広島の原爆被害について正確な知識を得る 自分たちがどれくらい正確に原爆被害について知っているかを，アンケート形式で確認した。意外と正確な知識を持っていないことを自覚した上で，広島の原爆被害について事実を確認した。さらに，なぜ原爆被害について知る必要があるのかを生徒に考えさせ，「他国の人に核兵器廃絶を訴えるにはまず自分たちが核兵器の恐ろしさを正確に知っておくことが大切である」との認識を持たせた。
６月	アメリカから見た原爆観 マンハッタン計画に参加した科学者と被爆者の対談番組視聴。ジグソー学習形式で，アメリカの原爆観を表す新聞記事・データ等（原爆投下の是非・世代間・男女間・時期）を分析。アメリカの原爆観の変化・多様化を学んだ。
８月～９月	戦争体験聞き取り調査とその共有 被爆・戦争体験を直接聞き取ることができる最後の世代として，継承を目的として調査・共有した。親族などに聞き取りができる人がいない生徒には，被爆証言の会などを紹介した。
２月	アジア諸国の原爆観 日本が第二次世界大戦でアジアにどのようなことをしてきたか資料を読み理解する。特に中国，韓国，フィリピンの人たちの原爆観について資料を用いて考えていく。また国（アメリカ，中国，韓国，インド）による原爆の受け止め方の違いを，パネルディスカッション形式で学ぶ。

教科との関わり

国語　ジグソー学習などで必要となる，要点を簡潔にまとめ話す能力を国語の授業の中で取り入れた。

課題研究以外の活動・取り組み

取組研究テーマ： 多文化共生・人権領域「より良い人間関係を築くために」

５月	SNS の使い方を例にとり，よりよいコミュニケーションをとるためには何が必要かを考える。昨今問題となっている SNS による人間関係崩壊の原因や対策について，生徒自身が意見を持つ。他者への配慮の必要性や，場面に応じたコミュケーションツールの選択について考えた。 SNS の使用法に関する学習をもとに，互いの「人権」を尊重することの重要性を学ぶ。SNS などによって相手を傷つけること，相手の発言権を一方的に

１１月　　奪うことは他者の「人権」を侵害することであることを認識する。
中３次での学習（在日韓国人差別）の導入として，現在，日本で行われている外国人差別についてふれる。日本在住でルーツを外国に持つ人の体験を基にして描かれた漫画を例に，なぜそのようなことがあると思うか，あるいはそういう事実に対してどう考えるかを話し合わせた。

学年：　中３　**対象人数：**　204　**名**

課題研究に関する活動・取り組み

課題研究テーマ：　平和構築領域：核兵器を廃絶すべきか

実施日（月）	課題研究の概要
６月	・長崎研修旅行の事前学習 被爆地広島と長崎の比較，長崎の歴史・文化・地理等について学習。
７月	・ヒロシマとナガサキの比較（夏休み中）
８月	まず広島平和記念公園内にある慰霊碑の調査を通して，広島における原爆投下直前・直後の様子や，核兵器に対する「思い」を探究した。そして，長崎の被爆や「思い」を知るため，長崎市内の被爆遺構についてウェブサイトや文献で調査した。あわせてキリスト教文化関連等の調査も行った。 ・ピースメッセンジャー事業（東京都青梅市・羽村市主催）への参加 ピースメッセンジャーとして広島に訪れた青梅・羽村両市の中高生と交流した。本校中３から 15 名の生徒を選抜し，両市の中高生に対して，広島平和記念公園内の慰霊碑を案内した。またここまでの PS で学んだことを報告し，「東京と広島での平和教育」や「平和な世界を作るためにできること」についてディスカッションを行った。
９月	・長崎研修旅行の事前学習 長崎研修においては「平和」と「長崎の歴史・文化」の両面の学びを目指し，夏休みに調査した内容をもとに，研修テーマを設定し，テーマに沿った研修コース（訪問場所・アクセス方法・入場料など）を作成した。
10 月	・長崎研修旅行 現地でクラス毎に語り部さんの講話を聞き，活発な質疑応答をおこなった。初日から二日目の午前中までは各班で設定した「平和」コースを，二日目の午後は「長崎の歴史・文化」のコースで研修を行った。 ・長崎研修事後学習 研修後，各班毎に研修成果（「平和」「歴史・文化」２種類）を写真付きでレポートにまとめ，文化祭で「平和」に関するレポートを展示した。また，その後，PS の授業内で，レポートを用いてプレゼンテーションをおこなった。各担任が審査し，優秀な発表については 12 月に表彰した。
１２月	・卒業論文に向けて 中学の PS の集大成として卒業論文を作成する。目的と活動概要の説明をおこなった。今年度の卒業論文課題は以下のとおりである。 あなたは，この世界でどのように平和を構築していこうと考えていますか。中学校で学習してきた内容（PS やいろいろな講演など）を活かしながら，1000 字以上 1200 字以内で書きなさい。ただし，以下の⑴・⑵のどちらかに焦点を当て，自らの考えを述べなさい。 ⑴核兵器のない世界を構築できるか。 ⑵世界が抱えるさまざまな問題を踏まえ，どのように平和な社会を創り上げるか。 「平和である状態」と「そのために必要なこと」をまず定義させ，その考

えを補強・再検討するために，関連図書をもとにリサーチを行った。

1月　・卒業論文執筆

2月　国語や公民の授業と連携して，リサーチ結果をクラス内で共有し，小論文の書き方を習得させた。担任によるチェックを通して，完成に至った。

3月　優秀作品の表彰し，講評を行った。

教科との関わり

国語科:小論文作成のために，論理的文章の書き方の指導を実施。また国際協力に関する読書と作文を夏休みの課題とし視野を広げる一助とした。公民科:核兵器の「マッハステム（衝撃波）」に関する授業を行った。「新聞記事の確認と一言感想」を継続的に行って授業冒頭部で発表させ，世の中の争点を明らかし，論理的に発表する態度の形成を図った。

課題研究以外の活動・取り組み

取組研究テーマ：　多文化共生領域：在日外国人と共に生きるために

5月　・3月の韓国で現地研修を行った生徒が，リサーチした韓国人の歴史観・原爆観・平和観を報告した。多文化共生に目を向ける契機となった。

・漫画「クラスメイトは外国人」より「ユへの物語」を読み，まずは在日コリアンについて知ることから始め，その歴史的背景や差別の実情を知り，現在の社会における状況を学んだ。また多くの在日コリアンが通名を使っている現状について学び，漫画「朴一物語」を通して本名の持つ意味を考えた。

6月　続けて，広島を舞台とし，日本人青年と在日コリアンの青年との葛藤と交流を描いたVTR「一期一会　キミにききたい！」を視聴し，異なる文化的背景を持つ人々との交流の重要性を学んだ。事実を参考にした漫画から，実在の人物の漫画へ，そして実際の若者の姿へと，段階的に現実の問題へと引きつけると同時に，問題提起から解決・展望へと展開していくように教材の配置を工夫した。生徒は，在日コリアンの問題につい初めて触れた者も多く，何よりもまずは「知ろうとすること」の重要性を強く感じたようである。

学年： 高 1　　**対象人数：** 238 名

課題研究に関する活動・取り組み

課題研究テーマ： 平和構築領域：平和共創プロジェクト

実施日（月）	課題研究の概要
6 月	カンボジア学習① カンボジアで起こった，ポル･ポトによる大虐殺とその後の内戦について，DVD の鑑賞とその後の話し合いによって考え，フィードバック・シートにまとめた。
7 月	カンボジア学習② 前回の知識と疑問を持って次の週に，少年兵としてポル・ポト時代を生き抜いたリー・サルーンさんと青年海外協力隊員としてカンボジアで活動した鍵山彩さんによる講演を聴き，質疑を行った。 カンボジア学習③ カンボジアの今について様々な観点からグループで調べ，クラスで説明をした。 カンボジア学習④ 前回の知識を持って，現在カンボジアで支援活動を展開しておられる昭和女子大学の米倉雪子先生に，支援のあり方について具体例をもとに講演していただいた。
12 月	1 年間の様々な学習から自分で課題を設定し，「平和共創プレゼンテーション」のためのポスター作りをはじめた。
2 月	平和共創プレゼンテーション①・② プレゼンテーションの内容を考え，ふさわしいポスター作りをした。 完成したポスターの中から，テーマ設定から結論までの説得力とポスターとしての完成度を生徒達が評価をして，投票により代表を決定した。 平和共創プレゼンテーション③ 代表者によるプレゼンテーションを行った。

教科との関わり

「平和共創プレゼンテーション」のテーマは，1 年間の教科授業とＰＳをから各自が設定した。授業の学びを深めていく中で，各自の見つけた課題に取り組むことで，教科や PS の学びが生徒達の中に定着していったことがうかがわれた。

課題研究以外の活動・取り組み

取組研究テーマ： 多文化共生領域：部落問題

10 月　部落問題①：部落差別の存在を知る・歴史的背景を知る
・後に講演してもらう畠山慎二氏出演の DVD『Story of shinji』を学年全
11 月　体で視聴し，その後歴史的背景を学んだ。
部落問題②：結婚差別を例に差別の現状について知り，差別とどう向き合うかを考える
・具体的な場面を設定し，自分ならどう行動するかを考えた上でクラスメートと意見交換した。
部落問題③：部落解放運動の歴史と差別の現状を学び，どうすれば差別が根絶できるか考える
・前時に出た意見をまとめたプリントを配布し，意見を共有した。
・部落差別をなくすためには何が必要か考えた。
部落問題④：畠山慎二氏の講演
・畠山氏が受けた差別体験から，被差別部落の問題だけでなく，日本や世

界の抱える差別などの問題を解決していくためにどのような意識をもって生きていってほしいかメッセージをいただいた。

学年： 高２　　**対象人数：** 186 名

課題研究に関する活動・取り組み

課題研究テーマ： 平和構築領域：沖縄政策提言

実施日（月）	課題研究の概要
４月	沖縄学習①：高２における課題研究の概要を説明し，今年度の成長目標を共有した。その中で，課題研究テーマの沖縄戦についてどれくらいの知識があるかを確認し，研究を進めるにあたっての課題を確認した。 沖縄学習②：DVD「もうひとつの沖縄戦記」を鑑賞し，沖縄戦の「真実」に直面する機会とした。感想に加え，重要だと思った内容や理由を共有し，グループやクラスでディスカッションを行った。
５月	沖縄学習③：沖縄の「真実」と「現状」についての学びを深めるため，戦前から現在の沖縄を４つのテーマに分け，ジグソー法による学習を行った。担当する内容について各自が B4 用紙１枚にまとめる作業を行った。４つのテーマは以下の通りである。 Ａ：沖縄戦について～沖縄戦の内実と被害～ Ｂ：沖縄の戦後①（占領下の沖縄） Ｃ：沖縄の戦後②（本土復帰後の沖縄） Ｄ：沖縄の「今」～現在の沖縄の問題～ 沖縄学習④：ジグソー学習のエキスパートグループで集まり，同じテーマを担当する生徒が集まり，学びの共有・深化をはかった。
６月	沖縄学習⑤：上記のＡ～Ｄを担当する４人が集まり，それぞれがこれまでまとめてきた内容についてＢ４資料をもとに発表し，沖縄戦について主体的な学習を行った。 国内研修：「沖縄修学旅行事前研修」（別項目参照） 沖縄学習⑥（アーカイブ学習）：首都大学東京 渡邉英徳准教授 講演 本校がＳＧＨ事業の一環として取り組んでいるデジタルアーカイブについて，首都大学の渡邉先生による講演を行った。沖縄の地上戦の実相をより深く学ぶために制作された「沖縄平和学習アーカイブ」に加え，ヒロシマの証言収録集「ヒロシマ・アーカイブ」に関して実践的な使用方法をご教授いただき，生徒がより主体的に学びを深めていくための機会とした。
９月	沖縄学習⑥：コース別沖縄学習のグループ（６コース）に分かれて，各コースの研修内容について，事前研修に参加したリーダーを中心に小グループに分かれて，調べたことを発表し合い，学習を深めた。発表内容は，資料集にまとめた。 沖縄学習⑦：沖縄学習の総まとめとして，アーカイブの成果をもとに作成されたテレビ番組「沖縄全記録」（NHK スペシャル）を視聴した。
３月	沖縄学習⑧：沖縄修学旅行 共通コース ・読谷ガイド 比嘉涼子さん講演 ・チビチリガマ・座喜味城址見学・道の駅かでな・平和祈念資料館 ・平和の礎・ひめゆりの塔・糸数壕 グループ別コース ①沖縄尚学高校との交流会 ②平和祈念公園周辺フィールドワーク

③南風原文化センター
④対馬丸記念館
⑤沖縄市の米軍基地周辺のフィールドワーク
⑥普天間市の米軍基地周辺のフィールドワーク

本年度の沖縄学習は，共通コースに加え，上記６つのコースを設定し，より主体的な学びとなるよう，プログラムを組み替えて実施した。沖縄事前研修に参加した生徒を中心に研修内容を設定し学習を行った。

４月　沖縄学習⑨：グループ別学習報告会
沖縄事前研修のリーダーを中心に，各コースの研修内容についてプレゼンテーションを行い，学年全体で共有する予定。

教科との関わり

国語：レポートの書き方・プランインターナショナルコンクール指導

課題研究以外の活動・取り組み

取組研究テーマ：　多文化共生領域：在日外国人をめぐる諸問題

１月　在日外国人をめぐる問題について①
日本における在日外国人の在留者数などのデータから，歴史的な流れと背景について考察した。また，在日コリアンの人々の置かれた状況に焦点を当て，いくつかの証言（在日コリアン１世）を読み，日本社会の抱える課題について討議した。

２月　在日外国人をめぐる問題について②・③
在日コリアン（2 世・3 世）の証言を読み，1 世とは違った形でアイデンティティの確立に苦慮するとともに，社会的に疎外された歴史的流れを知り，在日外国人と共生していくために何が必要かを考えた。

３月　在日外国人をめぐる問題について④・⑤
在日コリアン（2 世・3 世）の講演会や交流会を実施し，生の声を聴くことで，自らが在日外国人とどのような社会を構築していくべきかを討議した。また，多文化共生領域の学習レポートを書き，自らの考えをまとめた。

学年：　高校３年生　　**対象人数**：　215　名

課題研究に関する活動・取り組み

課題研究テーマ：　核兵器を廃絶すべきか

実施日（月）	**課　題　研　究　の　概　要**
４月	模擬国連形式 交渉ゲーム ・今年度における課題研究の概要と目標，テーマなどの説明 ・模擬国連形式による「核軍縮」を目指す交渉ゲーム①②③④
５月	2015 年における世界情勢を踏まえて作成した「核軍縮」に関する交渉ゲームを実施した。核情勢に関係した主要 12 ヵ国の国名をあえて干支で設定し，クラスの生徒 3～4 名が一つの国を担当する形で，核軍縮条約の締結交渉を行った。生徒は担当する国の全権大使として，国益を最優先に交渉を行う必要があり，どの国を担当する生徒も積極的に交渉に参加していた。核兵器拡散防止条約と核実験禁止条約の成立（もしくは不成立）を目指し，立場の違いを超えて合意を形成しようと活発に行動していた。教師は全体の流れをファシリテートするのみで，交渉は一定のルールに従って，すべて生徒が行った。
６月	卒業論文作成

課題内容：

昨年 7 月 7 日，国連において「核兵器禁止条約」が 122 の国と地域による賛成多数で可決されたました。この条約の推進に貢献してきた「ICAN（International Campaign to Abolish Nuclear Weapons）（核兵器廃絶国際キャンペーン）」がノーベル平和賞を受賞し，本校卒業生のサーロー節子さんが授賞式でスピーチを行いました。しかし，（今回の交渉ゲームで体感したように）「核」をめぐる世界各国の利害は衝突し，核兵器保有国すべてが「核兵器禁止条約」に反対しており，この条約の実効性が疑問視されることもあります。このような世界情勢を踏まえると，核保有国や非核保有国は，どのような合意を形成していくべきだと考えますか。あなたの掲げる「理想」と「現実」に触れつつ，自身の考えを 800 字以内で書きなさい。

＊交渉ゲームでの体験や 6/15㈮SGH 研究発表会の川崎哲さんの講演内容などを踏まえて論を展開してもかまいません。

模擬国連形式の交渉ゲームを通じて考えたこともとに，核軍縮・核廃絶の理想と現実を踏まえた上で，どのように合意形成を図るべきかについて，卒業論文としてまとめた。この論文は，本校 SGH 運営指導委員の水本和実先生（広島市立大学 教授）に審査を依頼した。

１２月　卒業論文 優秀作品表彰式・審査講評

本年度は，審査を依頼していた本校 SGH 運営指導委員の水本和実先生（広島市立大学 教授）が公務のため表彰式に参加することが難しかった。よって，水本先生による細かな講評とともに審査結果を発表し，最優秀賞 1 名，優秀賞 2 名，佳作 2 名の合計 5 名の表彰を行った。（最優秀作品は，Globalbooklet に掲載している。）て，どのような視点で世界情勢を捉え，行動に移していくべきかをご教授いただいた。

教科との関わり

国語　卒業論文作成に向け，論理的文章の書き方指導を行った。

日本史　近現代の歴史的事実の理解に対して，従来以上に多くの時間を割いて授業を

世界史　行った。日本史では，アジア太平洋戦争の歴史認識の問題をどうとらえるかを議論し，定期テストにも自らの意見を書く問題を出題した。

課題研究以外の活動・取り組み

取組研究テーマ：　多文化共生社会の構築に向けて何をすべきか

9 月　現代社会における課題に目を向ける

・「ヘイトスピーチ」に関する学習①②

日本の社会問題となっている「ヘイトスピーチ」を取り上げ，ジグソー法によるグループ学習を行った。また，NHK クローズアップ現代を観て，その違法性や差別性，国際社会の動向と日本の法整備の現状を学んだ。

「差別」を生み出す人間の深層心理に目を向ける①②

・NHK ドキュメンタリー「青い目茶色い目～教室は目の色でわけられた～」（制作：WGBG（アメリカ））を鑑賞し，「差別」を生み出す人間の深層心理に目を向け，人間としてどう生きるかについてまとめた。

10 月　講演会：広島修道大学 名誉教授 大庭宣尊 先生

・広島修道大学 名誉教授 大庭宣尊 先生をお招きし，差別を生みだす構造やグローバル社会において，どう多文化共生社会を構築していくべきかについてご教授いただいた。

（d） 生徒の海外研修

生徒の海外研修先は，昨年までと同様，韓国（中 2・高 1），カンボジア（高 1），オーストラリア（中 3），アメリカ・マウントユニオン大学（中 3・高 1），ミャンマー（中３・高１）であった。いずれの海外研修においても，前年度の反省をふまえて事前事後学習のさらなる充実をはかり，研修の教育効果を高めるよう努めた。

海外研修においては，本校のみならず訪問国の視点も交えて，現地の高校生たちと「平和構築」をテーマに議論を行っている。多様な「平和観」の中で，どのように「対話」し，「リーダーシップ」を発揮できるかが試される機会でもあり，参加する生徒は主体的にリサーチを行い，英語によるプレゼンテーションの準備を進めていた。ただ単に英語による発信力を磨くだけではなく，他者の考えや主張にも耳を傾け，若い世代がどう行動を起こしていくかについて，建設的な議論ができたことに，参加した多くの生徒が希望を見出し，新たな課題の研究を進めるきっかけとなっている。

なお韓国・カンボジアについては，総合的な学習の時間に行われる課題研究”Peace Studies”と連動して学習を進めており，研修参加者がその成果を学年全体に対してフィードバックする機会を設けるなどした。

2017 年度の活動報告

昨年度の報告書提出時点では，帰国していなかった研修について，本年度報告書で説明する。

〈カンボジア研修〉

学年： 高１ **対象人数：** 12 **名**

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： カンボジア

実施日（月）	研 修 の 概 要
４月～７月	・ＰＳにて，計５回カンボジア学習を行った
１０月	・保護者・生徒対象説明会実施・募集 課題研究で関心が高まっていることもあり，生徒・保護者 29 組が集まり，12 名を選抜した。なお募集説明会において，成果普及の一つとするため，前年度カンボジア研修に参加した生徒が，保護者・生徒に対して事前学習・現地研修・事後学習の内容や成果を報告した。
１１月～３月	事前学習：計８回放課後に集まり事前学習を行った。 ・はじめにカンボジアのことを知るため，また，プレゼンテーションの技術向上のため２人１組でカンボジアについてリサーチを行い，プレゼンテーションをした。テーマは「文化(言語，宗教，風習など)」「歴史」「経済・産業」「日本との関係，広島との関係」「社会(教育について)」「社会(女性の問題について)」という６つで，情報をシェアした。 ・「日本の紹介（自然・文化・歴史）」「広島の紹介（自然・文化・歴史）」「広島女学院の紹介」「ヒロシマの原爆・被害」「ヒロシマ復興，平和活動」「カンボジアと日本・広島のつながり」という６つのテーマに分かれ，現地でのプレゼンテーションの準備を行った。英語と日本語の両方で原稿を準備した。また，他のＳＧＨ校との合同研修会に参加した。
３月	現地研修：６日間 昨年と同じくひろしまハウス，山本日本語教育センター，ササースダム高

	校の訪問，ゴミ山視察，女性自立支援現場視察に加え，今年度は女性省を訪問し，交流した。
４月 ～１１月	事後学習：カンボジア研修の成果についてまとめ，校内で発表した。（オープンスクール，アッセンブリー，文化祭，校内説明会，ＳＧＨ研究大会など）

〈アメリカ研修〉

学年： 中 3，高 1　　**対象人数：** 10 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： The University of Mount Union Study Trip (Ohio, America)

実施日（月）	研　修　の　概　要
2017 Oct.	Promotion of study trip. 高 1 -5 students, 中 3-15 students. Total= 18 students applied. Students wrote essays in English and Japanese, grades and assessment from HR teacher. 10 students were chosen.
2018 Jan.－ Mar.	Students prepared for their trip to America by making presentations about Hiroshima-their hometown, Hiroshima Jogakuin and Hiroshima- a peace city. Students also learned about American Culture, Peace, and home-stay etiquette before departing.
March 22 － April 3	● 3/22- 3/24 Chicago study trip- visited The Art Institute of Chicago, Willis Tower,and famous architecture buildings. ● 3/25 – 4/3 On campus of the University of Mount Union. Students took classes about American Culture with Professor Oyabu-Mathis and Peace classes with Dr. Coleman. They joined an Education class and gave their presentations to the university students. Took part in a class with students studying Japanese. ● Students had the opportunity to visit an elementary and middle school where they talked about Japanese culture and taught students how to fold origami. ● Students made a presentation at the Kiwanis Club. A religious group much like the Rotary Club. ● Students volunteered at the Alliance Food Pantry Community Service Project. ● Students had the opportunity to do homestays with local families and experienced American family life. Post trip assignments: Students made presentations and posters about their trip for the SGH Day in June. Students made presentations at assemblies for both the junior and senior high school.

2018 年度の活動報告

〈韓国研修〉

学年： 中２・高１ **対象人数：** 16 **名**

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： 韓国・ソウル(建国大学，建国大学附属高校)

実施日（月）	研 修 の 概 要
9 月	韓国研修説明会 53 名参加 昨年度研修に参加した生徒が，研修の魅力をプレゼンした。
10 月	韓国研修参加者決定 13 名(中 2 生 7 名，高 1 生 9 名)選抜 選抜課題としてエッセイを課し，上記生徒を選抜した。
12 月～1 月	事前学習①韓国について知る 各生徒が独自の観点から韓国について調べ，その成果を相互の質疑応答を通じて深めていくとともに，参加者全員で共有した。 事前学習②日韓間の問題分析 日本と韓国間に存在する様々な問題のうち早急に解決すべきものを４つ設定した。その後，４つのグループに分かれて，それぞれの問題の原因や背景を分析するとともに，解決に向け自分たちにできることをまとめた。 事前学習③延世大学教授による講義 ソウルの延世大学からパク・ソンホ教授を招いて，「ヨーロッパにおける経済統合から見る極東情勢」というタイトルで授業を実施していただいた。他国の事例をもとに日韓問題を探るという視点を獲得できた。
3 月	事前学習④プレゼンテーション作成 現地でのディスカッションに向けて，事前学習の成果をまとめた。 現地研修 1 日目（3 月 26 日）： 建国大学の大学生による歓迎会・交流会 現地研修 2 日目（3 月 27 日）： 午前中，建国大学日本語教育学科においてプレゼンテーション，意見交換を実施した。大学生から内容についてフィードバックをしてもらう予定。 午後は建国大学附属高校生徒による歓迎会・交流会を実施する予定。 現地研修 3 日目（3 月 28 日）： 建国大学附属高校において授業参加するとともに，広島の被爆体験・日本の文化・日韓間の課題についてプレゼンテーションする予定。 現地研修 4 日目（3 月 29 日）： 韓国の歴史・文化理解のためのソウル市内フィールドワーク（建造物や美術館等）を実施する予定。

その他

〈カンボジア研修〉

学年： 高１　　**対象人数：** 10　名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： カンボジア

実施日（月）	研　修　の　概　要
１月	事前研修①：カンボジア研修を行っている他の SGH 指定校と一泊二日で「カンボジア合同研修」を行い，成果を報告し合った。 事前研修②：「歴史」「経済・産業」「教育」「女性問題」「カンボジアと日本・広島」のテーマに基づいて調べ，校内で発表した。
３月	事前研修③：プノンペンの NGO 施設「ひろしまハウス」の子どもたちのために，文房具や制服を校内で収集した。
24 日（土）～ 29 日（木）	現地研修：６日間（現在研修中につき，以下はすべて予定） ・現地研修では，「文化」「日本の四季と災害」「本校の紹介と日本の教育のしくみ」「広島の原爆」「原爆からの復興」というテーマで山本日本語教育センター，ササースダム高等学校，フン・セン・チャク・アンレイ高等学校でプレゼンテーションを行い，多角的な面から平和構築についてのディスカッションを行う。（山本日本語教育センターでは日本語，二つの高校では英語を使用）。 ・観光産業や児童労働などの問題を考えるため，アンコールワットなどの文化遺産のフィールドワークを行う。また，カンボジアの経済や環境問題・教育について学ぶため，KHEMER ART CARVING LEATHER やひろしまハウスへの訪問，シェムリアップ郊外のゴミ山視察を行う。とくにカンボジア女性省訪問時には，大臣やスタッフと女性問題についてのディスカッションをしていただく予定である。 ・カンボジア内戦や地雷被害について学ぶため，トゥースレン博物館を見学し，強制収容所収監者の生き残りであるチュン・メイ氏と面会する。また義足リハビリセンターを訪問し，地雷被害者にインタビューを行う予定。

〈オーストラリア研修〉

学年： 中 3　　**対象人数：** 16 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： オーストラリア（メルボルン）

実施日（月）	研 修 の 概 要
2017 年 11 月	募集と選考：2017 年度中に保護者・生徒説明会を行ったところ 33 名が応募した。エッセイと英語面接によって 16 名を選抜した。
2 月～ 2018 年 7 月	事前準備：英語でヒロシマ・平和を発信するプレゼンを作成するため，生徒主体で原稿・スライドの作成を進めた。現地での心構え，現地で何を学んでくるのか，日本の何を伝えるかを考えた。また集団づくりとして，学校を代表して行くグループとして意識を高くもつよう指導を行った。
7 月 26 日 ～8 月 11 日	オーストラリア研修：17 日間 Kilvington Grammar School において，英語，日本語，数学，体育，芸術などの授業に参加した。また，Peace Day Presentation において英語で広島や平和について発表した。研修中に原爆の日を迎えるにあたり，研修先の学校では毎年 Peace Day を設けてもらっている。今年は被爆の実相，広島の復興，女学院の平和活動，最近における原爆観について 4 グループに分かれてプレゼンテーションをした。動物園やスーパーマーケットへの研修を通して，現地の文化や動植物についても考える時間を持った。海外大学への進学意欲を高めるため，世界的な名門大学であるモナッシュ大学を見学し，現地の大学生に大学生活についてプレゼンをしてもらい，対話の時間を持った。
9 月～10 月	事後学習： ・Peace Day Presentation のワークショップで現地の生徒と共に折った折り鶴をまとめ，平和公園の子供の像へ捧げた（生徒 3 名）。 ・アセンブリーにおいて中学生全体に対して研修報告を行った（生徒 5 名）。 ・ポスター・Journal を作成し，文化祭で掲示を行った。

その他

〈ミャンマー研修〉

学年： 中３・高１　　**対象人数：** 12 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： ミャンマー

実施日（月）	研 修 の 概 要
９月	●募集と選考： 海外研修の説明会を行い，エッセイにより 12 名(高１：５名，中３：７名)を選抜した。なお募集説明会において，成果普及の一つにするため，前年度ミャンマー研修に参加した生徒が，保護者・生徒に対して事前学習・現地研修・事後学習の内容や成果を報告した。
１０月～１月	●事前学習： 以下のⒶ～Ⓔの５つの柱で事前学習を展開した。 Ⓐミャンマー調べ 派遣先であるミャンマーについての理解を深めるために，「教育」「支援」「格差」「難民」「文化」「経済」「風土」について課題設定を行い，探究活動を行った。中３・高１という学年を超えたグループを編成し，リーダーシップ・協調性の育成も目的とした。また保護者も参加する研修オリエンテーションにて，探究活動の成果を報告した。 Ⓑヒロシマの探究と報告準備 現地で International School of Myanmar（以下，ISM）の学生と交流する。そこでヒロシマについてのプレゼンテーションを行うために，「Why was the A-bomb dropped？」「What is the A-bomb（nuclear weapon）？」「Damage」「Reconstruction and Now」「Our school」の５つのテーマを設定して探究・準備を進めた。 Ⓒ農村部の小学校について 今年度もミャンマーで学校建設の支援活動を行っている民間団体「パゴダの会」代表の古庄重生氏をお招きして学習会を行った。また古庄氏が建設した農村部にある小学校への支援計画（文房具の支援）や交流内容（日本の遊びやダンス）の準備を行った。 Ⓓミャンマーで活躍する日本の方々について 現地で AAR Japan（特定非営利活動法人 難民を助ける会）ヤンゴン事務所を訪問する。その活動について学習し，支援のあり方について考えた。またヤンゴンスズキ代表取締役である山崎和人氏とミーティングを持つ。その準備の一環として，氏の活動を通してミャンマー情勢について学んだ。 Ⓔその他 ミャンマーに直接関係する学習以外に，「紛争解決シミュレーション」や「課題研究・プレゼンテーションのメソッド習得」のワークショップを行った。
１月２２日～２７日	ミャンマー現地研修：６日間 ・ヤンゴン市内の ISM では３クラス（小５・中３・高２）に対し，英語でヒロシマに関するプレゼンテーションと小グループでのディスカッションを実施。さらに小学１年生のクラスでは，折り紙やダンスでも交流。英語によるコミュニケーション力を磨く機会となった。放課後は隣接する公立小学校へボランティア活動を行う ISM 生徒に同行した。また ISM 生徒宅へホームステイし，ミャンマー文化により密接に関わることができた。 ・パゴダの会の古庄重生さんが建設に関わった農村地帯の小学校（テンゴン小学校・ペーヨンセー小学校）を 2 校訪問。両校で支援物資を渡した。また事前に準備した日本の遊びやダンスで交流した。ヤンゴンの中心地と農村部

の住居・教育・インフラ等の環境を比較することを通して，発展途上国について見識を深めることにもつながった。
・AAR Japan ヤンゴン事務所では，障がい者の職業支援の現状を学び，その国の歴史・文化・社会状況に合わせた支援の在り方や課題，そこで活躍する日本人スタッフの姿に向き合った。ミャンマースズキ代表取締役の山崎和人氏からは，「ミャンマーの労働観と協働」「ミャンマーの発展」についてご自身の経験をもとに話を伺った。なおこのテーマは研修参加生徒が設定した。
●事後学習
事後レポート作成と学びのシェア，英語による成果報告書の作成，中高のアセンブリーでの発表，各学年の LHR での研修報告等を実施。言語化や語らせることで体験を学びへ昇華し，全校生徒と研修での学び共有することに努めた。また現地研修を通じて AAR Japan の活動資金が厳しいということを知った。生徒たちはミャンマーの障がい者の就労において AAR Japan の存在が必要と考えたので，AAR Japan の広報を行うとともに，そこの洋裁コースの学生が作製している商品を輸入し，文化祭で販売，利益を支援金として贈ることを計画している。

〈トビタテ！留学 Japan〉

学年： 高 1 **対象人数：** 2 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： トビタテ！ 留学 Japan
○留学派遣先・期日

・カナダ	バンクーバー	7/21 ～ 8/12
・カナダ	バンクーバー	7/30 ～ 8/20

派遣先	研 修 の 概 要
cloud nine college	語学学校で英語を学ぶとともに，核廃絶に向けた署名活動を行う
cloud nine college	語学学校で英語を学ぶとともに，日本文化を海外に発信する

その他：

今回，４期生の本校の応募者は３人で，そのうち合格者は２名であった。高校生３人はいずれもテイクオフコースに応募したが，そのうち，2 人が合格した。今回高い競争率を勝ち抜いた二人は，留学する強い志望動機があること，自己アピールできるものを持っていること，そして，独創性があると感じさせる応募内容であった。

（ｅ） 海外からの受け入れ

例年実施している Peace Forum に加え，海外からの生徒・教職員を受け入れるなど，SGH 指定校として先進的な取り組みを企画・実施した。

〈Peace Forum〉

学年： 高校生 **対象人数：** 本校 45 名 他校 70（うち海外 4）

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： Hiroshima Jogakuin

実施日（月）	研 修 の 概 要
June – August 6	This year's Peace Forum focused on the Prohibition of Nuclear Weapons Treaty or the Ban Treaty. How to make the Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons (the Ban Treaty) a reality for all countries. Schools did the following tasks before the Peace Forum. 1. Understand the basics of this treaty. 2. Schools will research 7 countries that did not participate. There are 3 Nuclear Weapon States (NWS) and 4 other non-participant countries. 3. Research reasons why each country did not participate in the Ban Treaty.
August 7	4. Propose ideas on how each country could come to participate in the Ban Treaty. This year's forum had two guest speakers; Dr. Hirofumi Tosaki, a Senior Research Fellow at the Center for the Promotion of Disarmament and Non-Proliferation, the Japan Institute of International Affairs. Wakana Mukai, formerly a special assistant professor at Tokyo University, and now a lecturer at Asia University. She specializes in Disarmament and Non-Proliferation. Drs. Tosaki and Mukai presented an overview of the Treaty and difficulties involved in countries signing it. Their explanations gave students some clear ideas they could use in their discussions. In the afternoon, students were divided into 7 groups. Each group represented a country that students had researched. In each room, students made presentations about their country and how people could influence their governments to sign the treaty. Students were given two and a half hours to present, discuss and come to a consensus about their countries. Although this time was short, many groups came up with some interesting proposals. The United States group came up with a plan for students to start a social media campaign to raise awareness of nuclear weapons, followed by an increase of schools actually teaching about nuclear weapons and their destructive powers. These two actions would lead to people asking the US government to join the Ban Treaty.

After all the groups gave their presentations, the guest speakers gave some comments on what students presented. Dr. Tosaki asked the students to think about what you are asking people to do and how they would react.

The Peace Forum concluded with students taking home an action plan that they will work on throughout the year. The main aim of the Peace Forum is for students to think about what they, as high school students, can do to work for a nuclear free world. Although this forum only had 120 students attending from Japan and America, the students learned about the challenges we face in working toward a nuclear free world, and hopefully, they learned that working together they can change the world.

〈その他海外からの受け入れ〉

学年： 高校生　　**対象人数：** 118 **名**

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： Hiroshima Jogakuin

実施日（月）	研　修　の　概　要　（括弧内は本校の参加生徒数）
7 月 26 日	AIG 高校生外交官プログラム（9 名）
8 月 2 日	NPO 法人広島国際交流センターを通じた韓国人生徒との交流会（7 名）
8 月 3 日	MEP の一環で日本を訪れた中東の教員と交流・碑めぐり案内（9 名）
8 月 7 日	本校の Peace Forum にプナホウスクール他外国人生徒が参加（42 名）
9 月 8 日	上智大学留学生の広島研修　研修協力（4 名）
2 月 1 日	ミャンマーインターナショナルスクールの広島研修　研修協力（20 名）
2 月 21 日	早稲田大学　Global Leadership Fellows Program　研修協力（10 名）
その他	長期留学（ベネズエラ，ドイツ，タイより計 3 名） 短期留学（韓国より 1 名）

（ｆ） 生徒の国内研修

課題解決に向けた生徒の主体性を培う場として，東京大学アーカイブ研修，沖縄リーダー研修，カンボジア研修成果発表会などを企画・実施した。いずれの研修も，校内の課題研究をより充実させるとともに，大学との連携や高校生と交流する中で，グローバルリーダーとしての資質を養うことを目的とした。また，発展的課題を生徒自身が見出し，解決する力を身につけることも視野に入れ，基本的に昨年度のプログラムを踏襲しつつも，新たな活動を積極的に取り入れるなど工夫した。

〈東京大学アーカイブ研修〉

学年： 高校１年，２年　　**対象人数：** 10 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： 東京大学大学院 渡邉研究室（本郷キャンパス）

実施日（月）	研 修 の 概 要
1 月 12 日 ～ 1 月 13 日	東京大学大学院の渡邉英徳研究室を訪問し，ヒロシマ・アーカイブをより良いものにアップロードさせるために，デジタルアーカイブについての専門技術を学んだ。研修の内容は下の①～④である。 ①APPLO のレクチャー デジタルアーカイブ構築ツール「APPLO」の説明を受けた。APPLO は博物館の収蔵庫に相当するツールで，アーカイブでは公開できないような情報もアーカイブのデータと結びつけることで，後の世代に様々な情報を残せることを学んだ。 ②動画を用いた対話型のワークショップ ニコニコ動画を用いて，中国の抗日戦争を題材とした映画とそれに対する日本の視聴者の反応を見ながら，映画に対して客観的に評価をすすめた。 ③ワークショップ iMovie を使った映像制作の説明を受け，実際に制作する体験を行った。

〈沖縄リーダー研修〉

学年： 高２　　**対象人数：** 12 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： 沖縄修学旅行事前研修

実施日（月）	研　修　の　概　要
４月	高２生徒全体から事前研修参加者を募集 小論文と面接による審査を経て１２人を選出
５月 ～ ６月	事前学習・研修内容の企画 今年度の修学旅行（2 日目）の平和学習がより内容の濃い研修となるよう，６つコースを設定。事前研修参加者が，６つのコースのいずれかを担当し，具体的な研修内容を企画した。 **共通コース** ・平和祈念資料館・平和の礎・ひめゆりの塔・糸数壕 **グループ別コース** ①沖縄尚学高校との交流会 ②平和祈念公園周辺フィールドワーク ③南風原文化センター ④対馬丸記念館 ⑤沖縄市の米軍基地周辺のフィールドワーク ⑥普天間市の米軍基地周辺のフィールドワーク
６月 １日目	事前研修 担当により研修参加メンバーを２班に分け，研修を行った。 **グループ①研修ルート** 嘉数の高台・上大謝名さくら公園から普天間基地見学・沖縄国際大学（米軍ヘリ墜落跡）・琉球大学にてディスカッション（協力：(株)がちゆん） **グループ②研修ルート** 沖縄市観光協会の案内で，基地の町コザ探索・道の駅かでなより嘉手納基地見学（協力：（株）がちゆん・沖縄市観光協会） ホテルにて振り返りを行い，互いの研修内容を共有した。
２日目	対馬丸記念館（学芸員による案内，記念館，「小桜の塔」見学） その後，担当により研修参加メンバーを２班に分け，研修を行った。 **グループ① 研修ルート** 平和祈念公園・平和の礎・摩文仁の丘，摩文仁の丘・健児の塔・ギーザバンタ（慶座絶壁）・広島の塔・ひめゆり散華の跡・南風原文化センター（南風原（陸軍病院 20 号見学・飯上げ体験）などを実施 （協力：沖縄平和ネットワーク・ひめゆり会館） **グループ② 研修ルート** 南風原文化センター（南風原（陸軍病院 20 号見学・飯上げ体験）などを実施 （協力：南風原文化センター）
８月 ９月	９月からのＰＳにおけるコース別事前研修内容の企画の作成 企画書にしたがってＰＳのＬＨＲにて，各コース内を小グループに分けて事前研修と発表を実施し，しおりを作成。 沖縄尚学高校との交流グループは，スカイプによる打ち合わせを実施。
１０月	修学旅行本番で，各コースをリードするはずが，3 月に延期。
3 月	修学旅行で，各コースともに最終の事前準備確認と当日のリードを行った。

〈カンボジア合同研修発表会〉

学年： 高１・高２　　**対象人数：** 7 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先： 平成 30 年度 SGH 等合同カンボジア研修会

実施日（月）	研　修　の　概　要
12 月	・参加生徒の選抜 これまでカンボジア研修に参加した高 2 から 3 名を選抜した。
12 月	・事前学習の実施（3 回） 本校の研修の概要をするプレゼンの準備と，研究会のグループディスカッションのテーマ（以下に示す）について，調べ，共有した。
1 月	・平成 30 年度 SGH 等 8 校合同カンボジア研修会に参加。（1 月 5 日（土）～6 日（日），奈良県内にある奈良ユースホステルで開催。 昭和女子大学附属昭和高校，啓明学園高等学校，西大和学園高等学校，三重県立四日市高等学校，関西学院高等部，和歌山親愛高等学校，岡山学芸館高等学校，広島女学院高等学校（和歌山信愛高等学校と西大和学園高等学校が共同幹事校）から計 56 名が参加。 ・各学校による学校とカンボジア研修の紹介 ・奈良教育大学　中澤静男教授による基調講演 「持続可能な社会の創り手となるために～ＳＤＧｓとＥＳＤ」 ・ワークショップ①「カンボジアに残したいもの」実施 ・ワークショップ②「なぜそれを残したいのか」実施 ・「よりよいカンボジア・日本・地球社会にするために私たちがやりたいこと」をテーマに８００字で作文作成（翌日までの課題） ・ワークショップ③「私たちにできること」実施 ・まとめ

（g） 生徒による主体的な活動

以前から本校で行っている「核廃絶署名活動」「平和公園内の碑を案内する活動」については，今年度も上級生が下級生に対してレクチャーをする形で，生徒の主体性な活動として運営されている。長年取り組んでいるヒロシマ・アーカイブの制作については，その活動で得た技術を用いて優れた映像作品をつくりあげ，グローバル規模で活躍する生徒がでるなど，活動の幅が広がりつつある。

〈核廃絶署名活動・ヒロシマ・アーカイブ制作活動〉

学年： 全学年　　**対象人数：** 名

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先：
・核廃絶署名活動（原爆ドーム前，元安橋，本通パルコ前）
・ヒロシマ・アーカイブの被爆証言集録（校内放送室，被爆者自宅など）

実施日（月）	研　修　の　概　要
	有志生徒が署名実行委員となって，校内の生徒や市内高等学校生徒に呼びかけて街頭署名を行うとともに，全国の高等学校に署名協力を依頼している。この署名活動は国連社会経済理事会登録の NGO である平和首長会議の 2020 ビジョン「核兵器禁止条約早期締結を求める署名活動」と協力し，「核廃絶！ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」として活動している。さらに，この活動の原点として，被爆者の体験や思いを継承することを目的として被爆体験の証言収録を行ってきた。
4 月	・4 月 14 日，広島市役所で平和首長会議の会長である松井一実広島市長に面会し，2017 年度（第 10 期）の署名 65,213 筆を手渡した。参加生徒 3 名。 ・4 月 21 日，本校生徒と市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 24 名，外部生徒 13 名参加。 ・4 月 29 日，本校の放送室で被爆者の森富茂雄さんの証言収録を行った。参加生徒 3 名。
5 月	・5 月 26 日，本校生徒と市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 55 名，他校生徒 16 名参加。
6 月	・6 月 5 日～6 日，東京大学大学院の渡邉英徳先生と研究室の大学院生や学部生を招き，本校の会議室でヒロシマ・アーカイブを使った平和学習ワークブックプロジェクトとヒロシマ・アーカイブプロジェクトおよび白黒写真のカラー化についてワークショップを行った。参加生徒 22 名。 ・6 月 6 日，本校の放送室で被爆者の諏訪了我さんの証言収録を行った。参加生徒 10 名。 ・6 月 16 日，本校生徒と市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 55 名，他校生徒 15 名参加。
7 月	・7 月 16 日，神戸市の聖ミカエル教会を訪問し，平安女学院中学高等学校，神戸国際学院大学付属高等学校，松蔭中学高等学校，プール学院高等学校の生徒 46 名と交流を行い，8 月に来広して行う署名活動について説明した。参加生徒 2 名。 ・7 月 17 日，本校の放送室で被爆者の山迫祐三さんの証言収録を行った。参加生徒 6 名。 ・7 月 19 日，ヒロシマ学習で来校した女子学院生徒のうち本校訪問を希望した生徒 20 名との交流会を行い，活動を報告し平和の問題核の問題について討論した。参加生徒 13 名。

・7 月 31 日～8 月 1 日，神戸女学院中学高等学校の生徒 16 名，金城学院高等学校の生徒 18 名が来校し，平和集会を行った。1 日目は平和のために自分たち中高生ができることについて各校からの問題提起を行って討論した。2 日目は平和公園の碑めぐり案内をしたのち公園内で署名活動を行い，その後資料館を見学した。

8 月
・8 月 3 日，本校生徒と県外・県内・市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 54 名，他校生徒 17 名参加。
・8 月 4 日，本校生徒と県外・県内・市内高等学校の生徒にハワイからの高校生も参加して街頭署名活動を行った。本校生徒 51 名，他校生徒 32 名参加。
・8 月 5 日，本校生徒と県外・県内・市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 31 名，他校生徒 106 名参加。

9 月
・9 月 12 日，本校の放送室で被爆者の前田瑞枝さんの証言収録を行った。参加生徒 5 名。
・9 月 15 日，本校生徒と県外・県内・市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 34 名，他校生徒 6 名参加。
・9 月 21 日，広島市が主催する国際平和デー記念行事に参加した。参加生徒 3 名。

10 月
・10 月 27 日，本校生徒と市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 27 名，他校生徒 13 名参加。

11 月
・11 月 6 日，本校の放送室で被爆者のピーターソンひろみさんの証言収録を行った。参加生徒 8 名。
・11 月 17 日，本校生徒と市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 24 名，他校生徒 53 名参加。
・11 月 24 日，広島市長公館にて広島市長との意見交換会に参加。本校生徒４名，他校生徒 11 名参加。

12 月
・12 月 15 日，本校生徒で街頭署名活動を行った。参加生徒 32 名。
・12 月 19 日，広島研修で来広した昭和女子大学付属高等学校の生徒に碑めぐり案内をし，活動の紹介や討論などを行った。参加生徒 5 名。

1 月
・1 月 12，13 日，東京大学大学院の渡邉研究室を訪問。アーカイブ実習を行い，技術の習得や中国の原爆観などについて学んだ。本校生徒 10 名参加。

2 月
・1 月 19 日，広島市主催のヒロシマ・ピースフォーラム パネルディスカッションにパネリストとして本校生徒 1 名参加。
・2 月 16 日，本校生徒と市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 32 名，他校生徒 21 名参加。
・2 月 19 日，本校の放送室で黒川清美さんの証言収録を行った。参加生徒 14 名。

3 月
・3 月 16 日，本校生徒と市内高等学校の生徒で街頭署名活動を行った。本校生徒 27 名，他校生徒 14 名参加。

＜平和公園　原爆慰霊碑　案内＞

学年：　全学年

課題研究に関する活動・取り組み

研修派遣先：　　碑めぐり案内（平和公園内の碑を案内する活動）

実施日（月）	研　修　の　概　要
4 月	アメリカ人留学生　1 名を案内
8 月	香蘭女学校中等科・高等科　生徒 17 人を案内
	群馬共愛学園高等学校　生徒 14 人を案内
	関西創価高等学校　生徒 14 人を案内
	新潟敬和学園高等学校　生徒 20 人を案内
	大阪 YMCA 専門学校　生徒 35 人を案内
	東京女子大学　学生 20 人を案内
	中東出身の教員，ハワイからの留学生を 21 名を案内
9 月	啓明学院中学校　生徒 180 人を案内
2 月	ミャンマーの高校生 12 名を案内
	フェリス女学院高等学校　生徒 180 を案内

〈模擬国連大会〉

学年：　高１・高２　　**対象人数**：　６＋２＋６　名

課題研究に関する活動・取り組み

模擬国連活動

研修派遣先：　大阪模擬国連，第 11 回 全日本高校模擬国連大会（全国 決勝大会，国連大学），玉川大学模擬国連

実施日（月）	研　修　の　概　要
	本校では，模擬国連活動を生徒の平和観・対話力・リーダーシップを伸ばす重要な活動のひとつと位置づけ，３つの大会に参加している。
５月	大阪模擬国連(MUNO)では，先述した選抜授業 GI 受講生徒より　名が参加した。今年の議題は気候変動で，健康・社会保障，食料安全保障，気候変動対策の３つの視点から会議をもった。
６月	
７月	第 11 回全日本高校模擬国連大会の募集要項・選考課題が発表された後，行内選考についての説明会を実施し，4 名の応募があった。夏休みに選考課題に取り組んだ生徒は，課題資料を読み込み，指定字数にまとめ選考課題を提出した。校内選考を通過した高 2 のペアが予選を通過した。本校としては 3 年連続 5 回目の全国大会出場であった。
８月	
９月	
１０月	
１１月	玉川学園模擬国連には SGH して以来参加を継続しており，６名の生徒が参加した。「イラク戦争後の平和構築」をアジェンダとして，エジプト，オーストラリア，イエメン大使として会議に臨んだ。
１２月	
１月	

（h） 大学・他校との連携

SGH 指定を受けて以来，順調に推移しており，昨年度は減少したものの，今年度は 33 校で目標値の 30 校を超えた。SGH 指定前の平成 25 年度と比較すると，7 倍強となっており，5 年間の SGH 指定期間において，海外大学・高校との連携は飛躍的に強化されたといえる。

指標（アウトプット）	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度実績	平成 30 年度目標
c. 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	4 校	9 校	23 校	30 校	26 校	33 校	30 校

海外の連携大学・連携校 一覧

大　学
- マウントユニオン大学
- モントレー国際大学院
- ソウル大学
- 建国大学校
- 延世大学
- スタンフォード大学
- ハワイ大学
- トリニティカレッジ・ダブリン
- セントメアリーズ大学

その他
- Amyaung Kone Village の小学校
- Nyaung Done Township の小学校
- コールフィールド PS

高　校
- プナホウ高校(US)
- ファリントン高校(US)
- ササーダスム高校(Cambodia)
- キルヴィントン高校(AUS)
- 建国大学附属高等学校(Korea)
- インターナショナルスクールオブミャンマー(Myamar)
- Alliance Dr. Olga Mohan High School(US)
- Choate Rosemary Hall(Us)
- Harker School(US)
- International Polytechnic High School(US)
- Pacific Grove High School(US)
- Rock University High School(US)
- Salinas Union High School(US)
- Alisal High School(US)
- Everett Alvarez High School(US)
- North Salinas High School(US)
- Salinas High School, Salinas(US)
- York School(US)
- Lyceum(Russia)
- School No. 4(Russia)
- School No. 164(Russia)

一方，日本国内においても下記の通り多くの学校と連携している。昨年度の報告書でも指摘したように，その主な要因は**「生徒間および教員間のネットワークの拡大」**にある。これらは課題研究を深化させるにとどまらず，指導内容や方法における質的向上にもつながってきた。この 5 年間で築いた他校との連携体制を SGH 指定終了後も維持し，さらなる発展に努めていきたい。

国内の連携大学・連携校 一覧

大　学

広島女学院大学
広島市立大学
東京大学（SGU）
首都大学東京
一橋大学
早稲田大学（SGU）
上智大学（SGU）
立教大学（SGU）
広島大学（SGU
大手門学院大学
明治学院大学
山梨学院大学 iCLA
立命館大学（SGU）
昭和女子大学
広島修道大学
東京女子大学
長崎大学
京都大学(SGU)
ＩＣＵ(SGU)
神戸大学(SGU)
同志社大学(SGU)

中学・高校

盈進中学高等学校
広島学院高校
ノートルダム清心高等学校
広島市立舟入高等学校
武田中学高等学校
広島文教女子大学附属高等学校
広島城北高等学校
AICJ 中学高等学校
崇徳学園高等学校
広島大学附属高等学校
新潟光晴中学校
北星学園女子中学高等学校
遺愛女子中学高等学校
宮城学院学院中学高等学校
尚絅学院中学高等学校
敬和学園高等学校
共愛学園高等学校
新島学園中学高等学校
茗渓学園中学高等学校
松戸市立松戸高等学校
女子学院中学高等学校
頌英女子中学高等学校
啓明学園高等学校（アソシエイト）渋谷教育学園渋谷高等学校（SGH）
昭和女子大学附属昭和高等学校（SGH）
香蘭女子中学高等学校
品川女子高等学校
大妻中学校高等学校
玉川聖学院中等学校・高等部
玉川学園高等部・中等部（SGH）
フェリス女学院中学高等学校
神奈川県立横浜国際高等学校（SGH）
金城学院中学高等学校
三重県立四日市高等学校（SGH）
同志社国際中学高等学校（SGH）
聖カタリナ高等学校
神戸女学院中学高等学部
関西創価中学高等学校（SGH）
関西学院高等部（SGH）
啓明学院中学高等学校（SGH）
関西学院千里国際学院高等部（SGH）
神戸国際大学附属高等学校
奈良県立畝傍高等学校（SGH）
西大和学園中学高等学校（SGH）
大阪女学院中学高等学校
大阪府立能勢中学高等学校
和歌山県立田辺高等学校
和歌山信愛中学高等学校（アソシエイト）
キリスト教愛真高等学校
岡山学芸館高等学校（SGH）
愛媛県立宇和島中等教育学校（SGH）
福岡女学院中学高等学校
活水高等学校
長崎県立長崎東高等学校（SGH）
長崎県立口加高等学校
ルーテル学院中学高等学校
九州学院中学高等学校
活水高等学校（アソシエイト）
宮崎県立大宮高等学校（SGH）
沖縄尚学高等学校

など，多数

7 目標の進捗状況，成果，評価

本校は，74 年前の被爆体験を機に平和教育活動に力を入れてきたが，多様化するグローバル世界の中で，より普遍的な平和を構築していくために，現行の実践を大幅に見直す必要に迫られていた。特に近年は「ヒロシマ」を学ぶことが目的と化し，平和教育活動を通じたジェネリックスキルの育成につながっていなかった。

よって，この SGH 構想において，「核の惨禍のない世界を創り出す，しなやかな女性」という目標の下，**生徒と教員が共同でグローバル人材を育成**していくことを目指し，“Peace Studies”の開発や国内外の研修，教科教育との連携に努めてきた。

以下，その成果について，本校が構想調書の中で設定した 3 つの力 ①平和観 ②対話力 ③リーダーシップ に加え，本校が設定した最適と思われる指標や独自のアンケートの結果を踏まえながら，定量的に成果を分析し評価を試みることとする。

（1） 生徒の変容 ── グローバルリーダーとしての力がどれくらい身についたのか

本校の生徒が抱える課題として，構想調書には ⑴内向き志向 ⑵論理的思考力の未発達 ⑶主体性の未発達 の 3 点を挙げた。こうした状況を克服できているかどうかを，本校が設定した指標である ①平和観 ②対話力 ③リーダーシップ の 3 要素から分析したい。

① 平和観の成長

⑴内向き志向 から脱却し，「平和を創るという視点から，世界を見る力」を育成していくことを目指し，SGH の関連事業はもちろん，日々の授業や本校独自の教育プログラムにも工夫を凝らしてきた。独自アンケート項目の指標により，5 年間のデータの推移を以下に示す。

指標（アウトカム）/年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 30 年度目標
自主的に留学または海外研修に行く生徒数	30 名	71 名	99 名	135 名	123 名	104 名	90 名
将来留学したり国際的に活躍したりしたいと思う生徒の割合	30.0%	55.5%	61.1%	64.6%	65.8%	65.1%	80 %

「自主的に留学または海外研修に行く生徒数」は，SGH 指定以降，順調に増加してきた。平成 27 年度からは**平成 30 年度の目標値を上回る成果を残し，今年度も 104 名**という成果をあげることができた。SGH 校に指定されて以来，海外留学や研修に関心を持つ生徒が増え，今年度は，生徒自身が留学プログラムや海外研修を見つけ出し，厳しい選抜試験を突破するにまで至った。その背景には，生徒全体の意識の高まりがある。平成 30 年度の目標値である 80%には到達しなかったが，「将来留学したり国際的に活躍したりしたいと思う生徒の割合」は，SGH 指定以前の 30.0%（平成 25 年度）から指定最終年度（平成 30 年度）は 65.1%と 35%を超える伸びを示している。

全体の生徒数から換算すると，500 名近くが留学や国際舞台での活躍を意識するようになったということである。その意味で，SGH プログラムの成果として，生徒の関心がグローバル社会に向いていると言えよう。

問１：以前よりも国際問題に興味をもつようになった。

アンケート回答項目：（1.そう思う　2.ややそう思う　3.あまりそう思わない　4.そう思わない）

＜経年比較＞　（%）

学年	全体				
回答番号	H26	H27	H28	H29	H30
1	29.5	35.3	39.6	42.2	48.1
2	46.5	45.5	45.6	46.4	41.6
3	18.4	16.0	11.6	9.2	6.9
4	5.7	3.2	3.2	2.3	3.4

平成 30 年度の数値を見ると「以前よりも国際問題に興味をもつようになった」という問いに，1.そう思う 2.ややそう思う と答えた生徒の割合は **90%前後の高い数値** を示している。これは，**生徒の実情や発達段階などをふまえて構築した Peace Studies をはじめとする本校の SGH プログラムが，しっかりと機能している**こと，並びに**「成長目標の共有を通じた生徒・教員協働による」「グローバル人材育成」という研究開発名にも適った形**で本校の SGH プログラムが実践されたことを意味している。

問３：将来留学したり，仕事で国際的な場で活躍したりしたいと思うようになった。

アンケート回答項目：（1.そう思う　2.ややそう思う　3.あまりそう思わない　4.そう思わない）

＜経年比較＞　（%）

学年	全体				
回答番号	H26	H27	H28	H29	H30
1	23.2	26.3	30.2	33.2	35.9
2	32.3	34.8	34.4	32.6	30.3
3	30.9	28.2	26.4	25.0	25.4
4	5.7	3.2	9.1	9.2	8.3

本校独自アンケート項目「将来留学したり，仕事で国際的な場で活躍したりしたいと思うようになった」という問いにおいても，1.そう思う 2.ややそう思う と答えた生徒は全体的に増加傾向にある。特に着目すべき点は，**年を追うごとにこの問いの 1.と 2. に回答した生徒の割合が伸びてきている**ことである。SGH 指定の初年度（平成 26 年度）では，1.に回答した生徒は 23.2%にとどまっていたが，指定最終年度（平成 30 年度）は，35.9%と +15.6%も上昇した。

② 対話力の育成

「価値観の異なる他者とのコミュニケーション力」を培うには，グローバル社会における共通語である「英語」の力，そして，対話において不可欠な「論理的言語能力」とを高めていくことが不可欠である。例年同様に以下の指標を用いて今年度の成果を分析する。

指標（アウトカム）/年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成30年度目標
卒業時 CEFR B1～B2 レベルの生徒の割合	32 %	54.3 %	60.0 %	58.0 %	59.2 %	75.0 %	85.0 %
TOEFL iBT 継続受講者の平均点推移	42 点 11 名対象	62.5 点 11 名対象	70.5 点 11 名対象	55.0 点 9 名対象	67.0 点 11 名対象	72.2 点 5 名対象	85 点
TOEFL iBT の対策授業受講者の平均点	―	―	49.7 点 33 人	51.8 点 26 人	67 点 11 名	72.2 点 5 名対象	―

ＣＥＦＲ Ｂ１ ～ Ｂ２ レベルの生徒の割合 (%)

中１生徒	0.4	0.5	3.6	2.8	2.9	2.0
高３生徒	32.4	54.3	60.0	58.0	59.2	75.0

卒業時に CEFR B1 ～ B2 レベルの資格を獲得した生徒の割合は，今年度，**全体の 75.0 %**となり，昨年度から ＋15%と飛躍的に伸びた。SGH 指定の最終年に当たる平成 30 年度の目標値 85.0%には到達しなかったが，指定以前の 32%から 43%も上昇した（約 2.3 培）のは，間違いなく SGH 指定校になったゆえの成果である。また，**英語検定準 1 級取得生徒は，全校で 46 名と過去最高値を更新し，卒業時の取得率は 10%を超える。**

入試改革の過程で，英語検定や GTEC などの外部試験を導入する大学が増えたため，また，受験費用が高額であることに加え，広島会場では試験が実施されないことが影響し，TOEFL を受験する生徒は，今年度，5 名（報告書作成時判明分）にとどまった。しかしながら，平均得点は 70 点を超え，高い英語力を備えた生徒が育っていることは間違いない。（Global Issues を選択している生徒および高度な英語運用能力を持つ中学生を対象に実施している TOEFL 対策授業を受講した生徒が，4～5 月にかけて受験を予定している今年度の取得者数。の生徒の得点を加味すると，平均得点はより上昇すると思われる。）

問２：以前より英語力を高めたい（高める必要がある）と思うようになった。

アンケート回答項目：（1.そう思う　2.ややそう思う　3.あまりそう思わない　4.そう思わない）

＜経年比較＞ (%)

学年	全体				
回答番号	H26	H27	H28	H29	H30
1	42.6	48.3	57.2	60.8	58.7
2	37.6	36.1	34.0	29.8	31.1
3	14.4	12.6	6.0	7.0	7.2
4	5.6	3.0	2.8	2.4	3.0

本校独自アンケート項目「以前より英語力を高めたい（高める必要がある）と思うようになった」という問いの指定 5 年間の推移は，上記のとおりである。1.そう思う 2.ややそう思う と答えた生徒は 9 割超え，グローバル社会における英語力の重要性を理解した上で，生徒たちは英語による対話力の向上に努めてきたことが分かる。

「論理的言語能力」を測る客観的指標として，一昨年度から GI 授業を選択する生徒対象に「学びみらい PASS」（河合塾）を試験的に導入してきた。予算の関係上，本年度は，来年度 GI 授業を選択することが決まった中 3 生 16 名を対象に実施した。

また，新テスト入試の 1 年面に当たる高 1 生徒全員が「GPS-Academic」（ベネッセコーポレーション）を受験した。

③ リーダーシップの育成

本校の抱える課題である ⑶主体性の未発達 を克服し，生徒自らの意志で社会貢献や自己研さんに取り組み，価値観の異なる他者との ②対話 を通じて，合意を形成していく③リーダーシップ の育成を図ってきた。

構想調書に記した平成 30 年度の指標と今年度の実績は，以下の通りである。

指標（アウトカム）	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 30 年度目標
a. 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数	70 名 （延べ 400 名）	440 名 （延べ 1716 名）	525 名 （延べ 2664 名）	606 名 （延べ 3000 名）	501 名 （延べ 3799 名）	571 名 （延べ 3260 名）	400 名
d. 公的機関から表彰，公益性の高い国内外の大会の入賞者数	5 名	10 名	11 名	13 名	19 名	24 名	20 名

指標（アウトプット）	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 30 年度目標
f. グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	5 名	482 名	703 名	712 名	728 名	1117 名	500 名

★指標（アウトカム）a. 501 名の数は，本校独自アンケート「問５：今年度，自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に参加した」（アンケート回答項目： 1.参加した 2.参加しなかった）による。
（2018 年 4 月から 2019 年 3 月まで。）

アウトカム指標の「a.**自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数**」は，指定初年度に当初設定した平成 30 年度の目標値を上回る形で最終年度を終えることが出来た。また，「d.**公的機関から表彰，公益性の高い国内外の大会の入賞者数**」も昨年度の 19 名からさらに 5 名増えて 24 名となり，**最終目標を達成することができた**。

アウトプット指標の「f.**グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数**」も昨年度から＋400 名となり，平成 30 年度の目標値の 2 倍を超えた。

特筆すべき活躍としては，グローバル規模の会議や大会に出場し，上位入賞者を輩出してきたことである。具体的には，NPT 再検討会議における活動やイェール大学で行われた World Sholar's Cup 決勝大会進出，国際平和映像祭 学生部門賞受賞 などが挙げられる。詳細については，**６ 研究開発の実績**（ａ）グローバル規模で成果を挙げた生徒 の項目を参

照されたい。

こうした成果につながった背景には，SGH 指定以降，各種研修や大会などの参加者数（アウトプット指標）の飛躍的な伸びがある。以下，目標設定シートに記した指標の数値の伸びを示す。

指標（アウトプット）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成30年度目標
a. 課題研究に関する国外の研修参加者数	32 名	62 名	77 名	117 名	123 名	104 名	100 名
c. 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	4 校	9 校	23 校	31 校	24 校	29 校	30 校
d. 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	100 名	110 名	1326 名	1629 名	1841 名	1932 名	2000 名
e. 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	2 名	15 名	40 名	48 名	60 名	278 名	35 名
g. 帰国・海外人生徒の受け入れ者数（留学生含）	121 名	95 名	144 名	112 名	170 名	122 名	190 名

目標値に若干到達しなかった項目もあるが，ほとんどの項目で目標値をクリアしている。その中でも特に大きく目標値を上回ったのは，「e.課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数」である。

本校は，構想調書作成時は，下記の表のとおり年 3 回の発表会数を予定していた。しかし，SGH 指定年度に新たに組織したグローバル教育推進部が中心となり，本校の実践を頻繁に外部へと発信してきた。（昨年と今年度は，実施予定の 4 倍になる 12 回の発表を行っている。）

指標（アウトプット）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成30年度目標
先進校としての発表会数（回）	0	5	8	9	12	12	3

こうした地道な努力により，多くの賛同者と外部協力者を得て，課題研究をはじめとした SGH プログラムを構築することができた。だからこそ，本校が課題として抱えていた⑶主体性の未発達 を克服し，生徒自らの意志で社会貢献や自己研さんに取り組み，リーダーシップを発揮することができたと考えている。

本校独自のアンケート「**将来何らかのかたちで，グローバル社会で平和に貢献するリーダーになりたいと思うようになった**」の項目においても，全生徒の半数以上が肯定的な解答を

している。特に高い数値を示しているのは，中 3 である。SGH 指定後，課題研究プログラムの内容が練りこまれてきたことや教職員の意識が高まり，より充実した環境下で生徒が研究活動を行うことができたことが背景に挙げられる。

問４：将来何らかのかたちで，グローバル社会で平和に貢献するリーダーになりたいと思うようになった。

アンケート回答項目：（1.そう思う　2.ややそう思う　3.あまりそう思わない　4.そう思わない）

＜経年比較＞　（%）

学年	全体				
回答番号	H26	H27	H28	H29	H30
1	14.4	17.4	17.3	19.9	22.1
2	31.6	34.7	36.8	37.5	33.5
3	39.3	36.3	34.8	32.7	33.7
4	14.9	11.7	11.1	10.0	10.8

以上の経年経過や定量的分析を見ても分かるように，本校の SGH プログラムは，生徒の意欲向上はもちろんのこと，行動の変容をもたらし，グローバル人材育成プログラムとしてきわめて優れた実践であると断言できる。

本校は SGH 構想を掲げる際，⑴内向き志向・⑶主体性の未発達 を課題点として取り上げ，hyper-QU（hyper-Questionnaire-Utilities よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート 図書文化）を指標としてデータ分析を行ってきた。生徒たちの学校生活意欲と満足度を測る心理検査として全国屈指のシェア（全国でのべ 700 万人以上が受検）を誇る QU によって，今年度も，生徒一人一人が安心感を持って主体性を発揮できているかを調査した。今年度の結果は以下の通りである。

Ｑ１：クラスの中で存在感があると思う。(中学)
Ｑ１：クラスやクラブでリーダーシップをとる。（高校）　（%）

アンケート回答項目：（5.あてはまる　4.ややあてはまる　3.どちらとでもない　2.ややあてははまらない　1.あてはまらない）
上記項目の 5.・4. の回答者の合計を%で示している。

Q-U 指標	H28		H29		H30	
	1 回目	2 回目	1 回目	2 回目	1 回目	2 回目
クラスの中で存在感があると思う(中学)　全国平均 35.5%	47.1	43.5	47.1	44.5	51.8	48.8
クラスやクラブでリーダーシップをとる(高校)　全国平均 15.2%	34.9	36.3	39.8	40.9	38.8	40.4

★本年度も，2 回の検査を実施した。（高 3 は 6 月のみ実施した。）
★中学と高校ではアンケートの質問内容が異なるため，単純な比較はできない。表中の二重線以下は，中学時代の Q1 に対するアンケート結果のデータであることを示す。

高校生「Q1：クラスやクラブでリーダーシップをとる」の項目は，1回目より2回目の数値の方が下降してしまうのが全体的な傾向であるが，今年度も2回目に＋1.6%の伸びとなった。本校では，学校行事やクラブ活動の中心的な存在は高校生である。彼女たちが学校全体のリーダー的存在として活躍していることが読み取れる。

Ｑ２：勉強やクラブで周りから認められている。 (%)

アンケート回答項目：（5.あてはまる　4.ややあてはまる　3.どちらとでもない　2.ややあてははまらない　1.あてはまらない）
上記項目の 5.・4. の回答者の合計を%で示している。

Q-U 指標	H28		H29		H30	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
勉強やクラブで周りから認められている(中学)　全国平均 48.8%	70.7	69.9	72.9	71.1	75.7	72.5
勉強やクラブで周りから認められている(高校)　全国平均 27.5%	66.9	64.3	69.6	71.8	73.7	71.5

先に見たQ1のように，自らの存在意義を感じ，リーダーシップを発揮していくには，周囲からの承認を得て，自己肯定感を高めていくことが不可欠である。また，アクティブラーニング型の授業を実践していくに当たっても，周囲の承認の中で自由に意見を言える環境を構築していくことが求められる。

上記データを見ても明らかなように，（特に高校生は）「認められている」と感じる生徒の割合が非常に高い。これは，SGH 校として学校全体でこの課題に取り組んできた成果と言える。また，全国平均と比較しても本校は数段高い値となっている点から，本校の教育実践が生徒の自己肯定感を上昇させるプログラムとなっていることが分かる。

Ｑ３：クラスで行う活動に積極的に取り組んでいる。 (%)

アンケート回答項目：（5.あてはまる　4.ややあてはまる　3.どちらとでもない　2.ややあてははまらない　1.あてはまらない）
上記項目の 5.・4. の回答者の合計を%で示している。

Q-U 指標	H28		H29		H30	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
クラスで行う活動に積極的に取り組んでいる（中学）　全国平均　52.7%	67.9	63.8	71.6	67.5	72.4	66.2
クラスで行う活動に積極的に取り組んでいる（高校）　全国平均　32.9%	58.1	58.1	65.3	59.7	63.6	64.2

「Q3：クラスで行う活動に積極的に取り組んでいる」のデータからも，「生徒の主体性を培う」という構想時点の目標達成に近づいていると思われる。

上記データが示す通り，生徒がクラスの活動を含めた学校行事に積極的に参加する率は，どの学年も全国平均より高まってきた点を踏まえると，**SGH 指定後に実施してきた本校の教育実践が，生徒の変化を促している**と言えよう。

SGH 校の指定を受けてから，課題研究における学習活動だけでなく，日々の授業においても**協働型の学習形態**を取り，生徒同士が主体的に学び合う学習環境の構築に努めてきた。また，**アクティブラーニング型の授業を導入**のための研修を開くなどして，教職員の意識と教授方法を変えていく研修を行ってきた。

SGH 指定後に本校が実践してきたプログラムが，**自己肯定感や安心感をもって**日々の学校生活を送るという「当たり前」の環境を生徒に提供し，彼女たちの**主体的な活動**につながっていったと考えている。

本校の研究開発名は「成長目標の共有を通じた生徒・教員協働による高大連携型グローバル人材育成」であった。この「生徒・教員協働」という部分で，最も「協働」が不可欠となるのが，実は学級集団づくりである。教師はある意図をもって生徒間の関係性を構築していくわけであるが，学級を構成する生徒との「協働」なくして「親和的な学級集団づくり」は不可能である。

QU 開発者であり早稲田大学 教育・総合化学学術院教授でもある 河村茂雄先生は，その著書「アクティブラーニングを成功させる学級集団づくり」（誠信書房 2017 年）でアクティブラーニング型の授業を実践するためには「『従来よりも一段高いレベルの学級集団の状態や質が求められる』ことが，現場の教員たちにいかされていない」（前掲書 p3）と述べ，「汎用的能力（キー・コンピテンシー）」や「リテラシー」の育成が急務の課題となっている学校現場において，最も大切な学級集団づくりの必要性を強調している。

それゆえ，本年度，広島国際会議場で行われた河村先生による研究会（「学級集団づくりと学力向上～学級集団だから出来る「深い学び」をめざして～」）には，本校からも多くの教員が参加し，学級集団づくりと QU の分析手法について探求した。

この項で分析してきた QU の結果からも，**「生徒・教員協働」による「親和的な学級集団づくり」が成功**し，こうした学級集団がベースとなって生徒同士の承認が高まったからこそ，**アクティブラーニング型の生徒主体の学修が可能になった**ことが明らかになった。また，親和的関係性はクラスにとどまらず，クラブ活動や委員会活動，その他の学校行事，さらには校外での活動の場にもいい影響を与え，**本校の生徒がリーダーシップを発揮する力**を養っていったのである。

（２） 実績の分析・成果・評価

（ａ） グローバル規模で成果を挙げた生徒

〈Critical Issues Forum (CIF) in Nagasaki, Japan〉

学年： 高 1, 2 **対象人数：** 2 名

研修派遣先： Critical Issues Forum (CIF) in Nagasaki, Japan

成長目標：

平和観：

The students were expected to produce two presentations. The first about the status of nuclear weapons in the world today. The second would be their own original idea of how they could bring about nuclear disarmament focusing on the Ban Treaty. The students would need to learn many aspects of nuclear weapons and how they function in the world today.

対話力：

First, the students would be required to work together. This would be the first time for these two students to work together. Making sure they were working together, communicating and on the same page would be quite difficult. Next, the students would have to stand up in front of a large audience and make a presentation in English, and possibly answer questions from other participants.

リーダーシップ：

The students were chosen because they wanted to use the knowledge they obtained throughout their years at Jogakuin. These students are leaders in their class and would lead each other in front of a large group of people. They would have to explain why they chose their ideas for disarmament and how they would implement it.

成果：

平和観：

The students' presentation was very successful and well received by the audience and judges. The students learned a great deal about nuclear weapons and what they can do to humans. The two students live in Hiroshima but learned about the Ban Treaty from many different viewpoints to truly understand the effects of nuclear weapons.

対話力：

The students gave a successful presentation to an international audience in English. The students also had to take part in discussions in English throughout the conference and report back their findings. These discussions included topics such as; what high school students can do to raise awareness of nuclear weapons and what they can do at their own high schools to raise awareness.

リーダーシップ：

The presentation allowed the students to become global leaders by presenting to a global audience in English. The presentation is not the final project however, from this experience the students shall go out into the world and use this information to contribute to abolishing nuclear weapons.

成果物： The two CIF students made a report of their presentation to the whole school. They also gave a report about the CIF project at a SGH conference to their school and to one of the founding members of ICAN Mr. Akira Kawasaki.

The conference was covered widely by the local and national newspapers.

〈NPT 再検討会議〉

学年： 高 2・3　　**対象人数：** 2　　**名**

研修派遣先： NPT 再検討会議第二回準備委員会
平和首長会議主催ユースフォーラム（スイス，ジュネーブ）

成長目標: **平和観**：
原爆投下の悲劇を風化させないために，価値観の異なる人々に対して核兵器の廃絶に向けたメッセージを届ける。
対話力：
平和都市ヒロシマの重要性を伝えるために，他国の人々と英語でコミュニケーションをはかる。
リーダーシップ：
被爆地広島で起こったことが今でも重要であることを世界に発信し，核廃絶に向けて他国の人々と共働する。

成果： **平和観**：
他国の人々に対して，自分たちの活動に関するプレゼンテーションを行い，核廃絶に向けた取り組みについて紹介することができた。同世代の若者との交流会においては，平和の実現に向けて自分たち高校生に何ができるのかについて発表することができた。
対話力：
各国の首長や国際機関の代表と英語でコミュニケーションをとることができた。その一方で自分たちの意見を，国際的な舞台で発信するためには，さらに対話力の向上に努める必要性を痛感したようである。
リーダーシップ：
同世代の若者と議論するという今回の経験を経て，平和の実現に向けて他国の人々と共働することが可能であることを認識でき，大きな自信となったようである。

成果物： 平和首長会議主催ユースフォーラムにおける発表スライド
http://www.mayorsforpeace.org/jp/history/2020_2011/data/01_Hiroshima_Jogakuin.ppsx

（b） グローバルリーダー育成プログラム

〈Global Issues I（高１選抜授業）〉

学年： 高 1　　**対象人数：** 20　　**名**

研修派遣先： Global Issues Class with Dr. Robert Jacobs of Hiroshima City University

成長目標： **平和観**：
Students will learn about nuclear weapons in English. As their school was directly affected by the atomic bomb students must learn about nuclear weapons in English, so they can be prepared to talk about it on an international level.
対話力：
Students are encouraged to ask questions and make discussions with the teacher in English. Students are also given opportunities to ask questions after the class is finished in one on one dialogs with the professor.
リーダーシップ：
This class was designed for students to learn about nuclear weapons with the idea that someday they would abolish them. We sincerely believe that these students are capable of becoming world leaders and with this knowledge they will work towards nuclear abolishment.

成果： **平和観**：

The students have learned so much about nuclear weapons, and the difficulties involved in abolishing them. Although the students are still grappling with this challenging topic their level of understanding has come a long way. This can be measured by the amount of questions being asked. In April there were few, now there are many.

対話力：

Students are increasing their English language skills by studying about nuclear weapons in English. The students are asking questions and have had opportunities to discuss and debate nuclear weapons with guests from abroad.

リーダーシップ：

Although the students are still learning this difficult topic in a second language they have had chances to use their knowledge. This summer at the annual Peace Forum held at our school, they made presentations about the Treaty Prohibition of Nuclear Weapons and how it could be implemented to countries that have not signed it. All of the participating students successfully made these presentations in English.

成果物：

〈Global Issues Ⅱ（高 2 選抜授業）〉

学年： 高 2　　**対象人数：** 19＋1 名

研修派遣先： Global Issues Class with Dr. Robert Jacobs of Hiroshima City University

成長目標： 平和観：

Students will continue to learn about nuclear weapons and a variety of topics related to nuclear weapons and peace studies including nuclear treaties, nuclear power, nuclear waste disposal and nuclear accidents in English. Since their school's history is directly linked to the atomic bomb, students must learn about nuclear weapons in English, so they can be prepared to discuss these issues and represent their school internationally.

対話力：

Students should ask questions, and engage in discussions with the teacher and other students in English whenever possible and appropriate. Students are also encouraged to speak with Professor Jacobs in person after class and ask questions.

リーダーシップ：

This class was designed for students to learn about nuclear weapons with the idea of actively working towards their abolishment. We sincerely believe that these students are capable of becoming world leaders and that with the knowledge and academic skills they gain from this class they can effectively work towards a world without nuclear weapons.

成果： 平和観：

The students have learned so much about nuclear weapons, and the difficulties involved in abolishing them. Although the students are still grappling with this challenging topic, the students have made great progress in both their level and range of understanding. This can be measured not only by the quantity of questions students asked, but also by the depth and complexity of the questions asked. Students' final essays showed a much greater level of critical thinking about nuclear issues. Likewise, these essays showed students' ability

to engage in a sustained discussion of the complex problems by putting forth a thesis statement, providing supporting statements, and citing sources for their research and opinions.

対話力：

Students are increasing their English language skills by studying about nuclear weapons in English. The students are asking questions and have had opportunities to discuss and debate nuclear weapons with guests from abroad. This 100% English language lecture series proved challenging to even the most talented students, however, the relevance of each week's topic to their other activities along with Professor Jacobs' scaffolding of lectures for their benefit were consistent sources of motivation.

リーダーシップ：

Students have accepted the challenge of discussing these difficult topics through a second language and frequently taken opportunities to use their knowledge. At the Peace Forum annually held at and hosted by our school in the summer, students shared information on the work of NGOs for peacebuilding with students from around Japan and around the world. Some students successfully participated in this program in English.

成果物： Students wrote a final academic essay in English, based on their own original research, citing sources for evidence, and expanding on topics from class.

〈Global Issues Ⅲ（高 3 選抜授業）〉

学年： 高 3 選抜授業 GI 選択生徒　**対象人数**： 24 名

課題研究テーマ： 国内外の社会課題を主体的に分析するとともに，それに必要な教養を身につける

成長目標：

平和観：

日本の社会課題について多角的に理解する視座を持つ。近代の政治・哲学思想を学ぶことで，課題理解・分析の方法論を身に着ける。

対話力：

ロールプレイを通じて，自己の利益を最大化しつつも他者と合意を形成する力をつける

リーダーシップ：

社会形成意識の高まりをもとに，実際の行動に移して社会に参加し社会課題を変える力をつける

成果：

平和観：

これまであまり触れることがなかった，日本社会が抱えている諸問題について知ることができた。

対話力：

大臣のロールプレイを通じて交渉したことで，対立する主張の論点を分析し，集団の目標について優先順位を決め，一定の合意を形成するコミュニケーション力をつけることができた。

リーダーシップ：

国家予算編成・を通じて主権者としての社会形成意識が刺激された。自分のグローバルリーダーとしてのキャリアを具体的に描くことで，成長目標が明確になった。

成果物： 学期末課題レポート

〈ディベートフォーラム GROW〉

学年： GI 高 2　　**対象人数：** 20 名

課題研究テーマ： Global Issues IIにおける核軍縮課題研究やハワイ研修と関連付けながらウェブ上で議論を行う

成長目標：

平和観：
大学生の助言により，自分の発言内容を省察し，大学レベルの広い視点にたつことができるようになる。

対話力：
自分や他生徒・メンターの発言内容を振り返ることで，自分の考えや多様な意見をメタ認知し，より論理的な議論ができるようになる。

リーダーシップ：
メンターが行うディベートのファシリテーションから，多様な意見を整理し合意形成に導いていく力を身につける。

成果：

平和観：
1 年間の意見交換を通じて，例年より多い延べ 30 名・5 大学出身のメンターが本校生徒に助言した。特に今年は，同じ選抜授業・研修を経験した卒業生から助言が得られた。国内の社会問題解決やハワイ研修のリサーチについて，**高校生同士の議論ではできない問の立て方・質問の仕方**を身に着けることができた。

対話力：
ディベートフォーラムに参加した学生・生徒の発言は，すべて文字として記録が保存され，いつでも読みなおすことができる。ハワイ研修におけるリサーチトピック設定や講演者への質問，死刑制度ディベート時の立論構築などの際，大学生の助言をもとに**検証可能な論点を設定し，講演者に深い質問へと練り直す**ことができた。

リーダーシップ：
メンターは，本校生徒の発言内容を多様な基準で評価した。特に，**問題設定力**に着眼して生徒の発言をレビューしてもらった。多角的な視点で発言内容をとらえ，議論を展開する技術を指導されたことで，他教科のディスカッションにおいても，それぞれの主張を的確にとらえ，論点を整理して合意に向かう議論を展開する力を高めることができた。

成果物： ディベートフォーラムの発言記録　http://igs-community.com/

〈山梨学院大学 iCLA リベラルアーツキャンプ〉

学年： Global Issues 高 1　　**対象人数：** 19 名

研修派遣先： 山梨学院大学国際リベラルアーツ学部（iCLA）

成長目標：

平和観：**核軍縮の複眼的な理解力の育成**
核保有国を含む世界各国や NGO などの代表者となって模擬国連形式の交渉ゲームを行い，現実の国際情勢に即して視野を広げることができる。

対話力：**英語によるコミュニケーション力向上**
レクチャー，生徒同士の討論や意見交換，プレゼン，世界の核情勢に関する交渉ゲームをすべて英語で行い，プレゼンを作成することで，飛躍的に英語によるコミュニケーション力が高まるとともに，自らの英語力に対する自信をつける。

リーダーシップ：**英語による課題解決力の養成**
複雑な課題において，利害や対立関係を踏まえて，合意を形成し，その

場を主導する力を身につけることができる。
立場の異なる者同士が双方の有益となる案を対話によってつくり出す経験を積む。
英語による課題解決能力が大幅な向上を目指す。

成果： **平和観**：
今回の研修プログラムは，核兵器の世界情勢・戦争・平和をテーマに，社会学，日本文化研究，物理学，国際政治学といった様々な分野の専門家によって構築されている。よって，研修参加生徒は，ヒロシマや核軍縮に関する問題を多角的な視点から学び，教養の重要性を感じつつ，個々の知識を有機的に結び付けることができた。こうした経験を経ることで，より広い視野に立って世界の核情勢を踏まえて，SGH の課題研究に取り組んでいくことが期待できる。また，パレスチナ問題やイランの核軍縮にまつわる交渉ゲームにおいて，平和構築に関わる多様な政策オプションを学ぶことで，自らの平和観を見直す機会となった。

対話力：
限られた時間の中で大量の英語情報を整理し，まとめ，発表していく中で，生徒の英語による対話力は大きく向上していった。時間が経過するにつれ，講師の教授陣にもどんどん質問し，疑問点を解決していく姿は頼もしかった。また，生徒同士の会話，交渉も英語で行ったことが，生徒自身の英語による対話力向上を後押しした。

リーダーシップ：
交渉ゲームの時間を通じて，思惑と利益が対立する中でどのように議論していけば合意形成に至るのかを体験的に学んだ。最終的な決議は，各国の利害が一致せず，全会一致での合意には至らなかったが，合意形成に向けて真剣に向き合うことによって，会議をリードする生徒が出てきたことは大きな成果である。今後のＧＩの活動においても，学校全体の SGH 事業においても，リーダーシップを発揮していくことが期待される。

成果物： 生徒の英語課題答案，Global Booklet

<Grobal Leadership Program in Hawaii>

学年： 高 2　　**対象人数：** 23 **名**

研修派遣先： アメリカ・ハワイ

成長目標： **平和観**：
他の国や地域の抱える痛みに共感する
対話力：
ともに問題解決を行うために学び合い，協力する
リーダーシップ：
平和共創への道を探り，実行する

成果： **平和観**：
アリゾナ記念館の訪問を通して，原爆による被害の面だけではなく，アメリカでもたくさんの尊い命が失われたことを再認識し，世界平和への願いを更に強めた。

対話力：
プナホウスクール訪問の際，一方的にプレゼンテーションをするのではなく，戦争の恐ろしさや平和の大切さについて意見交換をすることができた。

リーダーシップ：
サダコプロジェクトやプナホウスクールでのプレゼンテーションを実施するにあたり，出発前の準備から，当日の実施に至るまで，生徒が主体的に

行動することができた。

成果物： Global Booklet，リサーチペーパー

（ｃ） 各学年の総合的な学習の時間

学年： 中学１年　　**対象人数：** 205 **名**

課題研究テーマ： ヒロシマ，広島女学院の被爆

成長目標：

平和観：

ヒロシマ，広島女学院の被爆実態を知る

対話力：

論理的な言葉へのめざめ

リーダーシップ：

主体性のめざめ

成果：

平和観：

原爆の威力や被害状況を客観的に知識として知るだけなく，被爆手記や被爆者や家族の思いを通して，原爆の悲惨さとは何なのかということを語ることができるようになった。また広島平和記念資料館や戦争遺構の調査やレポート作成では，自らで課題を設定して解決することを通して，主体的に被爆や戦争の実態に迫り，自らの平和観を形成することができた。

対話力：

原爆について知ったこと，被爆者の思いなどをグループやクラスでシェアすることを通じて，自分の言葉で伝える態度や他者の意見や知識を積極的に聞こうとする姿勢が身についた。また，自分たちの考えたことや知ったことを友人や広島以外の人にわかりやすく伝えるための方法を考え（論理性や表現方法），実践することができた。

リーダーシップ：

直接の被爆体験を聞くことができる最後の世代として，ヒロシマの被爆体験の継承者としての自覚に目覚め，ヒロシマについて積極的に学んでいきたいという姿勢が身についた。また，高校生の活動を知ることを通じて，中学生である自分が何ができるかを主体的に考え，またこれから実践していくためにはどうすればよいかを積極的に考えている。また，グループ活動を通して，それぞれの得意分野を生かして，協力してより良いものを作り出す方法を学ぶことができた。

成果物： 平和公園内の碑のレポート

学年： 中２　　**対象人数：** 204 **名**

課題研究テーマ： 世界の多様な原爆観（アメリカ・東アジアを中心として）

成長目標：

平和観：

世界（地理的・世代間的に離れた人同士）の原爆に対する考え方の違いを知る。

対話力：

論理的に聞く，読む。自分が得た情報を要約して相手に伝える。

リーダーシップ：

グループワークの中で，それぞれがそれぞれの役割を持つ。

成果：

平和観：

時代の違い，おかれた立場の違いにより，何を「正義」とするかのズレが生じるということを抑えた上で，違いを乗り越えて世界平和を築き上げるためには相手と対話する力が必要であることを生徒は理解した。一方的に原

爆被害を訴えるのではなく，多角的な視点を持って，核兵器廃絶に向けて考える広い視野を持たせることができた。

対話力：

平和領域，人権領域の両領域において，資料読解，映像視聴から得た考えや知識の共有を，ペアワーク，グループワーク，ジグソー学習などで行った。そのことにより，自らが理解したことを他者へ発信する力を養う素地ができたといえる。

さらに生徒間のコミュニケーションのみならず，夏休みに戦争体験の聞き取りを行うことによって，年齢層の違う人たちとの対話も行えた。

リーダーシップ：

グループ学習をする中で，自然と話し合いをリードする生徒が出てくるようになった。まだまだ個人により程度の差はあるものの，集団をまとめようとする意識を持つ生徒が少しずつ育ってきている。

成果物：

学年： 中３ **対象人数：** 204 **名**

課題研究テーマ： 平和構築領域
「核廃絶すべきか」

成長目標：

平和観：
対立構造から世界をみる

対話力：
論理的に書く，伝える

リーダーシップ：
意見を戦わせ，争点を明らかにする

成果：

平和観：

長崎研修旅行を通じて，ヒロシマについて相対化することができ，平和観を深化した。また卒業論文の作成を通して，核兵器廃絶の是非について具体的に考察することが出来た。

卒業論文は平和構築分野に限らず，多文化共生・人権領域の集大成なったので，様々な観点から「平和な状態／平和ではない状態」について課題設定を行うことが出来た。

対話力：

年間を通じて PS の授業では，ペアワークやディスカッション，プレゼンテーションの言語活動を取り入れ，他者との議論の中で自分の意見を構築した。加えて論文作成においても論理的な発信力を向上させるなど，他者に理解してもらう，他者を納得させる情報発信の在り方を学んだ。

リーダーシップ：

PS を通じて関心・意欲が高まり，校外の多様な人々とともに平和について考えたいという姿勢が表れた。東京都羽村・青梅市主催のピースメッセンジャー事業では 15 名が参加した。作成したプレゼン資料は羽村・青梅両市の平和教材の参考にしたいということで，データを提供した。またミャンマー研修では７名の定員に 21 名の応募，Global Issues の見学会には 61 名，同説明会には 43 名，エンパワーメントプログラムには 10 名参加，マウントユニオン大学研修には８名が応募し５名が選考された。以上のように，主体的に新たな世界に関わり，リーダーとしての資質を高めようとする生徒は多数にのぼる。選考を経て得た海外経験を他生徒に伝えることで，学年全体の意識向上に繋がっていくことは，5 月に実施した韓国研修の研修成果発表を見ても明らかであり，発表者自身もその後学年で中心的な役割を果たすことが多くなった。

成果物：　卒業論文・長崎研修レポート・国連協会作文応募作品

学年：　高１　　**対象人数：**　238　名

課題研究テーマ：

成長目標：　**平和観**：
バックボーンの異なる他者との平和構築
対話力：
他者と学び会い，価値観を共有する
リーダーシップ：
説得力のあるプレゼンテーションによって共感を広げる

成果：　**平和観**：
第 2 次世界大戦における日本の加害と被害特に原爆の被害については，これまで発信の機会を持ってきた生徒達が，内戦というこれまで知らなかった戦いを知った。加害者と被害者が国内に存在し，国の復興もともに行っていかなくてはならないという困難に衝撃を受けた。しかし少年兵としての体験を持って今を生きておられるリー・サルーンさん，カンボジア支援に精力を傾けておられる米倉雪子先生との出会いは，自らの生きる姿勢や目指すべき世界像について，生徒達に大きなヒントを与えるものだった。

対話力：
「カンボジアについて知る１」の大虐殺や内戦について学ぶ過程で，生徒同士が互いの考えを交換して理解を深め，そこで持った疑問を講演者に質問し答えてもらうことで，いっそうの理解につなげられた。また，「カンボジアについて知る２」のグループ発表を通して，クラスのみんなにわかってもらうための内容や方法について議論をかさねてまとめることができた。

リーダーシップ：
カンボジアについてのグループ発表で，それぞれに与えられたテーマについて正しく理解して内容に責任をもって伝えることができた。
平和共創プレゼンテーションにおいて，課題設定から結論まで，説得力あるプレゼンを作るべく努力した。

成果物：
・「カンボジアについて知る１」ワークシート
・「カンボジアについて知る２」ワークシート
・「平和共創ポスター」

学年：　高２　　**対象人数：**　186　名

課題研究テーマ：　沖縄　政策提言

成長目標：　**平和観**：
社会に平和を提案する
対話力：
新たな価値観の創造，提案
リーダーシップ：
実社会の問題に自分が責任をもっていると自覚する

成果：　**平和観**：
これまでは，核兵器の廃絶に向けた平和構築について，主に「ヒロシマ」の視点から考えてきた生徒たちが，「オキナワ」を学ぶことによって，より広い視野から平和について考えることができるようになったことは大きな成果である。今年度は，沖縄学習を６つのコースに分け，沖縄戦や沖縄の実情に近づくことを目的に，研修プログラムを大きく変更した。沖縄戦の実相に触れたり，基地問題といった現在の沖縄の問題に関する生の声を聴いたり

したことで，メディアを通じて流れる情報では見えてこない「真実」に触れ，生徒の平和観を広げ，深化させたことは間違いない。特に，沖縄の基地と「共存」を図りながら，新たな形での平和構築を進めていこうとしている同世代とのディスカッションは，生徒たちの刺激となり，より多角的に沖縄を見つめる視座の獲得に寄与している。

対話力：

今年度もジグソー法を採用し，アクティブラーニング型の授業によって沖縄に関する学習を進めた。それぞれが担当する内容をまとめたり，グループでシェアしたりする活動によって，要点を読み取る力や分かりやすく他者に伝える力が培われた。また，沖縄が抱えるシビアな問題に対する素朴な疑問を，現地の高校生やスタッフ，語り部の人たちに投げかけ，生の声を聴くことによって，対話を通じて自らの考えを整理していく重要性にも気づいていった。

リーダーシップ：

沖縄の学習を通じて，ヒロシマのみならず，日本，さらにはグローバル社会が抱える問題を自らの課題そして捉え，「自分たちにできること」からはじめようとする生徒が増えてきた。これは本校が SGH 事業で目指す「世界で平和を創出するリーダー」として不可欠な要素であり，グローバル社会で生きていくための土台となっていく力である。こうした力を沖縄学習によって生徒たちが身につけたことは，この高 2 のプログラムの意義である。

成果物： ・各時間のレポート　・グループごとの学習まとめ資料

学年：　高校 3 年生　　**対象人数**：　215　**名**

課題研究テーマ：　核兵器を廃絶すべきか

成長目標：

平和観：

核の惨禍のない世界を創出するために，自らの決意を表明する

対話力：

異なる立場における合意を形成する力を培う

リーダーシップ：

核の惨禍をなくすための提言を，世界に発信する

成果：

平和観：

核兵器保有国や開発国，核廃絶の立場を取る国々が，その国固有の政治的立場を踏まえ，何を国益としているかを学んだことは，いい意味でも悪い意味でも「ヒロシマ」に縛られている生徒の平和観を根底から見つめ直す機会となった。また，一方的な核軍縮ではなく，世界の実情を踏まえた上で，どのように「核のない世界を創出するか」という難しいテーマにも真摯に向き合う姿勢を身につけることができた。

対話力：

教師は生徒間の交渉に関わることを避け，ファシリテーター役に徹することで，生徒が主体となるアクティブラーニング型の探求につなげることができた。生徒は，自らの考えを発信する力と，他者立場を尊重し，どのように同合意を形成するかという，**グローバル社会で最も必要な対話力**を身につけることができた。

リーダーシップ：

今回の交渉ゲームにおいては，他国の利益や立場に一定の理解を示しつつも自国の主張を受け入れてもらえるよう，巧みに交渉を進める必要がある。PS の各回において，生徒は高いモチベーションを維持しながら，積極的かつ活発に交渉を行っていた。また，ジグソー法によるグループ学習

においても，自らが担当するパートの内容を分かりやすく伝えようと努めていた。グローバル化か進む中では，様々な立場から相互理解を生み出すた必要がある。この PS を通じて，建設的なコミュニケーションの場をどうやって創出していくかという，**リーダーに不可欠な力を培う**ことができた。

成果物： 卒業論文・卒業論文英語サマリー

（d） 生徒の海外研修

2017 年度の活動報告

昨年度の報告書提出時点では，帰国していなかった研修について，本年度報告書で説明する。

〈カンボジア研修〉

学年： 高 1 **対象人数：** 10 **名**

研修派遣先： カンボジア

成長目標： **平和観**：
他の国や地域の抱える痛みに共感する
対話力：
ともに問題解決を行うために学び合い，協力する
リーダーシップ：
平和共創への道を探り，実行する

成果： **平和観**：
一つ目に，平和への見方が広くなった。研修が始まる前は，核兵器を中心とした学習を Peace Studies 等で行っていたために，兵器による被害＝戦争の被害と一面的にとらえていたが，現地での交流・視察で内戦での被害・地雷での被害のようすを知ることで，戦争がつくりだす悲惨さを多角的な面から捉えることができるようになった。
二つ目，教育が人間や社会の豊かさに大きく影響することに気づいた。教育によって豊かさに直結するのではない，ということに気づいたという点である。収入や教育の格差が各個人の生き方に与える影響を考えられるようになり，単に戦争がないことだけが平和な状態ではないことを認識した。一方で物資が少なくとも幸せに生活している様子も目の当たりにし，先進国で形作られている自分たち「物差し」を再考することも出来た。
対話力：
日本やカンボジアの様々な世代と交流することを通して，聴く力・伝える力を向上させることが出来た。特に英語力については，研修参加者全員が積極的に表現する姿勢や英語の技能・モチベーションが向上し，さらに力を伸ばしたい研修後のアンケートに記入している。現地ではカンボジア訛りの英語に躊躇することもあったが，英語の多様性を知るきっかけとなった。
リーダーシップ：
現地での発表・交流や視察を通して，「教育」「職業」「経済・生活」には強い関連があり，それが「平和」につながるという共通認識をカンボジアの若者とともに築き上げることが出来た。またその上で，経営難であった在プノンペンの教育施設「ひろしまハウス」に対して，支援金と子どもたちが必要なノートを校内で集めて送る活動を成功させることができた。

成果物： 生徒による課題研究のまとめ，Global Booklet への寄稿，成果報告の発表プレゼンテーション，ひろしまハウスへの支援活動に関する感謝状

〈アメリカ研修〉

学年： 中３ 高 １ **対象人数：** 10 **名**

課題研究テーマ： The University of Mount Union Study Trip

成長目標： **平和観**：

The students took part in the Peace class and delivered peace messages to students in America. Students could view a different part of the world by visiting America.

対話力：

Students made presentations in English, took part in homestays and communicated in English for 12 days.

リーダーシップ：

Students had to talk and meet students on campus. They made presentations about Hiroshima to American students which took leadership and courage.

成果： **平和観**：

Preparing for the presentations and their trip to America allowed the students to think about their city Hiroshima and what it means to people in America. The students had the opportunity to speak and interact with university students and people at the Kiwanis Club.

対話力：

As students had to speak in English all the time, they definitely improved their communication skills. They also were able to successfully give their presentation to a variety of groups in varied settings.

リーダーシップ：

Traveling overseas to America and making a presentation about what that country did to your hometown is no small feat. These students did it very successfully. Students were also able to communicate about Hiroshima and how important it is to abolish nuclear weapons

成果物：

2018 年度の活動報告

「韓国研修」「カンボジア研修」については，現在実施中であるため，現在判明している範囲で記載してある。

〈韓国研修〉

学年： 中２・高１ **対象人数：** 16 **名**

研修派遣先： 韓国・ソウル(建国大学，建国大学附属高校)

成長目標： **平和観**：

他の国や地域の抱える痛みに共感する

対話力：

ともに問題解決を行うために学び合い，協力する

リーダーシップ：

平和共創への道を探り，実行する

成果： **平和観**：

現地研修では，韓国の同年代の学生とディスカッションすることで互いの考え方の違いや共通点を認識することができた。

対話力：

論理的に考え議論する力を向上させ，国籍や文化の違いを乗り越えること

ができた。積極的に議論に参加する韓国の生徒と接することで，生徒自身が自分の課題に気づくことができた。

リーダーシップ：
現地研修を通して偏見をもつこと，一方の情報を鵜呑みにすることの危険性を認識し友好な関係を築くことができた。

成果物：

〈カンボジア研修〉

学年： 高1　　**対象人数：** 10　**名**

研修派遣先： カンボジア

成長目標：
平和観：
他の国や地域の抱える痛みに共感する
対話力：
ともに問題解決を行うために学び合い，協力する
リーダーシップ：
平和共創への道を探り，実行する

成果：
平和観：
現地での交流・視察で内戦での被害・地雷での被害のようすを知ることで，戦争がつくりだす悲惨さを多角的な面から捉えることができるようになった。また教育が人間や社会の豊かさに大きく影響することに気づいた。
対話力：
日本やカンボジアの様々な世代と交流することを通して，聴く力・伝える力を向上させることが出来た。
リーダーシップ：
現地での発表・交流や視察を通して，「教育」「職業」「経済・生活」には強い関連があり，それが「平和」につながるという共通認識をカンボジアの若者とともに築き上げることが出来た。

成果物：

〈オーストラリア研修〉

学年： 中3　　**対象人数：** 16　**名**

研修派遣先： オーストラリア（メルボルン）

成長目標：
平和観：
日本とは異なる平和観・原爆観と出会い，世界観を広げる。
対話力：
英語によるヒロシマのプレゼンテーション・意見交換を通じて，英語での自己発信力・対話力を高める。
リーダーシップ：
現地でのプロジェクトの成功のためにチームで協力し合う。

成果：
平和観：
今日まで続く原爆による被害や差別などについて学んだことを整理し，何を伝えるべきなのかを議論した上でプレゼンテーションを作成した。また現地では，平和観についてホストファミリーと自主的に議論する姿が見られ，今後の学習や平和活動に対する意識が向上した様子がよみとれた。
対話力：
生徒は現地の人々との英語での交流を通じて，文化や言葉の異なる相手とも，相互に学び合いたい，気持ちを通わせたい，という欲求やチャレンジ精

神が「対話」には非常に大切であるということを痛感した様子であった。

リーダーシップ：

現地校では４名ずつの小グループでの挨拶や授業交流の機会を多く設けていたが，生徒たちはこれらの活動において臨機応変に動くなど，集団の意見を取りまとめ，積極的に行動する姿勢が随所に見られた。またこの研修の参加者は，研修後にも学校主催の様々な行事に参加する割合が高く，本研修が契機となり，目を外に向けて活動の幅を広げている。研修後は全校生徒参加のアセンブリーを通して，後輩への意識付けの一役を担った。

成果物： 現地での Peace Presentation（パワーポイント），アセンブリー資料（パワーポイント），ポスター，Journal

〈ミャンマー研修〉

学年： 中３・高１ **対象人数：** 12 **名**

研修派遣先： ミャンマー

成長目標：

平和観：

民主化の進むミャンマーの高校生と平和構築について議論し，様々な視点から考えることにより，自らの平和観・原爆観を培う。

対話力：

英語によるプレゼンテーションや議論，ホームステイを通じて，英語での自己発信力・対話力を高める。

リーダーシップ：

異なる学年や現地の生徒との協同活動を通し，異質な集団の中で必要なコミュニケーション力を高める。

成果：

平和観：

ISM ではヒロシマでの平和学習について発信すると共に，それをもとに議論する中で，多角的な平和観に触れることができた。またヤンゴン市内や農村地区の小学校訪問では，経済的な格差の大きさを目の当りにし，それを生み出す教育格差を埋めることが解決の契機になることを学んだ。また発展途上国での「平和」の在り方を考える中で，戦争のない状況だけではない広義の平和観を構築できた。

対話力：

ISM や小学校は勿論，ホームステイでも使用言語は英語であるため，能動的に英語をツールとしてコミュニケーションする姿勢を身に付けた。また異なる平和観を持つ生徒たちとの交流の中で，その溝を埋めるために対話し続ける姿勢の必要性を学んだ。

リーダーシップ：

事前学習としてミャンマーの歴史や文化のリサーチ，プレゼンテーション作成を異なる学年で協働して実施。現地でも英語を使って協働的に学習・交流を行った。事後学習でもアセンブリーや学年での研修報告発表を通して自身の学びを学校全体に伝播させていく役割を果たした。またミャンマーを訪れることで新たな課題を発見し，次の行動に移すことが出来た。

成果物： 事前学習・現地プレゼンテーション，事後レポート，GlobalBooklet

（ｅ） 海外からの受け入れ

〈Peace Forum〉

学年： 高校生　　**対象人数：** 本校 45　名　他校 70(うち海外 4)

研修派遣先： 本校

成長目標： **平和観**：

If nuclear weapons exist there is always a danger of something happening. The Ban Treaty is attempting to eliminate these weapons. Students will think about what could make the NPT more effective.

対話力：

Students will give presentations in both English and Japanese about this challenging topic.

リーダーシップ：

The students will be arranged into smaller groups and it would be necessary for each room to have group leaders take control.

成果： **平和観**：

The students researched, presented and delivered very interesting ideas on how to include more countries in the Ban Treaty. Through this research students were able to understand that the most important treaty limiting the proliferation of nuclear weapons. The new ideas they gave were very interesting. Students also learned that although the treaty is limited it is very important.

対話力：

Presentations and discussions were mainly carried out in English. This topic is difficult in any language, to discuss it in a second language is very impressive. However, in order for the world to be nuclear free it is necessary to be able to converse in both your own language and in English.

リーダーシップ：

This challenging topic required students to think and tackle a very difficult topic. A topic, in fact, world leaders have yet to solve. The students were able to give opinions and lead group discussions. The groups needed to come to a consensus and produce a final report to present to the rest of the audience.

成果物： Global Booklet

〈その他海外からの受け入れ〉

学年： 全校生徒　　**対象人数：** 本校 102 名　留学生など 118 名

研修派遣先： 本校

成長目標： **平和観**：

・平和公園にある慰霊碑をリサーチし，その意義を再考する。
・日常的な対話のなかで平和について共に考える。
・様々な国からの留学生から異なる角度からの平和観を学ぶ。

対話力：

・英語でコミュニケーションを取ったり，プレゼンテーションをしたりする中で，対話力を培う。

リーダーシップ：

・平和公園内の案内を通じて，外国人生徒をうまくリードする。
・外国人生徒や留学生の研修をサポートする。
・本校における平和学主の内容を紹介したり，ヒロシマの原爆の実相を伝えたりするなかで，ディスカッションをリードする。

成果： **平和観**：

文化的背景や価値観が異なるなかで，それを乗り越え，日常生活レベルでともに平和を築くことの意義や重要性を確認できた。平和観や原爆に対する考え方の違う生徒や留学生との対話や碑めぐり案内を通じて，核兵器が絶対悪であるという価値観を共有することができた。

対話力：

英語を用いながらも，日本語履修生徒のために適宜，外国語として日本語を教えるなど，両言語で対話を成立させる努力を惜しまなかった。また英語しかコミュニケーションの手段がない中で，何とかコミュニケーションを取ろうと努力し，対話の場を構築することができた。

リーダーシップ：

交流会や碑めぐり案内をリードし，話のきっかけや情報を提供していた。ホームステイを受け入れた生徒は，日本文化を紹介したり日本語を教えたりして，学校でも家庭でも留学生をリードしていた。

成果物： 特になし

（ｆ） 生徒の国内研修

〈東京大学アーカイブ研修〉

学年： 高校１年，２年 **対象人数：** 10 **名**

研修派遣先： 東京大学大学院　渡邉研究室（本郷キャンパス）

成長目標：

平和観：

自分とは異なった平和観に触れ，平和を共創する方法を模索し，平和を発信する姿勢を身につける

対話力：

自分たちよりも高いスキルを備えた人や，出身地や年代の異なる人と一緒に活動していくうえで，相手の意見の理解に努め，自らの意見も発信していく。

リーダーシップ：

広島に戻ったとき，研修で学んだことを広く他の生徒に伝えると同時に，自らが率先してヒロシマ・アーカイブの改善をすすめていく。

成果：

平和観：

研修における中国の抗日戦争を題材とした映画を視聴し，中国国民の反日感情について学んだ。そして，その怒りの根底にあるものについて考察し，一般市民が巻き込まれていること，戦争の悲惨さであると考えた。それらは，原爆投下に対するものと共通する点に着目。これこそ，世界に平和を訴える際に重要な点であることを学んだ。

対話力：

留学生や大学院生とともに活動したり，渡邉先生のレクチャーを受けたりする際に，分からないことをそのままにしてしまうと，結局は更にわからないことが増えていく。わからないことは，その時点でわからないと質問することの重要性を学ぶと同時に，自分たちも普段，碑めぐり案内などをするときに他校の生徒に同様な状況をつくっているのではないか，相手の理解を確認したうえで対話を進めることの重要性を自覚することができた。

リーダーシップ：

広島に戻ると，ただちに自ら率先して今回参加できなかった生徒に iMovie を利用した映像制作についてレクチャーしたり，Applo について説明したりするうえで，委員会内で具体的な活用方法について検討するなど，平和な社会をつくりだす主体としての活動する姿勢が養われた。

成果物： 生徒感想文など

〈沖縄リーダー研修〉

学年： 高２　　**対象人数：** １２　名

研修派遣先： 沖縄修学旅行事前研修

成長目標：

平和観：

同世代や現地スタッフから沖縄戦について説明を受けることで，今までとは異なる角度から平和について考える。

沖縄の基地問題に対するさまざまな意見に触れることで，自身の平和に対する考え方を相対化する。

基地と共存せざるを得ない状況下での人々の日常に触れることで「平和共存」の難しさと可能性を考える。

対話力：

同世代の生徒たちや現地のスタッフと沖縄戦や基地問題についてディスカッションを行う中で，現地の人の「生の声」に触れると同時に，今後の平和構築の在り方について意見交換を行う。

リーダーシップ：

担当するコースの現地スタッフとよりよい研修を構築するための企画運営を考え，実施する。

研修内容を学年全体にシェアし，研修の意義を広める。

成果：

平和観：

これまで書籍やインターネット，ビデオ教材などを通して形成してきた沖縄の基地に関する自身の見解を，現地の人々の意見に触れることで相対化することができた。また，沖縄戦や基地問題に関する意見にも触れ，平和について自らの視野を広げることができた。

対話力：

同世代の高校生や現地スタッフといった多様な人々との出会い，意思疎通をはかる際に必要な傾聴力に加え，研修を企画していくための交渉力，自らの考えを相手に伝えるための論理的思考力を育むことができた。

リーダーシップ：

研修内容を自らが企画していく中で，主体的に研修に取り組むことができた。また，各コースの研修リーダーとして，高２学年全体の事前研修の内容を組み立て，司会進行を行った。

成果物： 4 月に各研修グループによる成果報告会を行う予定。

〈カンボジア合同研修発表会〉

学年： 高 2　　**対象人数：** 7　名

研修派遣先： 平成 30 年度 SGH 等合同カンボジア研修会

成長目標： **平和観**：
カンボジアの抱える様々な問題について多面的な視点から考察する
対話力：
多様な考えをもつ高校生がカンボジアの発展という 1 つの共通の目標に向かって合意形成する
リーダーシップ：
社会問題の解決に寄与する人材に求められる資質について考察する

成果： **平和観**：
異なるテーマでカンボジアを訪問した生徒が多様な観点で議論することで，カンボジアの抱える問題について多面的に見ることができた
対話力：
内戦の記憶の継承や経済発展，教育の問題など諸課題について，相互の関連を考えながら解決策について考察することができた。
リーダーシップ：
単なる物質的な支援にとどまらず，教育や経済的自立といった観点からアプローチすることの重要性を，専門家による講演や高校生同士の議論を通じて学ぶことができた。

成果物： 研修の概要を説明したスライド，グループディスカッションの成果をまとめたスライド　等

（g） 生徒による主体的な活動

〈核廃絶署名活動・ヒロシマ・アーカイブ制作活動〉

学年： 全学年　　**対象人数：**　名

研修派遣先： 核廃絶署名活動（原爆ドーム前・元安橋・本通りパルコ前・その他）

成長目標： **平和観**：
被爆の実相・被爆者の願い・社会情勢・国際関係をふまえて核兵器について考える
対話力：
核の惨禍のない世界をめざすというメッセージを伝える
リーダーシップ：
理解と協力を得て，署名してもらう

成果： **平和観**：
生徒は普段，原爆による被害を受け，核兵器の廃絶を願う学校の中で，活動している。街頭では，様々な人たちとである。活動を応援してくれ，署名をしてくれる人もいれば，原爆投下や核兵器の存在を肯定する人々とも出会うこともある。さまざまな意見に触れることにより，自らの平和観を確固たるものにすることができると同時に，多くの人に自分たちの思いに対して賛同してほしいと強く願うようになった。
対話力：
署名活動を行っていると自らの活動に賛同する者，批判する者に出会うが，一番多いのが無関心な者たちである。その者たちに，核のない世界を目指すため，様々な形でメッセージを届けようと日々，試行錯誤している。今年は白黒写真のカラー化に力を入れて取り組んだ。写真をカラー化することで，原爆投下は遠い過去ではなく身近なことである実感をもってもらい，

同時に原爆の惨禍ではなく，被爆前の日常生活のカラー化をすることにより，日常生活が突然奪われたことを強調。原爆投下について多くの関心を持ってもらい，メッセージ発信の糸口がつかめた。

リーダーシップ：

核の惨禍のない世界を目指すため，率先して活動するリーダーとしての意識を常に持っている。国内の 3 校と合同で始めた活動ではあるが，本校が実質上の事務局となり，趣意書の作成や発送，署名活動のための組織会など多岐にわたって活動している。その中で，それぞれの活動には，それに付随するさまざまな準備が必要であることを学び，それらの準備を整えたうえで，活動が成立することを学んだ。そして，様々な活動をとおして多くの署名を集めることができた。

成果物： 平和学習ワークブック，今年度の署名約 30,000 筆（1 月現在），生徒の感想文

＜平和公園　原爆慰霊碑　案内＞

学年： 高校生１年・２年　**対象人数：** のべ　272　名

研修派遣先： 平和公園

成長目標：

平和観：

課題研究や課外活動を通じて獲得した学びの成果を確認する

対話力：

学びの成果を言語化して聞き手に伝える

リーダーシップ：

自分が平和に貢献するグローバルリーダーになるという自覚を持つ

成果：

平和観：

他県や外国から広島に訪れた生徒に対して，平和公園内の碑を案内する活動を通じて，改めて広島の原爆被害を振り返る契機となった。その結果，これまで知らなかったことに気づくことができ，学びのモチベーションを高めることができた。

対話力：

自分たちにとっては自明なことを他者に伝える活動において，どうすればよりよく理解してもらえるか試行錯誤を繰り返す中で，対話力の成長が促された。

リーダーシップ：

原爆についてあまり知らない人々に対して，平和公園内を案内することで，核のない平和な社会をつくりだす主体としての自覚を深めることができた。

成果物： 生徒作成碑めぐり案内原稿，生徒感想文など

〈模擬国連大会〉

学年： 高２　**対象人数：** 6＋2＋6　名

模擬国連活動

研修派遣先： 大阪模擬国連，第 11 回 全日本高校模擬国連大会（全国 決勝大会，国連大学），玉川大学模擬国連

成長目標：

平和観：

グローバル規模の平和構築に向けた視座を獲得する。

対話力：

現状の国際関係を踏まえ，平和構築を目標に，対立する国々とも合

意に向けた交渉を行うことができる。
グローバル規模の諸問題について英語による議論を行う力を養う。

リーダーシップ：
全国の代表とも利害や対立関係を踏まえて積極的な交渉を行い，合意を形成する力を身につける。
グローバルリーダーのモデルとして校内におけるリーダーとして活躍する。

成果： **平和観**：
世界が抱える問題として，実際に国連が取り組んでいるテーマについて，全国の代表と議論し，多角的な視点から世界の平和構築の在り方について考えることができた。

対話力：
国連資料（英語）から担当国の情報を集め，ポジション・ペーパー（Position Paper）や決議案（Draft Resolution），修正案（Amendment）作成に加え，大会におけるスピーチと，参加生徒はよく努力した。利害の対立する国々とも粘り強く交渉を行い，全会一致を目指して積極的に動いていた。決議案や修正案を英語で作成する作業を通じて，グローバル規模の諸問題について英語で表現する力を培うことができた。

リーダーシップ：
国々の思惑と利害が対立する場面においても，粘り強く交渉を続けることができた。利害対立国との交渉に挑み，一定の成果を残して投票にこぎつけることができた。

成果物： 予選通過課題　グローバルブックレット
決勝大会 決議案（Draft Resolution）修正案（Amendment）など

（３） 学校の変化

（ａ） 指導体制と教員の変容

本校の SGH プログラムは，指定初年度より立ち上げた**「グローバル教育推進部」**が中心となって行ってきたが，内部の組織変革にとどまらず，教員全体の意識を大きく変化させてきた。一昨年度からは，「教育構想検討委員会」を立ち上げ，SGH 指定後もグローバル教育とリーダー育成プログラムを加速させるカリキュラムの検討を開始し，来年度からは本校独自の教育プログラムを実施することになっている。

この 5 年間の中で，本校組織改革が順調に進み，「教員と生徒で成長目標を共有する」という SGH 構想目標を実現できたのは，教員意識の変化に起因している。

昨年度に引き続き，SGH 指定を受けて，教職員の意識がどのように変化したかを図るため，独自のアンケートを実施した。その結果は以下の通りである。

① 今年度のＳＧＨ諸活動（Peace Studies・国内外研修・課外活動・グローバルリーダー育成クラス（ＧＩ）など全てを含む）に関して，どのように思っていますか。

アンケート回答項目：（1.強くそう思う　2.そう思う　3.あまり思わない　4.全く思わない）　％

今年度（平成 30 年度）の教員アンケート結果

回答番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
1	45.7	23.5	24.2	31.4	20.0	25.7	41.2	32.4	26.5	32.4
2	51.4	64.7	72.7	42.9	60.0	51.4	47.1	52.9	58.8	44.1

3	2.9	11.8	3.0	25.7	20.0	22.9	11.8	14.7	11.8	20.6
4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	2.9

＜参考資料＞平成 29 年度の教員アンケート結果

回答番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
1	29.8	31.9	29.8	31.9	17.0	29.8	21.3	23.4	25.5	19.1
2	68.1	63.8	61.7	55.3	76.6	55.3	70.2	61.7	59.6	59.6
3	2.1	2.1	4.3	8.5	6.4	8.5	6.4	10.6	8.5	14.9
4	0.0	2.1	2.1	4.3	0.0	4.3	0.0	2.1	0.0	2.1

＜参考資料＞平成 28 年度の教員アンケート結果

回答番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
1	51.3	48.6	31.6	41.0	30.8	21.1	42.1	40.5	27.0	19.4
2	46.2	48.6	65.8	48.7	59.0	52.6	50.0	51.4	62.2	52.8
3	2.6	2.7	2.6	7.7	10.3	10.5	7.9	8.1	10.8	25.0
4	0.0	0.0	0.0	2.6	0.0	15.8	0.0	0.0	0.0	2.8

＜参考資料＞平成 27 年度の教員アンケート結果

回答番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
1	35.6	44.4	20.0	37.8	8.9	26.7	31.1	28.9	15.6	15.6
2	60.0	51.1	66.7	44.4	48.9	37.8	55.6	60.0	48.9	33.3
3	4.4	0.0	6.7	17.8	40.0	17.8	11.1	8.9	31.1	44.4
4	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	15.6	0.0	0.0	0.0	4.4

質問項目の内容

Q1　今年度の SGH 諸活動に関して賛成できる。
Q2　昨年度と比べて，今年度の SGH 諸活動の内容は充実している。
Q3　昨年度と比べて，今年度の SGH 諸活動の進め方はスムーズであった。
Q4　今年度の SGH 諸活動は，自分の授業や生徒に対する指導方法，内容に何らかの影響を与えた。
Q5　今年度の SGH 諸活動の計画立案や運営に関して，教員間での連携や協力関係が築かれていた。
Q6　今年度の SGH 諸活動を通じて，大学等との人的ネットワークが広がった。
Q7　今年度の SGH 諸活動を通じて，生徒の様子に変化が見られた。
Q8　今年度，生徒のグローバルな課題に対する興味関心に変化が見られた。
Q9　今年度，生徒の英語への学習意欲に変化が見られた
Q10　今年度，生徒の進路選択に変化が見られた

上記のアンケート結果を見ると，**本校教職員が一丸となって SGH 構想の実現に向け邁進してきた**ことが分かる。Q3「昨年度と比べて，今年度の SGH 諸活動の進め方はスムーズであった」に 1 そう思う.2 ややそう思う と回答した教員の割合は，年を追うごとに高まり，最終年度（平成 30 年度）は 96.9%となっており，教職員の協力体制が確立された中で SGH

プログラムが実施されたことを示している。

また，Q7「今年度の SGH 諸活動を通じて，生徒の様子に変化が見られた」，Q10「今年度，生徒の進路選択に変化が見られた」の 1 そう思う の回答率が飛躍的に伸びている点も見逃せない。（海外大学の進学者数は大きな増加とはなっていないものの）指標として掲げた「国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合」の増加は，こうした教職員が肌で感じた生徒の変化と一致する。以下の表の通り，卒業生の 47.2%が「国際化に重点を置く大学へ進学」しており，SGH 指定前の 1.48 培となった。

指標（アウトプット）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成30年度目標
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合 ※（ ）内は SGU への進学者数	32.0%	-	-	-	51.2% (74)	47.2% (79)	-

また，教職員には SGH の 5 年間を振り返るアンケートを実施した。質問項目と今年度の結果は以下のとおりである。

質問項目の内容

Q1　この５年間で，本校における授業の指導方法や内容に何らかの変化（影響）が見られた。
Q2　この５年間で，本校と大学等との人的なネットワークが広がった。
Q3　この５年間の SGH 諸活動を通じて，生徒の様子に変化が見られた。
Q4　この５年間の SGH 諸活動を通じて，生徒のグローバルな課題に対する興味関心に変化が見られた
Q5　この５年間の SGH 諸活動を通じて，生徒の英語への学習意欲に変化が見られた。
Q6　この５年間の SGH 諸活動を通じて，生徒の進路選択に変化が見られた。

② ＳＧＨ指定以降（この５年間）について，どう思いますか。（平成 30 年度）

アンケート回答項目：（1.強くそう思う　2.そう思う　3.あまり思わない　4.全く思わない）　（%）

回答番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
1	80.0	68.6	68.6	62.9	48.6	57.1
2	17.1	28.6	22.9	31.4	42.9	31.4
3	2.9	2.9	8.6	5.7	8.6	11.4
4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

ここ 5 年間の大きな変化は，どの質問項目においても，1 そう思う の回答率が飛躍的に伸びたことである。**SGH 構想の実現が生徒の可能性を引き出すことを理解し，本校の教職員が日々の教育活動を行ってきたことを明確に示す**結果である。まさに，研究開発名として掲げた**「成長目標の共有を通じた生徒・教員協働による」「グローバル人材育成」を実現**しつつあると言える。

Q2「SGH 諸活動を通じて，大学等との人的ネットワークが広がった。」の質問に対し，1.2 に回答した教職員の合計は 97.2%と高い数値を示している。これは，**SGH 指定の 5 年間で高大連携・接続が年々進み，大学生・大学教と共同で取り組む活動が劇的に増加**した成果である。こうした環境の変化は，教職員の指導内容・指導方法にもいい影響を及ぼしている。97.2%の教職員が，Q1「この５年間で，本校における授業の指導方法や内容に何らかの変化（影響）が見られた」の項目で肯定的回答をしていることからも，**生徒の主体的活動を**

促す教育実践や「主体的・対話的で深い学び」を意識した取り組みを行う教員が増加していることが分かる。

以下，参考値として過去３年間の教職員アンケート結果を示す。

② ＳＧＨ指定以降（この４年間）について，どう思いますか。（平成 29 年度）

アンケート回答項目：（1.強くそう思う　2.そう思う　3.あまり思わない　4.全く思わない）　（%）

回答番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
1	51.1	51.1	36.2	38.3	42.6	31.9
2	44.7	40.4	61.7	59.6	44.7	53.2
3	2.1	8.5	2.1	2.1	6.4	8.5
4	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1

② ＳＧＨ指定以降（この３年間）について，どう思いますか。（平成 28 年度）

アンケート回答項目：（1.強くそう思う　2.そう思う　3.あまり思わない　4.全く思わない）　（%）

回答番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
1	56.4	50.0	65.8	55.3	37.8	27.0
2	43.6	34.2	31.6	44.7	54.1	51.4
3	0.0	10.5	2.6	0.0	8.1	18.9
4	0.0	5.3	0.0	0.0	0.0	2.7

② ＳＧＨ指定以降（この２年間）について，どう思いますか。（平成 26 年度）

アンケート回答項目：（1.強くそう思う　2.そう思う　3.あまり思わない　4.全く思わない）　（%）

回答番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
1	40.0	42.2	37.8	28.9	13.3	17.8
2	51.1	33.3	53.3	62.2	55.6	42.2
3	2.2	11.1	2.2	2.2	22.2	31.1
4	0.0	6.7	0.0	0.0	0.0	2.2

＊合計数値が 100 にならない項目は，無回答者がいたことを示す。

８ 次年度以降の課題及び改善点

（１） 今年度の活動から

（ａ） グローバル規模で成果を挙げた生徒

〈Critical Issues Forum (CIF) in Nagasaki, Japan〉

学年： 高１・２　　**対象人数：** ２　名

研修派遣先： Critical Issues Forum (CIF) Monterey, California, USA

研修内容についての課題・改善点： N/A

実施方法について　N/A
の課題・改善点：
その他：　N/A

〈NPT 再検討会議〉

学年：　高 2・高 3　　**対象人数：**　2　名
研修派遣先：　NPT 再検討会議第二回準備委員会
平和首長会議主催ユースフォーラム（スイス，ジュネーブ）
研修内容について　特になし
の課題・改善点：

実施方法について　生徒にとって貴重な成長機会を与えてくれるプログラムであり，今
の課題・改善点：　後も広島市および平和首長会議と連携し継続して生徒が派遣できるようにしていきたい。
その他：

（b） グローバルリーダー育成プログラム

〈Global Issues Ⅰ（高 1 選抜授業）〉

学年：　高 1　　**対象人数：**　20　名
研修派遣先：
研修内容について　From this year, Prof. Jacobs will no longer be teaching the class. The
の課題・改善点：　students will still be learning in English about nuclear weapons but not by an expert. However, the students will learn in a different environment, one hopefully that is more active and student-centered.
実施方法について　As this will be the first time to teach this class, the teacher may face some
の課題・改善点：　challenges teaching this new subject. How to test students in a way that allows them to express their knowledge is one concern. How the students respond to the all English classes is another concern.
その他：

〈Global Issues Ⅱ（高 2 選抜授業）〉

学年：　高 2　　**対象人数：**　20　名
研修派遣先：　Global Issues Class with Dr. Robert Jacobs of Hiroshima City University
研修内容について　Not only was Professor Jacobs able to draw on his own important
の課題・改善点：　research for his lectures, but he was able to incorporate student suggestions into the material he covered over the course of the year.
実施方法について　This class was an excellent opportunity for students to be exposed
の課題・改善点：　to authentic, relevant English language lectures by an expert in the field.　However, integrating more student-centered activities to review and further explore understanding of the topics of each lecture remains a challenge.
その他：

〈Global Issues Ⅲ（高 3 選抜授業）〉

学年：　高 3　　**対象人数：**　24　名
課題研究テーマ：　国内外の社会課題を主体的に分析するとともに，それに必要な教養を身につける

課題研究についての課題・改善点： 受験勉強との両立が最大の課題であったが，論理的に考え主体的に学び，対話することを楽しむ生徒の前向きさが課題を解決してくれた。

実施方法についての課題・改善点： SGH 指定終了後も継続することが決定している。引き続き生徒の興味・関心に応じて多様な問題を取り上げ，探求していけるようなプログラムを開発していく必要がある。

その他： 特になし

〈ディベートフォーラム GROW〉

学年： GI 高 2　　**対象人数：** 20　名

課題研究テーマ： Global IssuesIIにおける課題研究や 3 月のハワイ研修と関連付けながらウェブ上で議論を行う

課題研究についての課題・改善点： 特になし

実施方法についての課題・改善点： 次年度以降，有料のこのソフトを継続使用することは難しい。ただし，本校卒業生を含む国内外の大学生が，在校生の課題研究を助言するしくみは維持したい。SNS などを活用しより活発に議論できる場を構築する必要がある。

その他： 特になし

〈山梨学院大学 iCLA リベラルアーツキャンプ〉

学年： 高 1 Global Issues　　**対象人数：** 19　名

研修派遣先： 山梨学院大学国際リベラルアーツ学部（iCLA）

研修内容についての課題・改善点： 交渉ゲームの在り方については，昨年度提案したことが改善され，どの生徒も同等に交渉に参加できるようになった。昨年の反省を活かし，昨年以上に資料の読み込み，事前学習を増やしたため，大学教授が大学生以上のパフォーマンスを見せていると激賞していた。

実施方法についての課題・改善点： 特になし

その他： 昨年度の申し送り事項として，以下の２点があった。

高大連携 ― iCLA の高い教育効果を本校に取り込む

１．教科教育の一層のアクティブラーニング型授業の導入

２．テーマを設定し，教科を横断した学習週間の創設

１については，SGH の課題研究だけでなく，ほとんどの教科で実施できている。２は一部の教科で試作的に実践しているが，まだ，学校全体の取り組みには至っていない。来年度は何らかの形で導入したいと考えている。

〈Grobal Leadership Program in Hawaii〉

学年： 高 2　　**対象人数：** 23　名

研修派遣先： アメリカ・ハワイ州

研修内容についての課題・改善点： 今年度の学校訪問はプナホウスクールのみになった。次年度は訪問する学校を増やし，現地の同年代の学生と交流する機会を増やしたい。

実施方法についての課題・改善点： 4 泊 6 日という短い日程の中で，生徒の主体性に任せた活動をする時間を取ることが難しかった。次年度は内容を精査し，自主活動の時間を設けたい。

その他：

（ｃ） 各学年の総合的な学習の時間

学年： 中１ **対象人数：** 205 名

課題研究テーマ： ヒロシマ，広島女学院の被爆実態を知る

課題研究についての課題・改善点： 中 1 全員が碑巡り案内の原稿を書いたが，情報の調べ方のスキルがない分，ネットや本に載っている文章をそのまま原稿にいれている生徒もいた。調べ方やまとめ方のスキルを身につけてから原稿を書くことができればよかった。

実施方法についての課題・改善点： 3 学期には，実際に平和公園に行って碑巡り案内を現地でする予定だったが，スケジュールの関係でどうしても実現できなかった。もう少し時間が取れて，土曜日のスケジュールに余裕があればよかった。

その他： 特になし

学年： 中２ **対象人数：** 204 名

課題研究テーマ： 多様な原爆観

課題研究についての課題・改善点： 3 年前より，実際に海外から広島に来られている方を本校に招聘し，パネルディスカッション形式で，「生の」原爆観をうかがっている。資料学習においても多様な原爆観を学ぶことはできるが，より実感の伴った声を聞くことで，生徒の理解は深まっているといえる。これについては今後もぜひ継続して行うべきであろう。
ただ，パネルディスカッション（今年度はアメリカ，中国，韓国，インドから各１名ずつ）において，パネリストの声がその国の意見の代表であると勘違いしないように，あくまで各国に生まれ育った方の，一意見として聞くという姿勢は守る必要がある。例えば，アメリカで言えば，どの政党や与党を支持しているかによってもかなり意見が変わる可能性がある。もし可能であるならば，一国から複数の意見を持つパネリストを招聘することも考えてよいかもしれない。

実施方法についての課題・改善点： 今年度，１学期にアメリカの原爆観を学び，３学期にアジアの原爆観を学んだ。可能であるなら，１，２学期連続，もしくは２，３学期連続とした方が，学習の流れを断ち切らないのではないかと考える。また，前項でも述べたが，パネルディスカッションにおいては各国一名ということではなく，一国で複数のパネリストを招聘してもいいかもしれない。

その他：

学年： 中３ **対象人数：** 204 名

課題研究テーマ： 平和構築領域：「核廃絶すべきか」

課題研究についての課題・改善点： ここまでの SGH 指定の４年間の蓄積を受けて，コンテンツの開発・改良や PS と諸研修との連関は充実したものとなった。一方で論文執筆のスキルに課題が残った。SGH 指定終了後は「課題研究」を重点化していくので，SGH 事業で明らかになった課題を解決していきたい。

実施方法についての課題・改善点： 時間的な余裕のなさが前年度の課題であったが，ICT 機器の活用によって大幅に改善された。

その他： 特になし

学年： 高 1　　**対象人数：** 238 **名**

課題研究テーマ： カンボジア・ケーススタディ，平和共創プロジェクト

課題研究についての課題・改善点： カンボジア研修が学年末であるために，学年 PS との連携がなめらかにいかない。時間設定が難しいとは思うが，次学年の PS「カンボジアを知る」に，実際を見て感じて考えたことを伝えることで，該当学年にも次学年にもメリットがあるだろう。

実施方法についての課題・改善点： 「カンボジアについて知る」のグループ発表のテーマ設定を，教師がバランスを考えて割り当てたが，これも生徒が自分で見つけて決めるべきだろう。

その他：

学年： 高 2　　**対象人数：** 186 **名**

課題研究テーマ： 沖縄　政策提言

課題研究についての課題・改善点： 沖縄が直面している問題は一筋縄ではいかないものばかりで，高校生が考える政策提言では，実質的な成果を残すことは難しい。しかし，沖縄学習を通じて，生徒個々人は汎用的能力（ジェネリックスキル）の向上が見られる。また，今年度から実施したコース別学習によって，生徒の主体性や課題分析能力は高まってきている。したがって，今後もこの研修を通じて，より生徒の主体性と学びの深化が図れる工夫をしていくことがポイントとなる。

実施方法についての課題・改善点： 生徒達が沖縄の問題に対する政策を提言していくには，より多くの研修時間を確保することが求められる。しかし，物理的な時間の確保には限界があるので，より効果的に PS の学習時間を活用するとともに，沖縄事前研修に参加する生徒が，よりリーダーシップを発揮できる環境を整備していくことが重要である。昨年度を一歩進めて
今年度の事前研修は，生徒主体の研修プログラムを構築することができた点で大きな成果があった。これを土台に，より深化したプログラム内容を再度検討し，よりよい研修となるように練り直していく必要がある。

その他：

学年： 高 3　　**対象人数：** 215 **名**

課題研究テーマ： 核兵器を廃絶すべきか

課題研究についての課題・改善点： 核軍縮の動きがどのように進んでいるかについて，2015 年段階ではあるが，世界の現状をある程度理解することはできた。しかし，現在，世界情勢は刻々と変化している。その現状を踏まえ，平和創出に向けた新たな動きをどのように起こしていくかという具体的なプランを考える時間は十分に確保できなかった。今後，最新の世界情勢を課題研究プログラムにどのように組み込み，内容を深化させていくかが課題である。

実施方法についての課題・改善点： 受験勉強との兼ね合いから，今年度も 1 学期に卒業論文を作成することになった。現状では，生徒の中から“Peace Studies Creators”を募集し，プログラムを進めていくのは難しい。新学習指導要領を踏まえ，交渉ゲームで使用するテキストの内容を抜本的に改訂し，生徒がより主体的に活動できる内容にしていく必要があるだろう。また，次年度からはじまる EP（Extensive Program）の中で，模擬国連形式の交渉ゲームに関係した講座を開講し，生徒が主体的に PS を運営していく土台をつくっていくことも重要である。

その他：　特になし

（d） 生徒の海外研修

2017 年度の活動報告

昨年度の報告書提出時点では帰国していなかった研修について，本年度報告書で説明する。

〈カンボジア研修〉

学年： 高 1　**対象人数：** 10 **名**

研修派遣先： カンボジア

研修内容について の課題・改善点： 昨年度に続いて，カンボジア研修で学んだことの中から一人一つテーマを選び，事前研修・現地研修・事後研修で学んだことを「課題研究レポート」としてまとめ，発表する形をとった。今後も時間をしっかりと確保して，成果を深めていくような機会を設ける必要がある。

実施方法について の課題・改善点： 引率教員が英語でコーディネートするという課題を前年度から引き継いだが，今年度も英語が話せない教員が引率したため，実現できなかった。ただし現地コーディネーターが議論の方法のポイントを示してくれたことにより，議論自体はスムーズに行えたのはよかった。

その他： 特になし

〈アメリカ研修〉

学年： 中 3　高 1　**対象人数：** 10 **名**

課題研究テーマ：

課題研究について の課題・改善点： N/A

実施方法について の課題・改善点： Students will communicate about peace with American students and hopefully discuss what it means to be from Hiroshima. Students will also talk about nuclear disarmament and how important it is for the world.

その他：

2018 年度の活動報告

「韓国研修」「カンボジア研修」については，現在実施中であるため，次年度に向けた課題については省略する

〈オーストラリア研修〉

学年： 中 3　**対象人数：** 16 **名**

研修派遣先： オーストラリア（メルボルン）

研修内容について の課題・改善点： せっかく多様な価値観をもった海外の生徒との交流であるため，平和に関する本格的なディスカッションなど，より発展的なプログラムを取り入れていきたいが，生徒間のコミュニケーション能力にばらつきがある点が課題として挙げられる。

実施方法について の課題・改善点： 特になし

その他： 特になし

〈ミャンマー研修〉

学年： 中３・高１ **対象人数：** 12 **名**

研修派遣先： ミャンマー（ヤンゴン市・農村地区）

研修内容についての課題・改善点：
・前年度の課題で，ISM 生徒とのディスカッションについて，「平和」「国際貢献」「ミャンマーの展望」についてより焦点化することが挙げられた。そのため今年度は，ヒロシマからのアンバサダーという側面を強化し，原爆被害や広島の復興，核兵器の実情について ISM で報告した。ISM の生徒・教員ともに好評で，10 分間の質疑応答時間では足りないくらいに質問が相次いだ。また将来に夢や希望が持てない中高生が日本で増えているので，「将来の夢」について英語で議論した。
・例年，農村部の小学校への支援物資を，日本で集めて持参していた。しかし今年度はミャンマー現地経済に資するために，現地で購入してそれを贈るという方法をとった。事前学習をする中で，支援のあり方は様々あることを学んだ成果である。
・例年，農村部の小学校２校を訪問しているが，交流の質・量をさらに向上するため，１校に絞ることを検討したい。

実施方法についての課題・改善点：
・前年度において，事前学習のスケジューリングが極めて多忙という課題があったが，再構成と焦点化を進めて円滑に進めることが出来た。これをベースに来年度も実施していきたい。

その他： 特になし

（ｅ） 海外からの受け入れ

〈Peace Forum〉

学年： 高校生 **対象人数：** 本校 45 **名** 他校 70（うち海外 4）

研修派遣先： 本校

研修内容についての課題・改善点：
参加者一人ひとりがしっかりと事前準備を行い，担当国についてリサーチを行ったため，当日はどのグループも有意義な議論をすることができた。

実施方法についての課題・改善点：
ディスカッションを進める中で新たにリサーチを必要とすることもあり，会場でネットワークが自由に使えるとさらに内容を深めることができたのではないかと思う。ネットワーク環境，ＩＴ機器の早急な整備が必要である。

その他：

（ｆ） 生徒の国内研修

〈東京大学アーカイブ研修〉

学年： 高校１年・２年 **対象人数：** 10 **名**

研修派遣先： 東京大学大学院 渡邉研究室（本郷キャンパス）

研修内容についての課題・改善点：
渡邊研究室での研修は，アーカイブを活用する上での技術中心の研修であり，そのうえで最新の潮流や技術の紹介となる。場合によっては，昨年に紹介を受けて習得した技術が陳腐なものになっていたり，昨年とは異なる分野の技術紹介と指導を受けるなど，一見すると継続性，連続性が感じられないという生徒も出てくる。そのため，アーカイブを活用のための改善だという主目的をきちんと理解・再確認する必要がある。

実施方法について の課題・改善点： 予算の関係上，東京研修は今年度で最後となる。しかしながら，アーカイブの改善するための技術習得は行わなければならないし，デジタル技術は日進月歩で変化している。また，東京研修は希望する生徒が全員できない上，費用等の面から見送っている生徒もいる。これらを考慮し，今後はスカイプを活用するなどして，低コストで全員が指導を受けられる方法を模索していきたい。

その他：

〈沖縄リーダー研修〉

学年： 高 2　　**対象人数：** 12 名

研修派遣先： 沖縄修学旅行事前研修

研修内容について の課題・改善点： 昨年度実施したことから，今年度は日程を短縮して一泊二日で実施した。そのためスケジュールがタイトであり，一つ一つの訪問先で時間をかけて学習する時間が確保できなかった。

実施方法について の課題・改善点： リーダー育成という観点から，有意義な研修ではあるが，次年度以降は SGH 指定がないため，費用の確保が難しい状況である。二年続けたことにより，ある程度の見通しも立ったことから，実施の可否を検討していきたい。

その他：

〈カンボジア合同研修発表会〉

学年： 高 2　　**対象人数：** 7 名

研修派遣先： 平成 30 年度 SGH 等合同カンボジア研修会

研修内容について の課題・改善点： カンボジアを実際に訪問した全国各地の生徒が集まってカンボジアの抱える問題について多様な価値観・経験をもつ高校生が集まって議論することで，多面的な見方や考え方を身につけることができた。単なる理想論にとどまらず，カンボジアの現実に根差し，実現可能性のあるプランを作成し，将来的にそれを実行できるような人材を育成できるような内容に近づけていく必要がある。

実施方法について の課題・改善点： 今後いかに継続して実施していくかが大きな課題としてあげられる。ICT 機器などを活用する形で成果を報告し合ったり，議論したりといった形も考えなければならない。

その他：

（g） 生徒による主体的な活動

〈核廃絶署名活動・ヒロシマ・アーカイブ制作活動〉

学年： 全学年　　**対象人数：** 名

研修派遣先： 核廃絶署名活動（原爆ドーム前・元安橋・本通りパルコ前・その他）

研修内容について の課題・改善点： 核兵器の廃絶を目指して署名活動を行っているが，広島の原爆被害や署名活動を広げていくという面では十分な成果がでてきているようになっている。一方で，世界情勢など自分たちを取り巻いている現状は十分に認識できていないまま，署名活動を行っている。署名活動における事前・事後の学習を今後は増やしていきたい。

実施方法について の課題・改善点： 核兵器廃絶の声を広げていくためには，活動自体を世界に広げていかなければならない。今，私たちの活動は基本，国内のみにとどまっている。活動を広げていくためには，海外とのつながりが重要である。幸いにも広島に関心をもって訪問する外国人が年々増加している。現在，当委員会では英語の趣意書や署名用紙，ホームページを用意はしているが，その他の言語は対応できていない。活動を広げていく上では，多言語化に対応していく必要がある。

その他：

〈平和公園　原爆慰霊碑　案内〉

学年： 高校生１～２年　　**対象人数：** のべ　**272　名**

研修派遣先： 平和公園

研修内容について の課題・改善点： 被爆 70 年を経過して戦争の記憶が薄れる中，こうした活動の意味がますます高まっていると感じられる。今後も継続して生徒中心のこの活動を続けていきたい。

実施方法について の課題・改善点： 情報化の進展により情報源が多様化する中で，何が真実かを見分ける力が要求されるようになってきている。そうした力の育成も喫緊の課題である。SGH 指定後に始まった，上級生が下級生を指導する体制もほぼ定着し，生徒たちが主体的に取り組むようになってきている。

その他：

〈模擬国連大会〉

学年： 高１・2　　**対象人数：** 6＋2＋6　**名**

研修派遣先：

研修内容について の課題・改善点： 昨年の課題を生かしより多くの生徒に参加を呼び掛けた結果，選抜 GI 生以外からも応募があった。しかし，準備が大会前の一定期間に限られている。本番でより高い成果を挙げるために，次年度からは年間を通じて恒常的に模擬国連活動を行うことに決定した。週に１回ミーティング日をもち，英語で模擬国連活動を実施する。

実施方法について の課題・改善点： 過去の参加者が新たな参加者に成長と課題を継承していくために，学年を超えた模擬国連活動にシフトする。

その他： 特になし

（２） 生徒や学校体制の変化

① 生徒の変容―グローバルリーダーとしての力の育成　定量的な成果・評価

（ａ）グローバルリーダーとしての意識の変容

「平和に貢献するグローバルリーダーの育成」が本校の SGH 課題研究の大きな目標である。したがって，生徒たちがこうしたリーダー像をイメージし，インセンティブを持って自らを高めていく主体性をどう培っていくかが重要である。

SGH 指定１年目から行っている本校独自のアンケートに基づき，以下の 3 点について定量的な分析を行ってきたが，指定最終年度を迎え，成果と課題を以下に記す。

①グローバル社会での諸問題への関心を高めること
②英語力を高めようとする意識を醸成すること
③将来，留学したいと思う生徒や国際的に活躍したいと思う生徒を増やすこと

①グローバル社会での諸問題への関心を高める

生徒に実施したアンケート項目 **問１「以前よりも国際問題に興味をもつようになった」，問４「将来何らかのかたちで，グローバル社会で平和に貢献するリーダーになりたいと思うようになった」**において，1.そう思う 2.ややそう思う に回答する生徒数によって，この 5 年間の成果を判断することができる。

問１をみると，どの学年においても 90%前後の生徒が国際問題に興味関心を抱いており，また，**問４**においても全体の 60%近くが肯定的回答をしていることから，**①グローバル社会での諸問題への関心を高める** という目標は達成したと断言できる。

（詳しくは，**７ 目標の進捗状況，成果，評価　（１） 生徒の変容** を参照されたい。）

特に着目する生徒の変化は，アンケート項目 **問５「私の参加により，変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」**に対する肯定的回答が，全体で 6 割を超えた（60.3%）ことである。昨年度，以下の表を示し，現在の日本社会と本校生徒の意識を比較したが，今年度も全国平均の 2 倍の値となっている。また，その数値は，高学年に行くほど高いことから，本校の SGH プログラムや課題研究を経験することによって，こうした意識が醸成されていると言える。

問５「私の参加により，変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」　（%）

学年	中学	高校	全体	全国
平成 30 年度	57.4	63.6	60.5	30.2
平成 29 年度	54.9	60.8	57.9	

＊「全国」の数値は，2014 年度 内閣府実施調査「特集 今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの～」(5)社会形成・社会参加 による

②英語力を高めようとする意識を醸成する

③将来，留学したいと思う生徒や国際的に活躍したいと思う生徒を増やす

この項目については，**７ 目標の進捗状況，成果，評価 （１） 生徒の変容 ② 対話力の育成** を参照されたい。

② 学校体制・その他

（ａ） 教育体制

・組織改編

SGH 指定を契機にグローバル教育推進部を立ち上げ，6 カ年の課題研究を一元的に統括してきた。**グローバル教育推進部が課題研究のカリキュラム・デザインを行う**ようになったことで，体系的・整合的な教育活動を行うことができ，本校の教育構想名「成長目標の共有」が可能になった。また先述したように，一昨年度から**教育構想検討委員会**を立ち上げ，SGH 指定後の教育ビジョンを策定し，この 5 年間の実践が持続可能となるよう努めてきた。さらに，今年度は，**課題研究検討委員会**を設置し，新学習指導要領が求めている探求的な学習のあり方を検討し，来年度から先行実施する準備を整えた。

⑴ ３つのポリシーとキー・コンピテンシー，およびルーブリックの策定

SGH 指定期間において課題研究プログラムを練りこむ中で，本校の建学の精神に照らし合わせ，3 つのポリシーとコンピテンシー（アドミッションポリシー，カリキュラムポリシー，ディプロマポリシー，キー・コンピテンシー）を定めた。（添付資料：「広島女学院３ポリシー，キー・コンピテンシー」「キー・コンピテンシー　ルーブリック」を参照のこと。）

これは「自己肯定感・自己効力感を向上させるために，主体性・人間理解・グローバルマインドを育てる」ことを大きな目標としている。当然のことながら，この目標は，SGH プログラムの中で実践し，一定の成果を上げているが，本校が更なる進化と深化を進めるために必要不可欠であると判断し，全教職員で何度も会議を重ね練り上げてきたものである。

来年度からは，このポリシーとコンピテンシーを，各学年・各教科・各委員会・学校行事などすべての教育活動に適用し，学校として統一したルーブリック評価を行うべく準備を進めていく予定である。

⑵ 海外研修の位置づけと課題研究のカリキュラム改編

SGH 指定を受け，本校は数多くの海外研修を立ち上げ，生徒のグローバルマインドを培い機会を設け，大きな成果を出してきたと自負している。こうした海外研修を，今後は，現在実施している希望者選抜型の海外研修と中 3 と高 2 全員が参加する国内研修を統合的に発展させた研修へとプログラム変更したいと考えている。長期休暇を活用し，希望する研修を選択できる分散派遣の形をめざしている。

また，研修と課題研究や探求プログラムとの関連性を持たせるために，SGH 構想の中で実施してきた課題研究の内容も練り直しを行っている段階である。

⑶ 課題研究と探求授業に向けた取り組み

来年度から大きく変更となる点は，総合的な学習時間に当たる 1 単位で実施してきた課題研究の時間を 2 単位に増設することに加え，Extensive Program（以下 EP）を新設し，従来の学びの枠を超えて教師と生徒が学び合う時間をつくることである。

課題研究においては，その手法を学ぶ共通のテキストとして，中学生には『課題研究メソッド スタートブック』（啓林館 岡本尚也編著）や『学びの技』（玉川学園出版部，後藤芳文ほか），高校生には『課題研究メソッド』（啓林館 岡本尚也編著）などを導入して，研究の基本的方法から学んでいく予定である。

本校の SGH における研究開発名は「成長目標の共有を通じた生徒・教員協働による高大連携型グローバル人材育成」であるが，この「生徒・教員協働」を更に進化・進化させたのが，EP プログラムである。EP については，来年度の 1 学期には 32 講座を用意し，生徒の興味関心に合わせて自由に選択できる体制を整えた。

EP とは，教科や学年の枠組みを超えて，生徒の興味関心に沿って学び合うという，まさに新学習指導要領で求められる学習を先取りするプログラムである。学期ごとに 50～100 分×5 回程度の講座を教師が自由に設定し，中 3 から高 3 までの生徒が選択する仕組みである。1 講座約 20 名程度の少人数制で，アクティブラーニング型の学習を実践していく予定である。

一例を挙げると以下のとおりである。

担当部署	講座名	内容
理科	こうして世界に核兵器がもたらされた	E= mc2 や核分裂，放射線の意味，核兵器の仕組みと，マンハッタン計画などの初期の核開発について
理科	リケジョを目指して ～自由研究を楽しもう～	自由研究のテーマさがしや，テーマに対する科学的なアプローチの仕方など，本格的に夏休みの自由研究を進められるように理科の教員と一緒に準備します。
英語科	Studying Art　in English	英語で世界の芸術を鑑賞し，表現することを目的とします。芸術鑑賞のための英語表現を学び，意見交換や協働分析作業などを通して芸術を見る目も養います。
国語科	短編小説を掘り下げてみよう	短編小説を読んで感想や意見を交換した後，作品のお薦め文章 200 字を参加者全員で協力して制作する。
英語科	Peace Park Guide in English	平和公園の碑めぐり案内を英語でやろう！　文献読解，原稿作成，英語でのコミュニケーション，ガイド方法など，ほぼ 4 技能を駆使します。
社会科	自由研究～人文・社会科学分野	「もっと調べたい」を極めていきます！海外・国内研修で得たことや，女学院の授業・活動で関心が高まったことなどについてさらに深く調査し，まとめます。
－	運動生理学でスポーツを極める	運動生理学の理論に基づき，人間の体の仕組みや機能を知ることで，効果的なトレーニング方法を考えます。

（b） 一昨年度新設「Global Issues Ⅰ」・昨年度新設「Global Issues Ⅱ」・今年度新設「Global Issues Ⅲ」

SGH 校としてグローバルリーダー育成の充実を図るために，2015 年度高 1 に新科目“Global Issues Ⅰ”（以下 GIⅠとする）を，2016 年度高 2 に GIⅡを設置した。2017 年度は，さらに GIⅡを選択した生徒対象に“GIⅢ”を新たに設置し，より意識の高いグローバルリーダー育成を目指してきた。

現在教育現場で必要とされている高大接続とは，基本的な知識・技能に加えて，生徒の主体性，思考・判断・表現力を総合的に育成し，高校での学びが大学での学びに円滑につ

ながるよう教育体制・内容を刷新していくことである。この GI における教育実践によって，本校における**高大接続のあり方を改善**し，より強固な高大接続関係を構築することができたことは大きな成果と言える。

GI クラスでは，大学における学びのかたちの中心に位置するアクティブラーニング型の授業を通年で実施し，課題研究をより深化していくように努めた。これを，全て英語で実施したことに大きな特徴と成果がある。

グローバルリーダーに不可欠なコンピテンシーやリテラシーを図るために，今年度は河合塾の「学びみらい PASS」を実施し，標準化されたデータに基づいて，生徒の力を評価していった。（項目 8. (2) ①-(b) 参照）

GI 選択生の意識や行動の変容・成長を，アンケートなどから定量的に計測した結果を以下に記す。

GI 選択生徒のアンケート結果の比較

GI 1 期生（平成 27 年度～平成 29 年度）

質問	問１		問２		問３		問４		問５		問７	
平成 27 年度	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI
①②の合計(%)	81.1	93.1	83.9	100	62.6	72.4	55.3	82.8	67.7	100	—	—
平成 28 年度	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI
①②の合計(%)	82.8	85.7	87.3	92.9	55.5	78.5	53.1	85.7	51.4	100	—	—
平成 29 年度	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI
①②の合計(%)	89.6	100	90.2	100	62.3	86.7	54.2	86.6	37.0	93.3	65.0	73.3

GI 2 期生（平成 28 年度～平成 30 年度　現高 3 生）

質問	問１		問２		問３		問４		問５		問７	
平成 28 年度	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI
①②の合計(%)	86.1	100	90.5	100	61.7	100	53.1	100	55.0	100	—	—
平成 29 年度	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI
①②の合計(%)	88.6	95.5	84.9	100	61.6	90.9	58.1	90.9	50.5	100	59.3	72.8
平成 30 年度	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI	高 3	GI
①②の合計(%)	89.4	95.1	90.0	95.3	62.9	85.7	50.0	85.7	62.9	81.0	45.3	76.2

GI 3 期生（平成 29 年度～平成 30 年度　現高 2 生）

質問	問１		問２		問３		問４		問５		問７	
平成 29 年度	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI
①②の合計(%)	85.3	100	86.9	100	64.3	89.5	57.4	89.5	54.1	100	58.5	89.4
平成 30 年度	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI	高 2	GI
①②の合計(%)	88.5	100	87.9	100	58.4	94.5	53.9	74.4	65.4	83.4	48.7	100

GI 4 期生（平成 30 年度　現高 1 生）

質問	問１		問２		問３		問４		問５		問７	
平成 30 年度	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI	高 1	GI

①②の合計(%)	88.5	100	88.5	100	67.5	95.5	61.9	90.0	54.8	100	81.8	100

問いについては以下の通りである。なお回答①②の合計とは各問に対して「そう思う」「ややそう思う」と答えた生徒の割合を示している。なお問５については「はい」と回答した割合を示している。

問１　以前よりも国際問題や多文化共生について興味を持つようになった。
問２　以前より英語力を高めたい，高める必要があると思うようになった。
問３　将来留学したり，仕事で国際的な場で活躍したりしたいと思うようになった。
問４　将来何らかのかたちで，グローバル社会で平和に貢献するリーダーになりたいと思うようになった
問５　今年度，自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に参加した。
問６　（2017 年度に高 3 で有権者だった生徒のみ） 2017 年の衆院選で投票した
問７　私の参加により，変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない

学年全体と GI 生徒を比較すると，全ての項目において，**GI 選択生徒が非常に高い意識**を持っているが分かる。中でも，「問３」「問４」「問５」「問７」の数値が際立って高い。この３つの項目に共通するのは，グローバル社会で活躍することを目標としていくだけでなく，自分の行動によって社会問題解決に貢献できるという意識である。よって，GI における教育実践がグローバルリーダー育成のプラットフォームとしてしっかりと機能していることを示している。

高１からスタートした GI 一期生に続き，二期生が 3 年間の学びを修了した。GI 生の進学先を見ると，一期生・二期生の合計 39 名に対して，28 名が SGU に進学している。そのうち，8 名は課題研究成果を活かした推薦・AO 入試での合格である。SGU での学びと入試が直結した高大接続のひとつと言える。

4 年間にわたり，広島市立大学・広島平和研究所からロバート・ジェイコブス教授が英語で核軍縮・平和構築について講義，生徒論文の添削を実施した。本校のネイティブ教員 2 名が 4 年間常にチームティーチングで授業を行ったこと依って，ジェイコブス教授の指導法を体得することができた。ゆえに，SGH 指定が終わりジェイコブス教授は退任されるが，本校の教員によって大学レベルの知識・指導法による授業を持続させることができる。

（ｃ） 指定後 4 年目以降に検証する成果目標

⑴. 国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合

今年度最終的に上記大学に進学する生徒は，101 名に上った。（高 3 生と過年度生を合わせた 214 名を分母としている。）これは **47.2%**にのぼる。ここでは，国際化に重点を置く大学，すなわち，SGU やグローバル 30 に指定されていた同志社大学，その他の大学の国際関係学系統である。

別項目で分析したが，教職員の多くが「生徒の進路選択に変化が見られた」について，肯定的回答をしているが，実際の生徒の進路も国際化に重点を置く大学に進学して

いるという結果になった。別の角度から言うなら，**SGH 課題研究を通じて，グローバルな視座をもって進路選択をする生徒が増加**したということである。

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
進学者数	85	88	90	105	101

⑵. 海外大学へ進学する生徒の人数

SGH 指定後の 3 年間は海外大学への進学者を輩出してきたが，昨年度は 0 名，今年度は 1 名にとどまった。日本社会が抱える経済事情を考えると，なかなか海外大学進学を選択するのは難しい。しかしながら，上記⑴でみてきたように，国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合は急激に伸び，また，大学で海外に留学する卒業生の数（以下の⑷を参照）も増えてきている。その点を踏まえると，SGH 指定を受けたことは，生徒のグローバル社会への興味関心を高めていると言ってよいであろう。

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
進学者数	2	3	2	0	1

⑶ SGH での課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合

SGH 指定後の平成 26 年度以降に本校を卒業した生徒に対して，「広島女学院中高での SGH を含めた特色教育が，大学の専攻分野の選択に影響を与えましたか」という質問項目のアンケートを実施し，本校の SGH プログラムの影響を定量的に測定した。

「大いに影響を与えた」「やや影響を与えた」に回答した合計の割合を，以下の表として整理した。

年度	平成 26 年度 卒業生	平成 27 年度 卒業生	平成 28 年度 卒業生	平成 29 年度 卒業生	平成 30 年度 卒業生
肯定的 回答の割合	68.0%	64.4%	63.0%	―	―

指定 3 年目以降に検証する成果目標の 65.0%には若干及ばないが，ほぼ，目標値に到達していると言える。来年度以降は，SGH における課題研究を高校生から行ってきた生徒たちのデータを回収する予定であるが，さらに高い結果が出るものと思われる。

⑷ 大学在学中に留学又は海外研修の経験を持つ数

⑶同様のアンケートにおいて，SGH 指定後の平成 26 年度以降に本校を卒業でした生徒の，海外留学・研修参加経験を質問し，本校の SGH プログラムの影響を定量的に測定した。結果は，以下のとおりである。

年度	平成 26 年度 卒業生	平成 27 年度 卒業生	平成 28 年度 卒業生	平成 29 年度 卒業生	平成 30 年度 卒業生
肯定的 回答の割合	60.5%	64.4%	54.3%	－	－

卒業生全体の約 7 割からアンケートを回収した結果，約 6 割の卒業生が海外留学や研修に参加していることになる。目標設定値は 100 名を，現段階で既にクリアしており，SGH の教育プログラムが有効に機能していたと考えてよいだろう。

平成 25 年度，地元の広島大学における「日本人学生に占める留学経験者の割合」は 0.9%であることと比較すると，本校の卒業生がいかにグローバルマインドを備えているかが分かる。その点を踏まえると，本校は日本の学生の留学をけん引していると言っても過言ではない。

添付資料①

広島女学院高等学校教育課程(2018年度入学生)

教科	科目	高1（2018年度）	高2（2019年度）		高3（2020年度）	
		必修	必修	選択	必修	選択
国語	国語総合	国語総合 (6)				
	国語表現					現代文演習 (2)
	現代文A					
	現代文B		現代文B (2)		現代文B (2)	
	古典A			古典演習 (3)		古典演習 (2)
	古典B		古典B (2)		古典B (3)	
地理歴史	世界史A	世界史A (2)	(文系)			
	世界史B		世界史B (4)			世界史B演習 (3)
	日本史A					
	日本史B		日本史B (4)			日本史B演習 (3)
	地理A					
	地理B		地理B (4)			地理B演習 (3)
公民	政治・経済					
	倫理					
	現代社会	現代社会 (2)				
数学	数学Ⅰ	数学Ⅰ (4)		数学ⅠA演習 (2)		数学Ⅲア (8)
						数学Ⅲイ (8)
	数学Ⅱ			数学Ⅱ(理系)ア (6)		数学ⅠⅡAB演習ア (6)
				数学Ⅱ(理系)イ (6)		
	数学Ⅲ			数学B(理系)ア (2)		数学ⅠⅡAB演習イ (6)
				数学B(理系)イ (2)		
	数学A	数学A (2)		数学Ⅱ(文系)ア (4)		数学ⅠA演習 (3)
				数学Ⅱ(文系)イ (4)		
	数学B			数学B(文系)ア (2)		
				数学B(文系)イ (2)		
	数学活用					
理科	科学と人間生活			(文系)		(文系)
	物理基礎			＊科学と人間生活 (2)		化学基礎演習 (2)
	物理		(理系)	化学基礎演習 (2)		生物基礎演習 (2)
	化学基礎	化学基礎 (2)	化学 (4)			
	化学					
	生物基礎	生物基礎 (2)				
	生物					(理系)
	地学基礎			(理系)		化学ア (4)
	地学			物理基礎(2)＋物理(3)		化学イ (4)
	理科課題研究					物理 (5)
				科学と人間生活(2)＋生物(3)		生物 (5)
保健体育	体育	体育 (2)	体育 (2)		体育 (2)	
	保健	保健 (1)	保健 (1)			
芸術	音楽Ⅰ	音楽Ⅰ (2)				
	音楽Ⅱ			音楽Ⅱ (2)		
	音楽Ⅲ					音楽Ⅲ (2)
	美術Ⅰ	美術Ⅰ (2)				
	美術Ⅱ			美術Ⅱ (2)		
	美術Ⅲ					美術Ⅲ (2)
	書道Ⅰ	書道Ⅰ (2)				
	書道Ⅱ			書道Ⅱ (2)		
	書道Ⅲ					書道Ⅲ (2)
外国語	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語基礎					
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ (3)				
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱア (4)			
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲ		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱイ (4)		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲア (4)	
					ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲイ (4)	
	英語表現Ⅰ	英語表現Ⅰ (2)			英語表現Ⅱ ア (2)	
	英語表現Ⅱ		英語表現Ⅱ (2)			
	英語会話	英語会話 (1)		英語会話 (2)	英語表現Ⅱ イ (2)	英語会話 (2)
家庭	家庭基礎	家庭基礎 (2)				
	家庭総合					
	生活ﾃﾞｻﾞｲﾝ					
聖書		聖書 (1)	聖書 (1)		聖書 (1)	
情報	社会と情報	社会と情報 (2)				
	情報の科学					
特別講座				ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ演習 (2)		A･P･English (2)
				実践現代文 (2)		キリスト教 (2)
				朝鮮語 (2)		精神衛生 (2)
				Global Issues (1)		調理 (2)
						Global Issues (1)
総合的な学習		1	2		2	
小計		37	37		16	13～21
特別活動	HR	1	1		1	
合計		38	38		17	13～21

▲必修選択 [ ]選択する科目はその中の１つ　　＊高2文系の「科学と人間生活(2)」は必修。　　卒業単位 99単位＋「体育行事1単位」

広島女学院高等学校教育課程(2017年度入学生)

教科	科目	高1（2017年度）	高2（2018年度）		高3（2019年度）	
		必修	必修	選択	必修	選択
国語	国語総合	国語総合 (6)				
	国語表現					現代文演習 (2)
	現代文A					
	現代文B		現代文B (2)		現代文B (2)	
	古典A			古典演習 (3)		古典演習 (2)
	古典B		古典B (2)		古典B (3)	
地理歴史	世界史A	世界史A (2)				
	世界史B			世界史B (4) ※		世界史B演習 (3)
	日本史A					
	日本史B			日本史B (4) ※		日本史B演習 (3)
	地理A					
	地理B			地理B (4) ※		地理B演習 (3)
公民	政治・経済					
	倫理					
	現代社会	現代社会 (2)				
数学	数学Ⅰ	数学Ⅰ (4)		数学ⅠA演習 (2)		数学Ⅲア (8)
						数学Ⅲイ (8)
	数学Ⅱ			数学Ⅱ(理系)ア (6)		数学ⅠⅡAB演習ア (6)
				数学Ⅱ(理系)イ (6)		
	数学Ⅲ			数学B(理系)ア (2)		数学ⅠⅡAB演習イ (6)
				数学B(理系)イ (2)		
	数学A	数学A (2)		数学Ⅱ(文系)ア (4)		数学ⅠA演習 (3)
				数学Ⅱ(文系)イ (4)		
	数学B			数学B(文系)ア (2)		
				数学B(文系)イ (2)		
	数学活用					
理科	科学と人間生活			(文系)		(文系)
	物理基礎			＊科学と人間生活 (2)		化学基礎演習 (2)
	物理			化学基礎演習 (2)		生物基礎演習 (2)
	化学基礎	化学基礎 (2)				
	化学					
	生物基礎	生物基礎 (2)				
	生物			(理系)		(理系)
	地学基礎			化学 (4)		化学ア (4)
	地学			物理基礎(2)＋物理(3)		化学イ (4)
	理科課題研究					物理 (5)
				科学と人間生活(2)＋生物(3)		生物 (5)
保健体育	体育	体育 (2)	体育 (2)		体育 (2)	
	保健	保健 (1)	保健 (1)			
芸術	音楽Ⅰ	音楽Ⅰ (2)				
	音楽Ⅱ			音楽Ⅱ (2)		
	音楽Ⅲ					音楽Ⅲ (2)
	美術Ⅰ	美術Ⅰ (2)				
	美術Ⅱ			美術Ⅱ (2)		
	美術Ⅲ					美術Ⅲ (2)
	書道Ⅰ	書道Ⅰ (2)				
	書道Ⅱ			書道Ⅱ (2)		
	書道Ⅲ					書道Ⅲ (2)
外国語	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語基礎					
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ (3)				
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱア (5)		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲア (4)	
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲ		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱイ (5)		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲイ (4)	
	英語表現Ⅰ	英語表現Ⅰ (2)			英語表現Ⅱ ア (2)	
	英語表現Ⅱ		英語表現Ⅱ (2)			
	英語会話	英語会話 (1)		英語会話 (2)	英語表現Ⅱ イ (2)	英語会話 (2)
家庭	家庭基礎	家庭基礎 (2)				
	家庭総合					
	生活ﾃﾞｻﾞｲﾝ					
聖書		聖書 (1)	聖書 (1)		聖書 (1)	
情報	社会と情報	社会と情報 (2)				
	情報の科学					
特別講座				ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ演習 (2)		A･P･English (2)
				実践現代文 (2)		キリスト教 (2)
				朝鮮語 (2)		精神衛生 (2)
				Global Issues (1)		調理 (2)
						Global Issues (1)
総合的な学習		1	1		2	
小計		37	37		16	13～21
特別活動	HR	1	1		1	
合計		38	38		17	13～21

▲必修選択 [ ]選択する科目はその中の１つ

※文系は3科目から2科目を選択
理系は、日本史B、地理Bから1科目を選択
＊高2文系の「科学と人間生活(2)」は必修。

卒業単位 99単位＋「体育行事1単位」

広島女学院高等学校教育課程(2016年度入学生)

教科	科目	高1（2016年度） 必修	高2（2017年度） 必修	高2（2017年度） 選択	高3（2018年度） 必修	高3（2018年度） 選択
国語	国語総合	国語総合 (6)				
	国語表現					
	現代文A					現代文演習 (2)
	現代文B		現代文B (2)		現代文B (2)	
	古典A			古典演習 (3)		古典演習 (2)
	古典B		古典B (2)		古典B (3)	
地理歴史	世界史A	世界史A (2)				
	世界史B			世界史B (4) ※		世界史B演習 (3)
	日本史A					
	日本史B			日本史B (4) ※		日本史B演習 (3)
	地理A					
	地理B			地理B (4) ※		地理B演習 (3)
公民	政治・経済					
	倫理					
	現代社会	現代社会(2)				
数学	数学Ⅰ	数学Ⅰ (4)		数学ⅠA演習 (2)		数学Ⅲｱ (8)
						数学Ⅲｲ (8)
	数学Ⅱ			数学Ⅱ(理系)ア (6)		数学ⅠⅡAB演習ｱ (6)
				数学Ⅱ(理系)イ (6)		
	数学Ⅲ			数学B(理系)ア (2)		数学ⅠⅡAB演習ｲ (6)
				数学B(理系)イ (2)		
	数学A	数学A (2)		数学Ⅱ(文系)ア (4)		数学ⅠA演習 (3)
				数学Ⅱ(文系)イ (4)		
	数学B			数学B(文系)ア (2)		
				数学B(文系)イ (2)		
	数学活用					
理科	科学と人間生活	(文系)		(文系)		(文系)
	物理基礎	科学と人間生活 (2)		生物基礎演習 (1)		生物基礎演習 (2)
	物理	(理系)		化学基礎 (3)		化学基礎演習 (2)
	化学基礎	物理基礎 (2)				
	化学					
	生物基礎	生物基礎 (2)				
	生物			(理系)		(理系)
	地学基礎			化学基礎(2)＋化学(3)		化学ア (5)
	地学			物理 (4)		化学イ (5)
	理科課題研究					物理 (4)
				生物 (4)		生物 (4)
保健体育	体育	体育 (2)	体育 (2)		体育 (2)	
	保健	保健 (1)	保健 (1)			
芸術	音楽Ⅰ	音楽Ⅰ (2)		音楽Ⅱ (2)		
	音楽Ⅱ					音楽Ⅲ (2)
	音楽Ⅲ					
	美術Ⅰ	美術Ⅰ (2)		美術Ⅱ (2)		
	美術Ⅱ					美術Ⅲ (2)
	美術Ⅲ					
	書道Ⅰ	書道Ⅰ (2)				
	書道Ⅱ			書道Ⅱ (2)		
	書道Ⅲ					書道Ⅲ (2)
外国語	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語基礎					
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ (3)				
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱ		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱｱ (5)		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲｱ (5)	
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲ		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅱｲ (5)		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅲｲ (5)	
	英語表現Ⅰ	英語表現Ⅰ (2)			英語表現Ⅱ ｱ (2)	
	英語表現Ⅱ		英語表現Ⅱ (2)			
	英語会話	英語会話 (1)		英語会話 (2)	英語表現Ⅱ ｲ (2)	英語会話 (2)
家庭	家庭基礎	家庭基礎 (2)				
	家庭総合					
	生活ﾃﾞｻﾞｲﾝ					
聖書		聖書 (1)	聖書 (1)		聖書 (1)	
情報	社会と情報	社会と情報 (2)				
	情報の科学					
特別講座				ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ演習 (2)		A･P･English (2)
				実践現代文 (2)		キリスト教 (2)
				実践古典 (2)		精神衛生 (2)
				朝鮮語 (2)		調理 (2)
				Global Issues (1)		Global Issues (1)
総合的な学習		1	1		1	
小計		37	37		16	14～21
特別活動	HR	1	1		1	
合計		38	38		17	14～21

▲必修選択 ［ ］選択する科目はその中の１つ

※文系は3科目から2科目を選択
理系は、日本史B、地理Bから1科目を選択

卒業単位 99単位＋「体育行事1単位」

広島女学院中学校教育課程

教　科	1　年	2　年	3　年
国　語	140	140	175
社　会	地　理　105	歴　史　140	公　民　140
数　学	175	175	210
理　科	物　化　70 生　地　70 ┐140	物　化　70 生　地　70 ┐140	物　化　70 生　地　70 ┐140
音　楽	70	70	35
美　術	70	35	35
保健・体育	105	105	105
技術・家庭	70	70	35
聖　書	35	35	35
特別活動 （ＨＲ）	35	35	35
総合的な学習	70	70	70
英　語	210 (会話35-分級) (英語175-分級)	210 (会話35-分級) (英語175のうち分級35)	210 (会話35-分級) (英語175)
合　計	1225	1225	1225

(1)　この表は年間の総授業時間数を示す。
(2)　「道徳」の授業を行わず、「聖書」をもってこれに代える。

添付資料②

2018 年度

第１回　広島女学院中学高等学校 SGH 研究発表会

主催　広島女学院中学高等学校

研　究　目　標：ＳＧＨ校連携による課題研究の深化

研究発表会テーマ：多様な視座から課題研究（平和構築・核軍縮）を発展させる

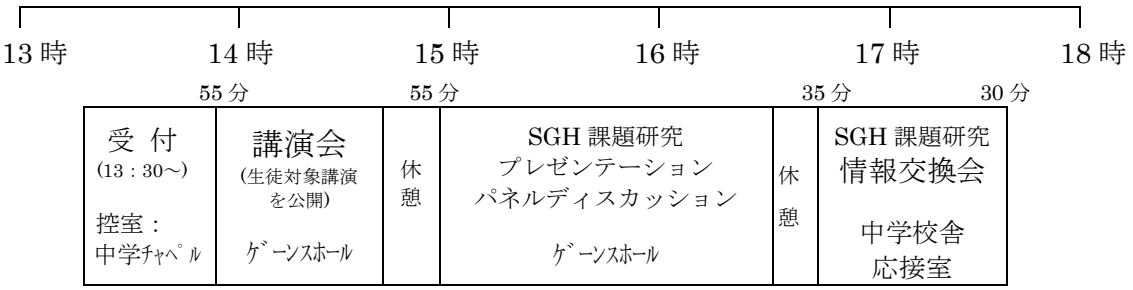
◆会　期　2018 年 6 月 15 日（金）13 時 55 分～17 時 30 分(受付 13 時 30 分～)

◆会　場　広島女学院中学高等学校

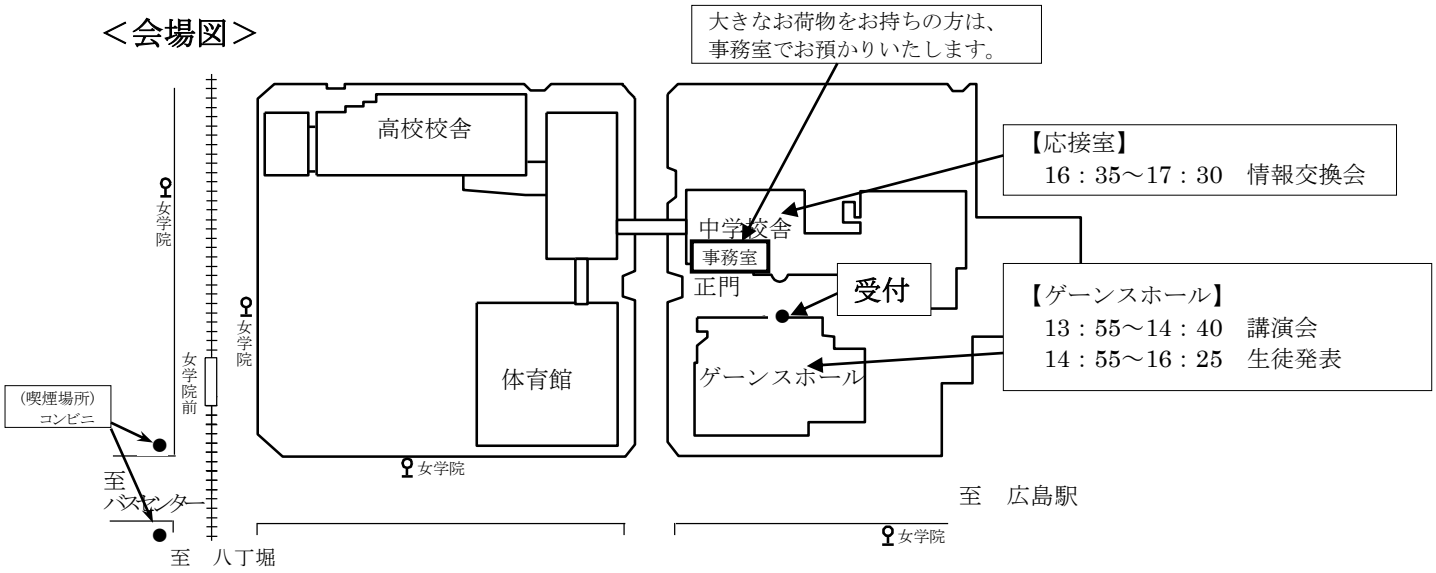
〒730-0014　広島市中区上幟町 11-32

TEL　082-228-4131　　FAX　082-227-5376

日　　程



＜会場図＞



◎封入物の確認◎

・プログラム　　・2018 年度 シラバス（Peace Studies）　　・学校案内
・2017 年度　SGH 研究開発完了報告書　　・2017 Our Global Experiences Booklet（生徒文集）
・生徒発表資料　　・アンケート用紙

◎お願い◎

・大きなお荷物は事務室にてお預かり致します。
・校地内は全面禁煙です。喫煙の際は、電車通り沿いのコンビニエンスストア前をご利用ください。
・名札はお帰りの際にご返却ください。各会場の出入り口付近で回収しております。

◎アンケートご協力のお願い◎

お手数ではございますが、アンケートにお答えいただけましたら幸いです。
ご回答は、アンケート用紙（別紙）に直接ご記入の上、お帰りの際に出口付近の回収ボックスにご提出いただくか、右記 QR コードを読み取り、Web フォームにご入力ください。
フォームは 6 月 19 日（火）までにご入力をお願いいたします。

（フォーム URL: http://bit.ly/2LMm7am）

◆生徒対象講演会　平和を祈る週 特別礼拝（13:55～14:40　ゲーンスホール）

※高校生対象の講演を公開。
※礼拝形式で実施します。下記をご参照ください。

演　　題　「核廃絶に向けて動き出す世界」

講　　師　ピースボート共同代表・核兵器廃絶国際キャンペーン（ＩＣＡＮ）国際運営委員
川崎（かわさき）　哲（あきら）　氏

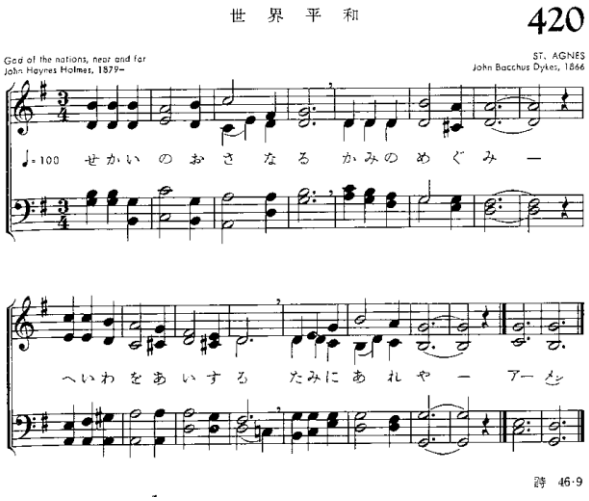
講師紹介

ピースボート共同代表。核兵器廃絶国際キャンペーン（ＩＣＡＮ）国際運営委員。２００８年から広島・長崎の被爆者と世界を回る「ヒバクシャ地球一周　証言の航海」プロジェクトを実施。２００９～１０年、日豪両政府主導の「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」でＮＧＯアドバイザーをつとめた。２０１４年５月、「集団的自衛権問題研究会」をたちあげ、同代表。著書『核拡散』（岩波新書）で日本平和学会第１回平和研究奨励賞を受賞。雑誌『世界』（岩波書店）をはじめ国内外のメディアに寄稿多数。核兵器廃絶のためのＮＧＯネットワーク「アボリション２０００」の活動に１９９８年より参加、２０１６年まで調整委員をつとめた。
恵泉女学園大学非常勤講師（２００７年度～「軍縮と核」「グローバルガバナンス論」）。東京外国語大学の非常勤講師として「コンフリクト耐性をそなえた国際職業人教育」事業に参画（２０１４年度～）。
２０１７年度は以下の大学で非常勤講師：
早稲田大学・文学学術院（アジアにおける人間の安全保障：前期）
日本平和学会会員、第２２期・２３期理事（２０１６～２０１９年）。日本軍縮学会会員・編集委員（２０１１年～）。
原子力市民委員会、第２部会（核廃棄物部会）メンバー。

○奏楽：長谷川　史　先生（音楽教諭）

前奏：　F. メンデルスゾーン作曲
　　ソナタ第１番　第２楽章

後奏：　K. ニュステッド　英雄的小品

○讃美歌

１．
世界のおさなる　神のめぐみ、
平和をあいする　民にあれや。

５．
神よ、すみやかに　あたえたまえ、
平和とあいとの　きよき朝を。

○聖書

「平和を実現する人々は、幸いである、
　　その人たちは神の子と呼ばれる。」

マタイによる福音書　５章９節

◆SGH 課題研究　生徒プレゼンテーション＆パネルディスカッション

（14：55～16：25　ゲーンスホール）

参加校による「ヒロシマ・ナガサキ、核軍縮などの学びと実践」をテーマにしたプレゼンテーションの後、パネルディスカッションを行います。

＜発表校紹介＞

渋谷教育学園渋谷中学高等学校
東京・渋谷にある開校 23 年目の私立中高一貫・男女共学校です。「自調自考の力を伸ばす」「国際人としての資質を養う」「高い倫理感を育てる」を教育目標に、国際社会で活躍できる人物の育成に努めています。帰国生も積極的に受け入れ、海外交流も盛んです。SGH の取り組みでは、グローバル問題の知識を基に解決案を考え、行動し発信できる人材を育てることを目的として、「人間の安全保障」をテーマに複数の教科が横断して多面的・複合的な学習を行っています。
長崎県立長崎東中学校・長崎東高等学校
今年度で創立 70 周年、SGH の指定を受けて 4 年目を迎えました。校訓はなく、「ともによき世を創る」という旧制長崎中学校卒の山本健吉先生のお言葉の元、先生方と生徒がともに協力し合いながら、日々文武両道に励んでいます。1 年次には、「平和」、「水」、「医療」の 3 つの班に分かれて、長崎とつながるグローバルな課題を発見する「ナガサキタイム」という授業が週に 1 時間あります。2 年次からは、普通科と国際科に分かれます。普通科では、現在長崎が抱える問題の解決策について研究する「地方創世」を、国際科では、グローバルな課題をさらに深く研究する「グローバルスタディー」を行なっています。
広島女学院中学高等学校
今年度創立 132 周年となる私立中高一貫・女子校です。「我らは神とともに働く者なり」を学院聖句とし、自己の確立、他者との共生、平和への貢献を教育の基盤にしています、SGH 指定 5 年目を迎えました。6 年間一貫して「平和構築(核軍縮)」を課題研究にしており、中学ではヒロシマの記憶の継承と核軍縮をめぐる議論、高校では国内外の社会課題のケーススタディを行っています。国内外からヒロシマを訪れる人々に平和公園を案内したり、本校生徒が海外に行ってヒロシマを発信したりする活動も盛んです。

発表者	発表テーマ	
渋谷教育学園渋谷中学高等学校 高2　大谷（おおや）　実紅乃（みくの） 高2　木村（きむら）　美咲（みさき） 高2　山元（やまもと）　佑紀奈（ゆきな）	「平和学習からの学びと私たちのこれから」	**講評・ファシリテーター** ピースボート共同代表 核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）国際運営委員 川崎（かわさき）　哲（あきら）　氏 **司会** グローバル教育推進部　副部長 野中（のなか）　理恵（りえ）　教諭
長崎県立長崎東高等学校 高3　橋本（はしもと）　彩華（あやか） 高3　溝口（みぞぐち）　祥帆（さちほ）	「平和の副教材を用いて，世界の人々の平和への認識を深め，意識を高められるか。」	
広島女学院中学高等学校 高3　池田（いけだ）　穂乃花（ほのか） 高2　庭田（にわた）　杏珠（あんじゅ）	「核なき世界を実現するために共感の輪を広げる」	

◆SGH 課題研究　情報交換会（16：35～17：30　中学校舎　応接室）

本校での実践を紹介するとともに、皆さんからの質問等をもとに進行します。

2018 年度

第２回　広島女学院中学高等学校 SGH 研究発表会

主催　広島女学院中学高等学校

研究発表会テーマ：ＳＧＨ5 年間の評価と、次年度以降の取り組みについて

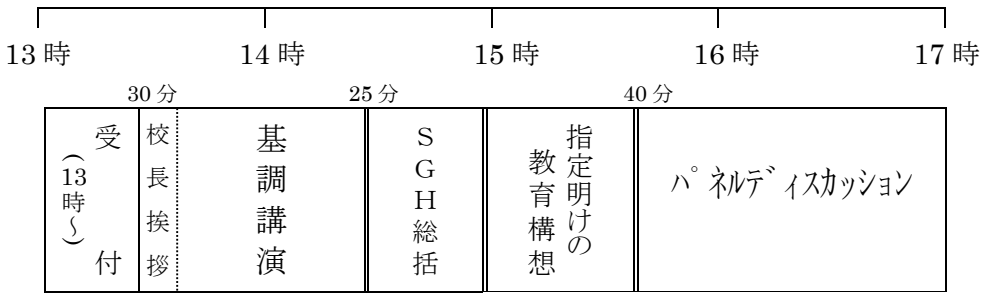
◆会　期　2019 年 2 月 23 日（土）13 時 30 分～17 時 00 分(受付 13 時 00 分～)

◆会　場　広島女学院中学高等学校　ゲーンスホール

〒730-0014　広島市中区上幟町 11-32

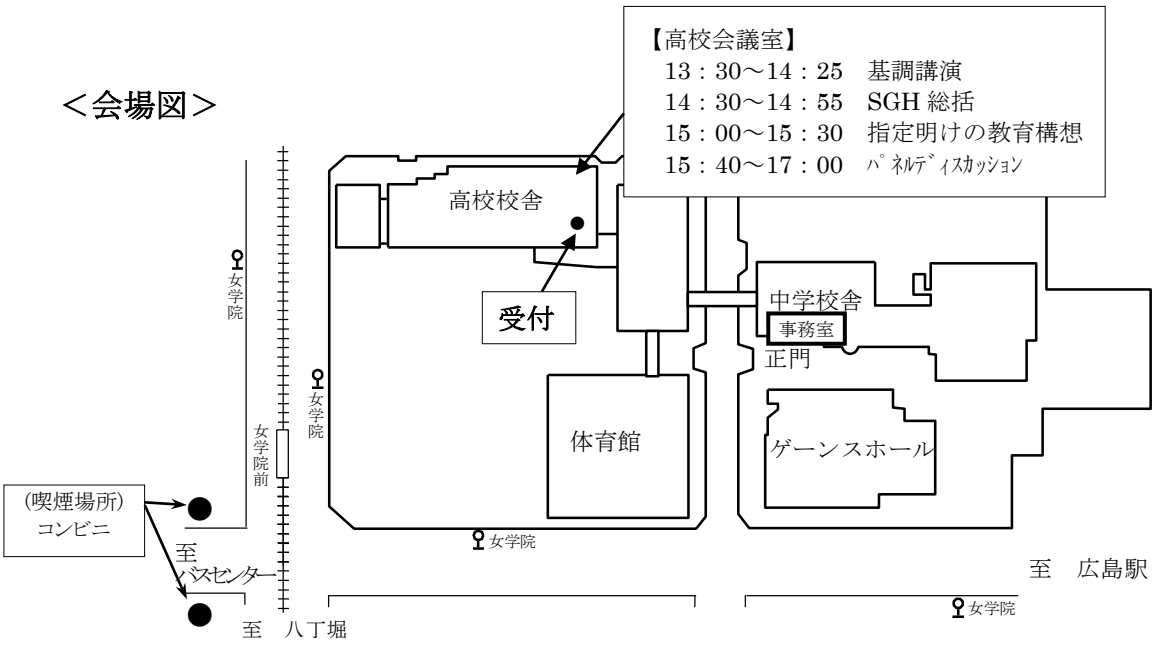
TEL　082-228-4131　　FAX　082-227-5376

日　　程



※会場はすべて<u>高校会議室</u>となります。

＜会場図＞



◎封入物の確認◎

・プログラム
・発表資料（SGH 総括）
・発表資料（SGH 指定明けの教育構想）
・2018 年度 シラバス（Peace Studies）
・学校案内
・2017 年度　SGH 研究開発完了報告書
・2017 Our Global Experiences Booklet（生徒文集）
・アンケート用紙

13：30～13：40　校長挨拶

13：40～14：20　基調講演

演　　題　「グローバル化と AI が進展した 2040 年の社会で幸せな人生を歩むために」

講　　師　Institution for a Global Society(IGS)株式会社　代表取締役
福原　正大 氏

講師紹介

欧州経営大学院 INSEAD にて MBA、グランゼコール HEC（Paris）にて国際金融修士（with Honors）、筑波大学大学院企業科学博士課程修了（経営学博士）。1992 年に株式会社東京銀行（現　三菱東京 UFJ 銀行）入行後、2000 年に世界最大の資産運用会社バークレイズ・グローバル・インベスターズ株式会社に入社。2005 年に最年少 Managing Director、取締役就任。東大・京大・慶大・理科大の 4 大学 VC が出資する AI とビッグデータを教育･人事に応用する Institution for a Global Society(IGS)を 2010 年設立。CEO。一橋大学院特任教授（グローバルリーダーシップ論）、慶應義塾大学特任教授（AI のビジネス応用）、広島女学院など多くの学校のグローバル教育アドバイザーを兼務。大和書房『ハーバード、オックスフォード…世界のトップスクールが実践する考える力の磨き方』、講談社『世界のトップスクールの日本人』、JP プレス「教育」、ダイヤモンド社『なぜ、日本では本物のエリートが育たないのか？』などの著作活動、各種コラムの執筆など、幅広い活動を行う。

14：25～14：55　ＳＧＨ総括　　**安宅　弘展 教諭**

15：00～15：30　ＳＧＨ指定明けの教育構想　　**宇津　　剛　教諭**

15：40～17：00　パネルディスカッション

広島女学院中学高等学校の SGH の総括や、指定明けの教育構想についてパネルディスカッションを行います。

パネリスト
渋谷教育学園渋谷中学高等学校　副校長
高際　伊都子　氏
ＩＧＳ株式会社　代表取締役
福原　正大　氏
株式会社水王舎　代表
出口　汪　氏
同志社大学グローバル地域文化学部（本校卒業生）
今村　るな　氏
広島女学院中学高等学校　校長
渡辺　信一

ファシリテーター
広島女学院中学高等学校　教頭
高見　知伸

パネリスト紹介

渋谷教育学園渋谷中学高等学校　副校長　高際 伊都子 氏

渋谷教育学園渋谷中学高等学校は、東京・渋谷にある開校 23 年目の私立中高一貫・男女共学校。「自調自考の力を伸ばす」「国際人としての資質を養う」「高い倫理感を育てる」を教育目標に、国際社会で活躍できる人物の育成に努めている。帰国生も積極的に受け入れ、海外交流も盛ん。SGH の取り組みでは、グローバル問題の知識を基に解決案を考え、行動し発信できる人材を育てることを目的として、「人間の安全保障」をテーマに複数の教科が横断して多面的・複合的な学習を行っている。

ＩＧＳ株式会社　代表取締役　福原 正大 氏

※基調講演の講師紹介をご参照ください。

株式会社水王舎　代表　出口 汪 氏

1955 年東京都生まれ。関西学院大学大学院博士課程修了。代々木ゼミナールを経て、現在、東進ハイスクール講師、広島女学院大学客員教授。1994 年に総合予備校 S.P.S を、2000 年に水王舎を設立。NPO 法人 BURNING MIND 理事長。「すべての学力の土台は言語運用能力である」という信念に基づき、筋道を立てて考える“論理力”育成プログラム『論理エンジン』を書き上げ、多数の学校・社会人の支持を得ている。また、「論理文章能力検定」を開発し、「読解力」「思考力」「表現力」を支える「論理力」の養成にも力を入れている。『出口の現代文レベル別問題集』シリーズなど、多くの受験参考書の著者としても知られており、累計販売部数 600 万部を誇る「現代文のカリスマ講師」である。

◎お願い◎

・大きなお荷物は事務室にてお預かり致します。
・校地内は全面禁煙です。喫煙の際は、電車通り沿いのコンビニエンスストア前をご利用ください。
・名札はお帰りの際にご返却ください。会場の出入り口付近で回収しております。

◎アンケートご協力のお願い◎

お手数ではございますが、アンケートにお答えいただけましたら幸いです。
ご回答は、アンケート用紙（別紙）に直接ご記入の上、お帰りの際に出口付近の回収ボックスにご提出いただくか、右記 QR コードを読み取り、Web フォームにご入力ください。
フォームは 2 月 26 日（火）までにご入力をお願いいたします。
（フォーム URL: https://goo.gl/forms/8yB3yacndhip9XL23）

添付資料③

広島女学院3ポリシー，キーコンピテンシー案(ver.2.0)

領域	アドミッションポリシー	カリキュラムポリシー		ディプロマポリシー	キー・コンピテンシー	
	学校の教育の特色や教育理念に基づき，<u>どのような生徒を求めるか</u>を定めた基本方針	学校が<u>どのような教育課程を編成し，どのような教育内容・方法を実施するかを定めた</u>基本方針		<u>どのような力を身につけた生徒に卒業を認定するか</u>を定めた基本方針	<u>６年間の教育課程で育んでほしい能力</u>（社会で求められるであろう汎用的能力）	活用
学ぶ	・自分の可能性を実現するために，幅広い分野について積極的に学び，これからの社会において求められる豊かな教養を身につけたい人	キリスト教主義に立脚（自分を愛するように他者を愛する）	主体性の伸張 ・一人一人の可能性を実現するために，幅広い学問領域を，自由にかつ積極的に学ぶ機会を設けます。→EP ・各教科における学びの過程では一人一人が主体的・協働的に取り組むことを重視します。 **→ALの積極的導入，課題研究の導入**	・旺盛な知的好奇心に基づく主体的な学びを通して，豊かな教養を身につけた人	知識・技能 各教科における知識・技能 知的好奇心 楽しみながら主体的に学ぶ 課題探求力 科学的で体系的な探究の手法	キー・コンピテンシーの共有による教科横断的な取り組みの推進 →多面的な評価による生徒の自己肯定感の向上
認める	・自分を大切にするだけでなく，他者も同じように大切にして，お互いを尊重しあうことができるようになりたい人		人間理解の深化 ・自分も含めた全ての人を尊重できるようになるための機会を設けます。**→リレーションづくりのワークショップ拡充（総合的な探究の時間）** ・国内外を問わず人権をめぐる様々な社会的課題を学習する機会を設けます。**→人権学習の充実**	・自分とは異なる他者の視座に立ち，寄り添うことができる人	傾聴力 相手の意見を丁寧に聴く 想像力 相手と同じ目線に立つ 関係構築力 他者といい関係を創る	
繋がる	・多様な価値観を持った人々と出会い，平和な世界の実現に向けて何らかの形で貢献できるようになりたい人		グローバルマインドの育成 ・海外研修や交流会などのプログラムによって，多様な価値観・文化的背景を持った人々と出会い，対話し，合意を形成する機会を設けます。**→海外研究の継続実施** ・平和な社会の実現に何らかの形で貢献できるための資質・能力を育成します。**→PSの発展・拡充**	・異なる価値観を持つ人々と協働して，平和構築・社会問題解決に貢献する人	課題発見力 現状を分析し，課題を発見する 計画実践力 課題の解決に向けたプロセスを明らかにする 合意形成力 自分の意見をわかりやすく伝える	

添付資料④

キー・コンピテンシー評価ルーブリック

ver.2.0

領域	評価観点	評価尺度			
		4（S）	3（A）	2（B）	1（C）
		求めるレベルを越えて達成している	求めるレベルを十分に達成している	求めているレベルを達成できていないが，努力は十分に認められる	求めているレベルを達成するには，まだ大きな課題がある
学ぶ 自然や社会のことに目を向け，真摯に学ぶ	**教科学力・技能** 各教科における学習内容				
	知的好奇心 習得した知識をもとに，幅広い事柄に目を向ける	確固たる課題意識から学習に取り組み，強い好奇心のもと学習を進めた結果，関連事項にも課題意識を広げることができ，他教科での学習や学校外での活動においても成果を挙げることができた。	自らの課題意識から学習に取り組み，さらに興味を深めることとともに，他教科の内容や学校外での活動などと関連づけ，他の分野にも関心を広げることができた。	与えられた課題に取り組む中で，他教科における学びと関連づけることができ，学習内容について興味を深めることができた。	与えられた課題に取り組んだが，教科内・活動内の範囲で完結してしまい，興味を深めることができなかった。
	課題探求力 自ら設定した課題を主体的に探究していく	先行研究について詳細に検討することを通して，そこで得た研究手法やデータ等を用いて，自ら新たな課題探求方法について考察し，実行することができた。	授業等で習得した手順に基づきつつも，主体的に先行研究や資料について調べるなどして課題研究を進めることができた。	設定された手順にしたがい，適切な方法で課題研究を進めていくことができた。	設定された手順にしたがって，課題研究を進めることができなかった。
認める 他者を尊重するスキル，集団を形成するスキル	**傾聴力** 相手の意見を丁寧に聴く	前段階に加えて， 相手の話に対して効果的な質問をして，相手の話を引き出したり，発展させたりすることができた。	前段階に加えて， 相手の気持ちをくみ取った上で，適切な言葉を返し，相手の意見を丁寧に聴くことができた。	・前段階に加えて， 相手の話のキーワードをオウム返しで繰り返すことができた。 ・相手の人間性を肯定する繰り返しができた。	・相手が話しやすいように笑顔で聞くことができた。 ・相手の話に適度にうなずいたり，あいづちをいれたりすることができた。
	想像力 相手と同じ目線に立つ	前段階に加えて、 ・自分とは異なる背景・価値観をもつ人を排除するのではなく，理解し尊重しながら協働することができた。	前段階に加えて、 ・自分とは異なる背景・価値観を持つ人に出会った時、その人の背景を想像できた。 ・自分とは異なる背景・価値観を持つ人と積極的に関わりあうことができた。	前段階に加えて、 ・自分とは異なる背景・価値観をもたらす要因について学ぼうとした。	・自分とは異なる背景・価値観を持つ人がいることを認識できた。 ・(まずは) 相手の考えを全否定しなかった。
	関係構築力 他者といい関係を創る	・社会にとって重要な課題を独りよがりに解決しようとするのではなく、他者に課題の重要性を理解してもらい、協働する仲間を増やすことができた。 ・グループワークに積極的に参加してチームに多大な貢献をすることができた。	・メンバーの発言を整理し，関連づけた上で発言するなどしてメンバーの積極的な参加を促すことができた。 ・チームの状況に応じて，率先して雰囲気をよくするために発言・行動することができた。	・他者のために働こうとする（下記のAかBの働きができる）A：問題解決のためにリーダーシップを発揮して話し合いを主導できた　B：チームの中でリーダーを支え，他のメンバーの話し合いへの参加を促すことができた	・一人で課題を抱えず，他者と協力する姿勢をもつことができた ・チームの中で何らかの自分の役割をもつことができた。
繋がる 社会と繋がる実践的な力で，異なる価値観を持つ人々と協働して平和構築に貢献する能力	**課題発見力** 現状を分析し，課題を発見する	自ら準備した質・量ともに十分な資料を分析した上で，グローバル規模の視点から現代社会をとらえ，解決すべき社会的な課題（問題点）を複数発見し，相互に関連づけることができた。	自ら準備した多様な資料（データ）を分析した上で，解決すべき複数の社会的な課題（問題点）を発見し，相互に関連づけることができた。	与えられた資料（データ）を分析した上で，そこから社会的な課題（問題点）を発見できた。	資料を分析したが，そこから社会的な課題（問題点）を発見できなかった。
	計画力 課題の解決に向けたプロセスを明らかにして準備する	現在の国内・国際社会における動向と関連づけながら，課題解決に向けた段階的な手順を，多面的な視点から自分で設定し，説得力の高い現実的な解決策を提案できた。	現在の社会的状況と関連づけながら，その課題解決に向けた段階的な手順を自分で設定し，説得力の高い解決策を提案できた。	現在の社会的状況に触れながら，ある程度具体的で説得力のある解決策を提案できた。	一応解決策は提案できたが，具体性のないものだった。
	合意形成力 自分の意見をわかりやすく伝える	具体的な事例を挙げながら，高度な専門用語を適切に用い，明快な論理構成で自分の考えを述べることができ，相手にも十分に自分の考えを伝えることができた。	専門的な用語を用いながら，明快な論理構成で自分の考えを述べることができ，相手にも十分に自分の考えを伝えることができた。	若干情報不足や飛躍が見られるものの，定型的な構成に基づいておおむね論理的に述べ，相手に自分の考えを伝えることができた。	形式的には定型的な構成をとったが，相手に内容をうまく伝えられなかった。